

---

# 誰力為ニ、華ハ薰ル

椿屋カヲル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

誰力為一、華ハ薰ル

### 【Zコード】

N7262Y

### 【作者名】

椿屋カヲル

### 【あらすじ】

大正9年 帝都

財閥令嬢、二階堂櫻子の住む自宅の屋敷では、華やかな夜会が開かれた。

あなたのチョイスで主人公の運命が変わります。序章の後は、お好みの選択肢に進んでください。他サイトで投稿中の同名小説のR15版女性向け恋愛物です。

大正9年（1920年）春

雲の無い天には、星も無く、細くて明るい月が浮かんでいる。

下界のある場所で、真っ盛りという状態の櫻の木があった。それは、月光を吸う度に、神秘的な雰囲気を撒き散らすがごとく、花びらをさらさらと舞わせていた。

その美しいような、妖しいような櫻の下で、一人の男が寝転んでいる。

手を胸のあたりで組んで、まるで瞑想でもしているかのように、瞼を閉じたままだった。

辺りは音もない風が吹く闇夜で、あるのはほんのりとした櫻と土のにおいだけ。

残りは、その額や、頬に、花びらが積もつていく感触だけが、男の世界の全てである。

「これが、おまえなんだね。」

男は、自分の手のひらに積もつた花びらを握り締めて、額に近づけてその匂いを吸つた。

どこか懐かしいような、清廉な香氣に陶酔する。

「この大木の中の筋を通つて、綺麗な桜の花となつて、こうして俺の元に降り注いでくれているんだね。」

夢見るよじに、つぶやいている。

しかし、櫻は何も語りかけることもなく、ただただ、見事な花弁を散らしていた。

夜明けには、男の姿は何処にも無かつた。

その数日後、この櫻の木の根元で、死体が埋められているのを、近所の住民が発見した。

随分昔から土の中にあつたらしいそれは、すっかり白骨化していた。しかし、警察が、掘り起こして確認すると、その骸骨には頭の部分がなかつた。

辺りを掘り起こして搜索しても、髑髏は、終に発見されなかつた。

## 登場人物ノ紹介

にかいどう さくらん  
一階堂 櫻子

財閥の娘。仏蘭西の血が混じっている

女学校の国語教師

にかいどう とうま  
一階堂 桃真

母方のいとこ。養子となり、櫻子の兄。

帝国陸軍少佐。

にれざき れんいち  
榆崎蓮一

海外に人脉を持つ榆崎商会の社長。

一代で身を起こした成金で外国語に堪能。

関東出身だが、神戸で会社を興し帝都に本社を移した。

関西の商人の話し方の影響を受けている為、独特の話し方をする。

きょうじく きくや  
京極菊弥

御典医の家柄で関西出身。現在は、陸軍医。

一階堂家とは懇意であり、櫻子とは幼馴染。

一階堂家から帝都の大学に通い、卒業。

さいき はぎと  
斎木萩人

一階堂家の家令。

澳大利の血を半分受け継いでいる。灰色の瞳を持つ。

一階堂家の書生として、音楽大学の学生となる。

留学先の独逸で海難事故により、指を痛めて帰国。

神谷 藤隆  
かみや ふじたか

若いが優秀な梅造の秘書の一人。  
破産した神谷洋装店の御曹司だった。

春日玲子  
かすが れいこ

春日財閥の長女。櫻子の親友。

日本人形のような容姿で、穏やかな性格だが、かなり天然。

春日葵  
かすが あおい

玲子の弟

頭脳明晰で容姿端麗。

時々、女性に間違われる。

一階堂 梅造  
にかいどう うめぞう

一階堂園子（故人）  
にかいどう そのこ

華族出身。櫻子の母で、英國の血を半分受け継いでいる。

冬馬撫子  
とうま なでこ

一階堂家の長女で、櫻子の姉。

若手官僚に嫁ぎ、現在は夫の洋行に一緒にいて英國にいる。

大正9年 帝都

この時代、明治初期にかけて花開き始めた西洋を取り入れた文化が、大正デモクラシーと呼ばれる民主主義的な風潮の後押しを受けて、享楽的な文化を新しく生み出していった。

その反面、スラムの形成、民衆騒擾の発生、労働争議の激化など社会的な矛盾が深まっていったのもこの時期である。

日本史上、一番短いとされるこの時代は、大日本帝国の最盛、定期であつたと後世は語り、経済界で名を馳せた富豪達は「財閥」と呼ばれるようになつた。

その時代に、財閥令嬢に生まれた二階堂櫻子といつ女性は、自室の窓から、満月を見上げてため息をついていた。

「はあ…」

秋の夜会と称して、この屋敷では今夜、盛大な宴が催される事になつていた。

階下の大広間には、既に招待客が集まりかけていて、この日のために呼び寄せた楽団が、優雅な音楽を演奏している。

最近、いつにもまして自宅で夜会開かれる機会が、増えたようだ。主催者的一族として、来てくださつたお客様にもてなしをするのが嫌なわけではないが、こうも頻繁だと、さすがに気疲れする。

その時、部屋を扉を軽く叩く音がした。

「櫻子、もう客人がお見えになつてゐるぞ。いつまで部屋にこもつてゐるつもりなんだ。」

兄の桃真の声だった。

扉を開けると、洋装に身を固めた桃真が腕を組んで立つていた。

「あら、兄様の洋装姿なんて久しぶりに見たわ。」

三十歳にして、帝国陸軍少佐である兄は、いつも軍服か和装しか見たことがなかつた。そういえば、そんなに「流行つてゐるから」と、紅茶で有名なカフェに一緒に行つて欲しいと懇願しても、渋つた過去がある。

最後には、櫻子におれて、不機嫌そうな顔をして、後ろをついて行つてくれはしたが。

「あら、兄様、じゃない。父様から、櫻子はどうしたのか、と言われたのだ。もしや、体調でも悪いのかと思つたが…さぼつたか、その顔は。」

「ちがうわ、ちょっと髪のほつれを、直していたのよ。」

後ろ髪の束をねじりあげて髪にしたこの髪型は、花月巻きと呼ばれるものだ。それに、白金製のあまり派手ではない簪を挿した。

「ほう…、夜会服を新調したのか。それが父様が、神谷さんに頼んだ、と言つていたものか？」

神谷さんは、数年前から父の秘書として働いている青年の名前だ。実家が、有名な洋装店で、彼自身も仕立てに関しては、素晴らしい技術を持つてゐるそうだ。

しかし、寸法を測つたのは屋敷の女中で、どんな服が着たいかをスケッチに描いて、要望を沿えて送つただけにも関わらず、立派な服を仕立てて送つてくれた。

「少し、地味すぎないか？」

姿見に映つた自分は、新調された紺色の夜会服で飾つている。

なるべく地味にしてくれ、と懇願したおかげで、襟も首周りを覆つているし、袖も、肘まで伸びている。

しかし、仕立てのおかげで、お堅い女性といつよりは、控えめな印象を与える服に仕上がつていた。

腰周りの位置が高い場所に置かれてあり、柔らかで直線的なドレスだつた。何よりも、コルセットを使わないで済むのがいい。

神谷が言うには、仏蘭西の流行を取り入れてみたのだそうだ。

櫻子の母は、華族の出身であったが、仏蘭西人の血を半分受け継

いでいた。

その為、櫻子は、目や肌、髪の色は、日本人の特徴をそつくり受け継いでいたが、顔の彫が深くて、他人からは艶やかに映った。ゆえに、周囲からは、派手好みと勝手に勘違いされてしまう」とも、櫻子が地味な装いを好む理由の一つだったのだ。

「少なくとも、俺の好みではない。」

「兄様の好みにしてどうするのよ。私は今まで、一番気に入っているわ。」

「殿方の視線を少しばかり考慮せよ、ということだ。夜会とはな、麗しい淑女が、紳士と出会う為の場所でもあるのだぞ。世の女性達に比べて、令嬢であるおまえはその機会には恵まれているはずなのだからな。にもかかわらずだ。」

桃真の脳裏にはある出来事が浮かんだ。

「この間も、玲子嬢と浅草に行つた時に、絡んできたならず者たちを蹴散らしたというではないか。全くあきれた事だ。」

玲子嬢というのは、春日財閥の娘で、私の一番の友人で、よく、一緒に出かけている。きっと、今日の夜会でも会えるはずだ。

「あら? どうしてあきられなくちゃいけないのよ。玲子も一緒に居たのよ? 撃退しなければ危害を加えられていたかもしれないじゃないの。」

「おまえはそれでも、女学校の教師か?」

櫻子は、国語の教師として、教壇で教えるのが職業だった。

「そういう時はだな、まず周囲の人助けを求めるのだ、普通は!」

浅草にはいつも人が居るが、どうその事だったので、誰もが様子を伺っているだけであつたから、いうことになつたのだ。

「いくら、剣道で三段を持つてはいるといつてもだな……。」

「四段よ、兄様。」

「……おかげで、一階堂家の娘は、はねつかえりで娘らしかぬ、とこう噂だ。このまま、だらだらと年を重ねたら、嫁にもらつてくれ

ださる方もなくなるぞ。」

桃真は、櫻子の手を取り、がつくりと俯いて落胆した。

近づいた兄からは、甘みの強い白檀の香りがした。

彼の自室は、櫻子の洋風の部屋とは違い、畳の敷かれた日本様式の部屋で、時々部屋で炊いている香の匂いが、いつの間にか服や体に移つたのだろう。

「いいわよ別に……兄様が家を継いで下さるのでしょうか？」

「あのなあ……俺は父様とは血は繋がっていないのだぞ。」

実は、桃真は、実の兄ではなく、母方の従兄弟だった。母が、なかなか子供ができない体质とわかり、母の姉の家から養子として引き取つたのである。

その家は由緒正しい華族の家柄であったが、多額の借財を抱えており、何人も子供を抱えいた事に加えて、当主が病気がちであった。よつて、数多くの候補者の中から、桃真を養子として向かえた方が、相手の家の助けにもなると梅造は判断し、向こうもそれを望んだのだった。

その後に、姉の撫子、次いで櫻子が生まれたのだった。

「あら、まだそんな事を言つてるの？父も、亡くなつた母も、兄様とそのお嫁様に家を継がせる気持ちでいるわよ。もし、入り婿を取るつもりなら、撫子姉様の時に、そうしてたわよ。」

父は、婿を取らず、撫子を嫁に出してしまつた。ちなみに、政府の若い官僚に嫁いだ姉は、現在は、旦那の英國への洋行に一緒について行つてるので、日本にはいない。

その時、足音がして、新たな人物が私の部屋の前に現れた。

「失礼します、お嬢様。」

白い手袋をはめた、家令の斎木萩人が立つていた。

いつもは、グレーや茶色の背広を着ていることもあるが、今日は黒い背広をきつちりと着込んでいる。太くて艶やかな黒髪は、香油で整えられていた。

ほのかなオード・トワレの香りがした。

男性的な渋みと爽やかさを併せ持つ香りだったが、それがなんの成分で出来ているかはわからないことから、神秘的で謎めいた香りでもあった。

強く主張しすぎないその香りは、斎木によく合っていた。  
兄も百八十もあるうかという高身長だが、斎木の方が少し高かつた。

それは、灰色の瞳と彫の深い顔立ちから推測できるように、彼は混血児だった。母親が、オーストリア人である為、櫻子よりも異国の血をより濃く受け継いでいる。

元は、類稀な音楽の才能を持ち、東京音楽学校を首席で卒業した、二階堂家の書生だった。しかし、独逸留学中に、運悪く海難事故に巻き込まれ、指を痛めてしまつたことから、演奏者としての道を閉ざされてしまったのだ。

そして、今は、二階堂家で執事をしながら、時々、富裕層の子女に音楽を教えている。

屋敷には女当主、つまり櫻子の母親は、すでに他界してしまつていることから、屋敷の筆頭使用人として、采配を振るつているのが、彼であった。

財閥といえども、二階堂家はそれほど派手好みではないので、通いの料理人と女中が数人、自慢の日本庭園を管理する園丁、そして住み込みの使用人としては、斎木しか使用人は雇っていない。しかし、夜会の時だけ、特別に使用人を増やしていたので、大変そうだった。

「旦那様が、お嬢様の姿がお見えにならない事を心配していらっしゃいます。」

「斎木まで呼びに来てくれたのね。」

「『』気分でも優れないのでしょうか？ でしたら、旦那様には、私が上手にお伝えしておきましょうか？」

感情を表に出さない人なので、いつも無表情だが、良く気がついて気配りが出来る人だという事を、櫻子は知っている。

「大丈夫よ。体調が良い事は、兄様にはばれてしまったし。ありがとう、すぐに広間に行くわ。」

「そうですか…。無理はなさらないで下さいね。何かあれば、さりげなく私や他の使用人を呼んでくだされば、それなりに対処はいたしますから。」

響きのある低音。斎木は、ヴァイオリンの演奏者を目指していたが、音楽学校では声楽も習うのだろうか、と櫻子は思つた。  
「では、私は、まだいろいろござりますので、御前を失礼いたします。」

一礼した斎木が、階段を下りていく音が聞こえた。

「…斎木に対しては、俺より優しくないか？」

「主が使用人に対して優しくするのは当然でしょう？」

西洋嫌いの桃真であるが、斎木の事は嫌いではなかつた。

それは、彼がそれほど裕福な家の出身でないのに加えて、混血児である事から、音楽学校時代に苦労をしていた事を知つていたからだ。

今、思えば、斎木が首席で卒業した事、独逸への留学が決まつた事に一番喜び、そして、怪我をして夢半ばに帰国した事を一番悔しがつていたのも、桃真だったように思つ。

「それに今日の斎木は、眼が回るくらい忙しいはずだわ。お母様がまだ生きてらつしゃた頃は、一人で仕切れたけど…。年配の執事は、高齢だったから、亡くなつてしまわれたし。斎木を助けられる熟練の使用人が必要よねえ。」

あと、一人くらいは、執事を雇つた方が良いのかもしねない。

「戻らないと、俺も怒られそうだ。先に戻るぞ。」

桃真が去つてから、櫻子も、階下へ降りる為に部屋を出た。

## 序章（2）夜会

父と談笑していた貴婦人達の関心が、自分に向けられた。

「今晚は、来て下さつてどうもありがとうござります。亡くなつた母も、屋敷の中が皆様のおかげで華やかになつて、きっと喜んでいますわ。どうぞ、じゅつくりしていつてくださいませね。」

世辞を受け止めながら、一人ひとりに、あいさつをする。

「櫻子、この新しい洋装が、神谷くんが仕立ててくれた物だな。」

梅造は、櫻子の夜会服に視線を移した。

「彼の技術は素晴らしいな。お礼を言いなさい。」

梅造が、後ろに控えていた青年を、前に押しやつた。

「そんな……理事長……。」

神谷藤隆は、謙遜から手を顔の前で振つた。

櫻子は、父の秘書の一人である彼を、気に入つていた。

いつも柔軟な笑みを浮かべていて、精鍊で優しい性格をしていた。例えるなら、陽だまりの中の蒲公英。

「神谷さん、お久しぶりですね。櫻子です。品の良い服を仕立ててくれてありがとう。」

「いえ、喜んでくださつたのならば、造り手として光榮ですよ。」

神谷は、少しばにかんで笑つた。

ふむ、と梅造が、あごの辺りを手でかいた。

「どうしたの、父様？」

「そんなに若かったのか、と思つてね。仕立て職人から私の秘書なぞをする事になつて、大変だと思うが、叱りつけた記憶がないのだよ。」

梅造は、神谷と自分の娘を見比べて、娘の方を見て、息を吐いた。

「ちよつと、今のため息は、どう意味なの、父様？」

「私が頭があがらない程、神谷くんは優秀なのに、おまえと来た

……。」

「父様！」

神谷は、罰が悪い気分になつた。彼のせいではないのだが。

「いずれ、神谷くんには、服の知識を生かして、うちの紡績事業が、百貨店を任せつむりでいるのさ。神谷くんには、お前も失礼の無いようにしなさいよ。」

「そんな、理事長、僕は、お嬢様に気兼ねしていただくような者ではありませんよ。」

梅造は、さらに赤くなつた神谷を見て笑つた。

「きみはいつでも謙虚だね。仕事をしていく上では、少し傲慢になつた方が上手くいくときもあるのさよ。……そうだ、櫻子、神谷君を、庭の池に案内してあげなさい。」

「ええ、喜んで。」

「庭の池に案内してあげなさい」というのは、「少し、休憩できる場所に人を案内してあげなさい」という意味だと、父から言いつけられていた。

おそらく、神谷は、その優しそうな容貌と、品のある様子から、貴婦人達の注目の的である事は間違ひなかつた。おそらく、ずっと話し続けて気疲れしているに違ひない。

灯りのともつた庭先には、飲み物が置かれた台もあり、数人の客も広間から一息つくために出てきたようだつた。

日本庭園の大きな池には、橋がかかつてあり、神谷と櫻子は、その上で、水面に映つた月を眺めながら、ぼんやりする事にした。

「理事長は、どうやら私に気を使って下さつたようですね。」

「だつて、ずっと父について下さつてお客様とお話して下さつていたのでしょうか?少し、休憩されないと明日は声が枯れてしまうわ。

「

「でも、それは理事長も同じですよ。」高齢の分、私より体の負担は大きいはずです。そろそろ、休憩して頂かないと。」

「父の体調まで気を使ってくださつて、感謝しますわ。」

「秘書として当然ですよ。僕なんかを拾つてくださつた事でも、

感謝しているのに、秘書の一人にまでして下さつた。」

僕は、神谷洋装店という所の跡取り息子だったんですね、と橋の下に映る月を眺めながら、神谷が語り出した。

「まあ、神谷洋装店の？」

初耳だった。

銀座に本店があつて、他にもいくつかの支店を持っていた指折りの大店、だった。

「明治の文明開化の頃に、いち早く洋装に目をつけて、その専門店になる事が出来たのですが、先代の跡を継いだ僕の両親は、経営の才能がなくてね。投資に失敗して、その心労から一人とも、急になくなつた。借財をきれいにする為に、店は他の洋装店に売りました。」

まだ、若いのに、そんな苦労をしていたなんて、櫻子は知らなかつた。

いつも、父の隣で、柔らかに微笑んでいた青年だったから、そいつたドロドロした運命とは離れた世界の人間に見えていた。

「その時にお世話になったのが、一階堂銀行だったのですが、どういうわけか、理事長の元に僕の噂が届いていて、そして、何もかも失つた僕を雇つてくださつたのですよ。」

実は、残された神谷は、洋装店の跡継ぎとして素晴らしい技術と感性を持つていた。鬼才、とも表現できる程だつた。

あまりに抜きん出た才能だつたが為に、神谷洋装店と親しかつた同業者は、どこも彼を雇うことを恐れ多いと感じた。

そして、彼らの多くは、同時に債権者でもあつたため、訪れた銀行担当者に、その事を話していたのだった。

神谷の才能の噂は、そうして一階堂財閥の理事長の耳元まで届いたのであつた。

梅造も、どつかのお抱え職人になるよりは、経営を学ばせた方が彼の役に立つと感じて、彼を引き取る事に決めたのである。

「まあ、そうだったの。」

「はい、ですから私は理事長には、大変感謝しているのです。」

櫻子の方を向いて、微笑んだ。

「私も、神谷さんは感謝しているわ。」

微笑む櫻子に、神谷は首を傾げた。

「僕は、お嬢様に何か感謝していただくような事をした覚えがないのですが……？」

「何を言つてゐるよ、この服！仕立ててくれたじゃないの。私、なるべく質素な服を着たかったから、夜会服としては少し無茶な注文をしてしまったのだけれど、こんなに品良く仕上げて下さったわ。兄は、地味つて言つたけど、私はそうは思つていないの。」

「本当に喜んでくださつていていたのですね！ありがとうございます。」

「お世辞だとでも思つていたの？」

「いえ……そんな事は……ありがとうございます。」

神谷は、どうやら自分の才能を謙遜しすぎる傾向があるようだ。

「……でも、お仕事つて、頭だけじゃなくて、体力も優れていないと大変なのね。神谷さんも、きっと父の後ろでいろいろ気を配つていたでしょうし。」

「そうですね。僕は運動の方はからつきしですけど、体力の維持はこれでも若いときから心がけるようにしてゐるんですよ。ですから、桃真さまがすぐに経済界に入らずに、士官学校に進まれたのは、賢明だと思います。体力も、身体能力もつくし、軍の内情に詳しければ、時勢にも敏感になれます。帝国陸軍での人脈も、将来役に立つかもしれませんし。」

「あら？ でも、父様は、兄様に士官学校に行くよつた事は一度もなかつたわ。」

「でも、『自分の会社で働け、とも、大学に進学せよ、とも仰られなかつたでしょう？』

「確かにそうだ。」

梅造は桃真の進路に口を出した事はなかつたが、彼が決めた進路

をいつも応援していた。

特に、少佐に昇進したときには、狂喜乱舞して、いつにもまして豪奢な宴を催した事から、無関心でもなかつた事も証明できる。

「ああ、少しお喋りし過ぎました。僕としたことが。今日の主役を引き止めてしまつて申し訳ありません。僕にかまわず、広間にお戻りになつてください。皆さん、あなたの姿を見たくていらっしゃつた方ばかりなのだから。」

皆が、私の姿を見に？

「……どういう事かしら？」

櫻子が眉をひそめると、神谷は明らかにしまつた、といつ顔をして、目を泳がせた。

「説明していただけるかしら、神谷さん。」

「いえ、お聞きになつていらないなら、僕の口からは……。」

「あなたから聞いたとは、決して言わないわ。言つて頂戴。」

櫻子に腕をつかまれて、観念したように神谷が口を開いた。

「今晩は、あなたと桃真さんの為の宴だつたのですよ、櫻子さん。あなたと兄様の婚約者を決める為のね。」

「なんですつて？」

「今晩だけじやない。少し前の宴から、豪商、医者、帝国軍、官僚などの御曹司、良家の令嬢が、客人として招かれる事が増えたでしょう？僕は、あなたや桃真君がお気に召す方が、なかなか現れないのだと思つていたのですが。」

「わたくしは、知らなくつてよ。」

「……そのようですね。」

「きっと兄も知らなかつたに違ひないわ。使用人もね。斎木は知つていたでしようけど。」

「ちなみに、白状してしまつと、私もその候補者の一人なんですが……。」

「はい？どうして、神谷さんが？」

言つてしまつてから、はつと、気がついた。

先ほど父が、彼に自分の持つ企業のどれかを任せたい、と言つて  
いたではないか。

梅造は、相当、彼を高評価しているようだ。

「決めきれないなら、僕はどうでしょうか?」

神谷が、櫻子に笑いかけた。

しかし、それには、いつもの柔軟な笑みに加えて、とても妖艶な  
色気を含んでいた。

どきりと心臓が高鳴つた。

彼は、時々、こういう表情をする事がある。本当に、一瞬だけ。  
櫻子は、その度に、「色あひふかく、花房長く咲きたる藤の花松  
にかかりたる……」と、いう一節を思い出す。

しなだれた藤の花房が長く色濃く咲いていると、とても素晴らしい  
と清少納言も述べた視覚的な美しさに加えて、夜風に誘われて、  
揺れる花房から立ち込める、藤の香氣の記憶さえも、呼び覚まして  
しまう。

藤の花言葉は、「陶酔」。

「冗談ですよ。」

神谷は、またいつものような、顔に戻つた。

「僕は、その候補者だとは、理事長からは聞かされておりません。  
今晚も、単に秘書として、ついて来ただけですよ。日ごろ交流され  
ている方々にお会いできる良い機会ですからね。」

からかわれているだけだと知つて、櫻子は安心した。

「ああ、あそこに見えるのは、京極様じゃありませんか?」

神谷は庭の隅で、何かを飲みながら、ぽつんと立つてゐる客の一人  
に話題を移した。

「あら、ほんとだわ、菊弥さんだわ。」

「京極様は、大学の医学部を首席で卒業されて、今は陸軍医でし  
ょう? 素晴らしいですね。」

「あんな所で何をしていらっしゃるのかしら?」

「お声をかけてあげなさつた方がよろしいのでは。あなたの幼馴

染でしよう？僕はそろそろ、広間に戻ります。理事長様が心配です  
し。それでは、櫻子さん、また後で。」

神谷が去った後で、櫻子は、菊弥にそつと近づいて、声をかけた。

「今晚は、菊弥さん。」

「櫻子か…？」

櫻子に気がついて、驚いたように、やや切れ長の目を開く。褐色の肌は、帝国陸軍での訓練による日焼けではなく、生まれつきだった。

口をつけていたのは葡萄酒だったようだ。

近づくと、独特の甘い香りがした。

「どうしてこんな所にいるの？ 中に入ればいいのに。」

今年で二十六になる京極菊弥の実家は、御家人に仕えていた御典医の家系であり、当主は梅彦と親友だった。

両家は仲が良く、櫻子と菊弥も幼少の頃から仲が良かつた。

そして、京極家の実家は京都にあつた事から、ゆくゆくは帝都の第一大学区医学校（現在の東大医学部）に行きたい、と思っていた菊弥は、上京し、二階堂家から大学に通っていたのだ。

もちろん、扱いは書生ではなく、親友の子息を預かるという関係だったのだが、他に居候していた書生に配慮してか、はたまた、その生真面目な性分からか、屋敷の中で一番熱心に雑用をしていくれていた記憶がある。

そして、櫻子が、女学校の教科を一つも落とさずに卒業できたのも、彼の家庭教師のおかげであったのは、余談だ。

「大佐殿を通じて、招待して頂いたんやけど、何分、こういった華美な場所は、俺には合わんらしいでな。しかし、せつかく誘つて頂いたのに、さつさと帰つては失礼というものやうづ。だから、理事長が、一通り客人への挨拶がお済になつたら、ご挨拶をして帰ろうとここで時間を潰してたんや。

優雅な京都弁で話す。

「相変わらず、真面目なのね。」

帰らずに、肌寒い秋の夜長に一人で立ち続けている所が。

櫻子は、こらえきれずに、少し苦笑した。

「私が付き添うわ。黙つて私の隣に居れば、余計なお喋りをせずに済むでしょ?」

櫻子は、葡萄酒を持つていないほうの、菊弥の手を取つた。

近づくと、彼からは、消毒液の匂いに混じつて、腕からは、菊の匂いがした。

一階堂家に居たときも、ほとんど毎日花を生けていた。特に春は、菖蒲、秋は菊の花がお気に入りのようで、今日もきっと、花を生けてからやって来たに違ひなかつた。

花の匂いで患者に迷惑をかけてはいけないから、といつも勤務が終わつてから活けていると聞いた事がある。

「それに、宴が中盤になれば、舞踏が始まつてしまつわ。菊弥さん、舞踏は得意だから、一緒に踊つてくださると助かるわ。私は、ワルツなら大丈夫なんだけど、それ以上に早い音楽にはついていけないの。」

「そんなん、俺も得意やないわ。」

櫻子は、あまり得意ではなかつたが、菊弥の母親が、日本舞踊の師範である血筋からか、それなりに上手であつた。

明治の鹿鳴館時代から、諸外国との外交政策上の必要性から導入され始めていた社交ダンスは、大正には、富裕層にまで浸透し始めた。

「なんで、斎木さんに教えてもらわへんのや?」

「斎木? どうして?」

「ヨーロッパ留学してはつたんなら、必然的に踊る機会があるやんか。

それに、彼は、音大出身やうつ。

執事の斎木は使用人なので、夜会で踊る姿などは、見たことがない。

しかし、考えてみれば、彼は踊るのが上手いかもしけなかつた。

「なんや、気がつかんかつたんか?」

図星だった。

盲点だった。

「と、とにかく、広間に行きましょうよ。」

「でもやなあ…。」

「その様子だと、何も召し上がりていないのでしょう?せっかく来て下さったんだから、まずは何か一緒に食べましょうよ。」

「ああ、そうやな。ほな、入らしてもらうわ。」

口の端をゆがませて、笑みを浮かべている。

櫻子に促されて、広間の方に行くことに決めたようだ。

父親から受け継いだ褐色の肌を覗いては、菊弥の顔の造りは、典型的な京美人である母親の面影を受け継いでいた。

その切れ長の瞳と、優美で端正な顔立ち、そして、菊弥の真面目で固い性格から醸し出される雰囲気は、そのままでいると、近寄りがたい印象を与えていた。

しかし、彼自身は、特に愛想に欠けているわけではなく、人の前に出て他人と関わるのが、すこし下手なだけだった。

社交が苦手ではなく、単に下手であることを、付き合いの長さから、櫻子は見抜いている。

こうして、広間に引っ張り出して、今晚の宴に馴染ませれば、すぐに寛い令嬢達に囲まれてもはやされるに違いない。音楽が流れ始めれば、誰もが彼と踊りたがるだろう。

彼は、自身の技量もさる事ながら、女性にとつて踊りやすいように誘導して踊るのが、上手かつた。

広間に戻ると、父の姿はなかつた。その代わりに、神谷が、客の間を縫うようにして、客人に声をかけ続けていた。

「神谷さん、父は?」

「今、少し別室で休憩されています。」

神谷は、斎木と一緒に、広間の采配に勤しんでいた最中だったようだ。

飲み物のグラスがたくさん入った銀の盆を手にしている。

「今晚は、京極様。私は理事長の秘書をさせて頂いている、神谷藤隆です。起こしきださつてありがとうござります。」

「京極菊弥です。どうして私の名前を？」

「客人のお名前とお顔は、記憶させて頂いております。飲み物は何かいかがですか？」

菊弥が、何かの洋酒の入ったグラスを取ると、「じゅつくじ」という言葉とともに、一礼する。

「それでは、櫻子様、失礼いたします。」

「ありがとうございます、神谷さんも、時々は休憩をしてくださいね。また後でお会いしましょうね。」

神谷は、一人にもう一度一礼すると、広間の中央のほうへ進んで行こうとしたが、何かを思い出しきりで、きびすを返した。

「そういうえば、春日玲子様が、お嬢様をお探しになつていきましたよ。」

「まあ、玲子も既に来てくれているのね。ありがとうございます、探してみるわ。」

神谷は、微笑むと、また歩き出した。

「俺は大丈夫や、おおきに。玲子嬢をお探ししてあげたらどうや? きつと、櫻子に会いたがつておられるやうや。」

「本当に…大丈夫?」

「首を傾げるな、大丈夫や。どうやら、俺の顔見知りも、たくさん招待されているようやしなあ。」

菊弥が広間を見渡すと、陸軍で見慣れた顔がいくつかあった。

「わかつたわ、また後で会いましょうね。玲子を見つけたら戻つて来るわ。」

「おう。」

菊弥は、片手を挙げて、また口の端をゆがめて笑つた。爽やか、

ところよりは、妖艶だつたが、きっと、彼に自覚はない。

広間を半周ほどすると、他の貴婦人達と輪になつて、談笑している玲子の姿があった。

「あ、櫻子！」

彼女が、櫻子の姿に気がついて、他の子女に断つてから、輪から抜け出でくる。

「玲子、来てくれてありがとつ。数日前に会つたばかりだけど、私は毎日でも嬉しいわ。」

「私もよ。でも、来たときは、姿が見えなくて、気分がすぐれないのかと思つちゃつたわ。元氣そうで良かつた。」

「ちょっと庭にいたのよ。ごめんなさいね。」

櫻子をようやく見つけた玲子は、少し興奮しているのか、顔がすこし火照つていた。

まるで、日本人形のように、華奢な顔立ちに、白い肌は、どこから見ても春日財閥の、深窓の令嬢であつたが、櫻子の無二の親友である彼女も、かなり活発な性格をしていた。

「この間の浅草の一件の後、手首や足が後から痛んだりしなかつた？」

「この通り、よ。」

「良かつたわ！あ、そうだわ、今日は両親と一緒に葵もついてきたのよ。珍しいでしよう？」

すると、自分達から遠くのほうの人の輪にいた人物が、自分の名が呼ばれたことに気がついて、こちらを見た。

背は百六十半ばある櫻子とほぼ同じだが、細身な体形のせいか、少年と呼んでも良さそうな、美青年がいた。

そして、こちらに近づいてくる。

艶のある黒髪に、白い肌をしている。あごも女性のようになじんで、長いまつげが目のふちに隙間なく生えている。

もし、女物の服を着ていたら、女性と見間違えてしまいそうだ。葵、ところは、玲子の一つ違ひの弟だつた。

玲子が、日本人形のよつなら、彼はまるで西洋人形のよつな端整な顔立ちに、知性を宿した瞳をしていた。

事実、彼は、東京帝国大学の法学部に所属していた。

しかし、櫻子は、この親友の弟が若干苦手だった。

「今晚は、櫻子さん。」招待頂いてありがとうございました。」

「今晚は、葵君。」

爽やかな葵の笑顔に、櫻子も微笑み返す。

顔の筋肉の緊張を、彼に悟られないか心配であつたが。

「じゃあ、僕は、失礼しますね。どうぞ、姉をよろしくお願ひします。」

「ありがとうございます、また後でお会いしましょうね。」

そして、先ほどまで談笑していた人の輪に戻つていった。

「あの子、夜会があんまり好きじゃないのに、今日は久しぶりに出席したもんだから、両親もびっくりしてるので。うふふ。」

「そ、そう…。」

「ねえ、櫻子、お願ひがあるの。」

玲子が指を組んで、櫻子に懇願した。

「もうすぐ舞踏の時間になるでしょ？ その間に、桃真様に、私のお相手をしてくださらないか、お願ひしてもらえる？」

瞳を潤ませている。

「兄様に？ 玲子、あなたもしかして…」

「ええ、私が、櫻子よりもずっと、ずっと、ずっと舞踏が下手なのは知つていてるでしょ？ 実の弟と踊るのも変だし、桃真様にお願いできないかしら？」

櫻子は、心の中でがくりとうなだれた。

まあ、知らない人と踊つて恥をかくよりは、賢明な判断ではある。

「それとも、桃真さまは、今晚はいろいろ方と踊らないといけないのかしら？ 自分のお屋敷の夜会ですものね。」

（そういえば、兄様つて、踊れるのかしら？ 踊つてらっしゃるのを見たことがないわ。）

兄は、茶道と、武芸に關しては頼りにしていい。

他の分野は、わからない。

「大丈夫よ、今日は、菊弥さんが来てらっしゃるからー。」

「本当? ああ、嬉しいわ。」

玲子は、ほつと息をついた。安心したようだ。

菊弥は、櫻子のついでに、屋敷にし�ょっちゅう顔を出していた玲子の勉強もまとめて見ていたので、一人は顔見知りといふか、玲子は、菊弥の少ない女性の知り合いの一人だった。

（でも、玲子が菊弥さんと踊っている間、私はどうすればいいかしら?）

菊弥と会つた事で、すっかり安堵していたが、急に不安が襲つてくる。

異国の血を引く櫻子と、典型的な日本美人の玲子とでは見た目は全く正反対、と言つても良い程だが、性格や好み、行動様式はかなりの似たもの同士だった。

唯一の違い、といえば、櫻子が料理はできるが裁縫は壊滅的であり、玲子はその反対に、刺繡や編み物など、裁縫全般の才能はあるくせに、料理の味付けをすると、いつも恐ろしい結果となる事くらいだった。

（あ、兄様は、長男だから、きっとお客様のお相手をしないといけないから、無理ね。）

櫻子は、今晩あつた全ての男性の顔を順番に、思い浮かべた。

「父様と私は、絵的に悪くないけれど、父様も客人と踊りなさるだらうし。斎木は使用人だし。神谷さんも秘書だから、客人に頼まれたら踊るでしようけど。となると…。」

私は、誰と踊れば良いの?

「玲子、ごめんだけど、私も舞踏が心配になつてきたから、始める前に、知り合いにお願いしようつと思うの。ちょっと離れていいかしら?」

「ええ、もちろんよ。また後でお会いしましょうね。」

櫻子は、玲子としばし別れると、早速、候補者を探し始めた。

広間をうわうわしながら、見知った顔が居ないか探していると、神谷と同じように、客の間を行つたり来たりしている斎木に声をかけられた。

ほかの使用人も、空になつた料理の大皿を片付けて、食後の紅茶や、珈琲の準備と取替え始めている。

「どうかなさいましたか、お嬢様？」

「ありがとうございます。たいした事じゃないのよ。」

「冷や汗をかかれているようですが、『気分でも悪いのですか？』田ざとい。本当に斎木は優秀すぎる。」

「えっと、斎木も、私が踊るのが下手なことを知つていてるでしょう？だから、音楽が流れている間だけ、一緒に踊つてくださる方を最初に探しておこうと思って。」

「しかし、それでは社交の意味が無いのでは？」

見も蓋もない。

「でも心配なの！」

「心配要りませんよ。女性は、無理に踊らうとするのではなくて、力を抜いて、殿方の動きに合わせるだけで良いのです。何もしようとはしなくて良いのです。」

むしろ、女性側が踊らうとする気持ちを持つと、男性が上手く女性を誘導できなくなる。

「ダンスが上手く踊れないのは、相手のせい、だと思つくらいの気持ちでいらっしゃればよろしいのですよ。踊りが上手い男性なら、相手が初心者かどうかすぐに見抜いて、お嬢様の踊りやすいようにしてくださいねはづです。」

「本当？」

「それが社交ダンスというものですよ、心配要りません。」

しかし、踊らうとすると、失敗するから、力を抜けと/orのほど

「ういう事なのか、意味がわからない。」

「菊弥さんが言つていたけど、斎木は踊りが上手なの？」

「私ですか？」

「そうよ、踊つている姿を見たこと無いもの。」

「上手が下手かはわかりませんが、好きですよ。」

「そうだったの。」

「踊りは元々、歐羅巴の文化ですから、学生でも踊る機会があるのです。特に、私は音大生だったので、向こうに住んでいた頃は、頻繁に踊つていました。」

菊弥の話は、本当らしい。

「じゃあ、音楽が始まると、ちょっとだけ、教えて頂戴。もう、お料理も少なくなつたし、それ程忙しくはないから大丈夫でしょう？」

「私がですか？私は使用人ですよ。」

斎木は少し眉を顰めた。

「主様とは踊れません。踊りならば、桃真様に教えていただいた方がよろしいですよ。」

「兄様が踊りが上手だなんて聞いた事がないもの。」

「軍人様は、こういった社交の場も多いですから、きっと上手に教えてくださいますよ。」

「じゃあ、今から踊りの教師として雇うことにするわ。」

斎木は、鉄面皮を若干崩して、複雑そうな顔をした。

「……。」

「あなたは、お嬢様に客人の前で恥をかけと/or>うの？」

「……。」

「誰も、そこまでは言つていない。」

「だから、少しだけ教えて頂戴。私を助けると思って、ね？」

「……。」

沈黙の末、斎木は、陥落した。

「……わかりました。では、少し、場所を変えましょう。」

「まあ、ありがとう！」

広間を出て、客も使用人も、今は通過しないであろう廊下に移動した。

「まずは、まっすぐに立つ事から。頭の上から紐が伸びていて、天井からつるされているようなイメージです。」

「まるで、操り人形みたいね。」

「そう、そのイメージです。首も伸ばして……そうです。踊っている時も、常にこの姿勢を心がけてください。この姿勢を保つだけで、男性は誘導しやすくなります。」

斎木は、そこから櫻子の頭をやや後ろと、左側にそらした。

そして、櫻子の前に立ち、左手を持つて、自分の右手は、彼女の肩甲骨の辺りに添えた。

「これが、ワルツの基本的な構えです。女性は、男性の右側に常にいるようにします。お嬢様から見て、左ですね。左手は、ふわりと私の右腕においてください。決して、掴んではいけませんよ。」

「わかったわ。」

斎木は、櫻子が緊張しているのが伝わってきた。

「固くなりすぎないで下さい。風に舞い上がる綿帽子にもなった気分でいてくださいね。」

そういうわけで、なるべく体の力を抜くように心がける。

「後は、繰り返される三拍子のリズムに合わせて、男性が右足を進めたら、あなたは左足を下げる。右足を下げたら、左足を進めたらよいだけですよ。」

やつてみましょ、と斎木がいい、一、一、三と口で拍子をとり始めた。

動き始めると、確かに、斎木の言つた意味がわかつた。

男性の動きに合わせて、足を合わせていけばいいのだ。

「そうです、お嬢様。心配されていた割には、お上手ではありますせんか。」

斎木が、単調な円運動から、向きを変える動きをした事がわかつた。

それに気がつくのが遅れて、櫻子は、足の動きを間違えてしまつた。

「『』、『めんなさい。』

「練習ですから、謝る必要はありません。足の踏み出し方を覚えれば、より上手に踊れるようになりますが、わからなくとも、ワルツの場合は、基本的に男性に合わせていれば、相手の方が勝手に連れていくつてくださいます。でも、いくつか簡単な踏み出し方は覚えていらっしゃった方がよろしいので、いくつかお教えしましょう。」

斎木は、簡単な動きをいくつか教えてくれた。

その動きを覚えてから、また練習をすると、まだ十五分も経過していないのに、格段に櫻子の動きは良くなつた。

そうこうしているうちに、広間の演奏が、聞く為の穏やかな曲調から、踊る為の優雅な曲調に変わっていた。

「そろそろ始まつたようですね。練習は終いにしましょ。」

「そうね、どうもありがと。」

斎木は、踊りをやめて、櫻子の体を離した。

「また、教えてくれる?」

「……。」

斎木は、しばらく考え込んだ。

「旦那様が、そうしろと仰るなり。」

梅造が認めれば良いというわけだ。

「あら、私が夜会で上手く踊れるようになれば、父様は嫌な顔はなさらないわよ?」

「とりあえず、お嬢様、時間がもつたいたいですから、広間におり行きください。」

斎木に、促されて、櫻子は戻ろうとした。

広間の前に、春日葵の姿があつた。

「また会つたね、一階堂さん。」

「今晚は、葵君。」

葵は、玲子が居ない場所では、櫻子の事を「一階堂さん」と呼んでいる。

「あなたは、踊りはお好きなの？」

「嫌いだね。どうして、良くも知らない人と手を取り合つて踊れるよね。西洋の考えは、時々僕には理解できない。」

「でも、その洋装姿は、とってもお似合いよ。」

「無理やり両親に着せられたんだ。この意味わかるよね？」

櫻子は、やや首を傾げた。

全くわからない。

「今晚の宴で、いろんな人と話したけど、皆、誰が一階堂家と血縁関係におなりになられるだろ？…って話ばかりだつたさ。姉さんは僕が自主的に夜会に参加したと思つてゐるけど、本当は、両親に無理やり引っ張り出されたんだよ。」

「…………。」

「あなた、馬鹿？僕も、あなたの婚約者候補らしいよ。姉もね。」

玲子が、兄の婚約者候補として？

「姉さんは、そのことについては知らないけどね。知つてたら、桃真さんを自分の舞踏が下手なことを隠す為の相手として、あなたにお願いするはずないからね。ばかばかしい。」

確かに、今晚、踊りの相手として、桃真を独占する事は、もしかしたら、令嬢達の反感を買うに違ひなかつた。

「僕も、自分の名前に花の名前があるだけで、ここに呼ばれるなんて、災難だつたよ。」

「花の名前つて？何か関係あるのかしら？」

「何で、あなたが知らないのさ……？」

今度は、葵は明らかに見下した視線を送った。

「一階堂家の当主には、花の名前が含まれている。そして、一階堂家の娘が嫁に嫁ぐ時は、相手にも花の名前が含まれていなくちゃならない。そうでなければ、不幸が訪れるとか、血は絶えてしまうとか、言い伝えがあるんだってさ。なんで、自分の家の事なのに知らないのさ。」

「確かに、撫子姉様の旦那様の名前も、菖蒲あやひと仁ひとだつたわ……。」

菖蒲の「菖」だ。珍しい名前だと思って、記憶に残っていた。

「嘘だと思うんなら、今日の若い男性客の名簿を見てみる事だね。」

「いえ、いいわ。貴方のお話、嘘だと思つていないもの。」

「そう。じゃあ僕は失礼するよ。」

葵は、冷たく笑うと、広間に戻ろうとした。

その時、唐突に、ただ事ではない物騒な物音がした。

優雅な演奏も止み、貴婦人の甲高い悲鳴が起こっている。その声音からは、恐怖が読み取れた。

「な、何があつたのかしら……？」

「わからない、様子を見てみよ。」

一人は、すぐに広間に向かった。

広間に戻ると、そこは思いもしなかつた光景だつた。

阿鼻叫喚の修羅場、といった表現では表現しきれないほどの惨劇。中央では、華やかな宴には似合わない野蛮人が、三人、白刃を振り回して暴れている。

その者達がそれ以上奥へは進まないよう、日本刀を握り締めて、食い止めているのは、菊弥と、兄の友人である軍人の招待客の二人だつた。

櫻子は、絶句した。

「あの暴漢は…？」

男達は「天誅！」と奇声を上げながら、食事が乗つた卓子を切り付けている。派手な音を立てて食器や花瓶が割れるたびに、貴婦人の悲鳴が上がつた。

「櫻子さん、春日様、早く奥へ逃げて下さい。」

肩を捕まれて振り返ると、神谷がいた。今まで見たこともないような険しい表情をしている。

「おそらく、アナキスト無政府主義者です。数年前から、陰を潜めたと思っていましたが、最近は、こうして下つ端どもが夜会を襲撃していると聞いたことがあります。」

社会主義者にとつて、富裕層は社会を蝕む害虫、としか映らないんだろう。

外からも、奇声と気合が入り混じつた音が聞こえる。

兄の声も混じつているようだつた。

「門まで来たところで、警備人が気づいて知らせてくれたから、桃真様達が飛んでいつてくれたんですけど、三人は、すり抜けて広間に入つてきたようです。」

斎木は、他の使用人と一緒に、客人を出来るだけ広間から逃がさせようと、賢明に誘導している。

その時、一度に二人を相手にしていた、菊弥ではないもう一人の軍人が、ならず者に追い詰められて、重心を崩しかけた。

「櫻子さん、ど、何処へ行く！！」

櫻子は、考えるというよりも、先に体が動いてしまっていた。逃げる客人とは反対方向へ。

「すぐにお帰りなさい、無礼者！！」

後日、この場にいた客全員が、深窓の令嬢が青筋を浮かべて、鋭い眼光で無頼漢を叱りつけたのを見た経験は、後にも先にもこれつきりだつたと、語る。

しかし、当の本人は必死である。

この広間の誰よりも。

「あなた達をお呼びした覚えはなくつてよーーー！」

絶叫ではなく、気迫のこもつた怒号を貴婦人から飛ばされて、さすがの無頼漢もすこし驚いたようだつた。

「邪魔するな…、女！！」

一人が、櫻子に向かつて、白刃を振りかぶる。

その瞬間に、櫻子は、卓子に飾られていた、細長い焼き物の花瓶のふちを掴んだ。

振り下ろされた白刃を、超絶的な反射神経で避ける。

そして、掴んだ花瓶で、無頼漢の額の、やや上をめがけて殴りつけた。

「ぐあつ……！」

あまりの痛みで、日本刀を手放して必死に額を押さえる。きつと、脳震盪を起こしかけているに違いない。

「この女…！」

しかし、もう一人の男が、仲間をやられた怒りで、向き合つていた軍人から、櫻子へと標的を変える。

「危ない、櫻子…！」

菊弥か、誰かが、叫んだ。

男の予想もしなかつた動きに、反応が遅れた。

とつさに田を瞑る。

死を覚悟する間もなかつた。

「ぐげげえええ…顔が…！」

その時、櫻子の頭上で、釜蛙が苦痛で身をよじつたような、醜い声が絞り出された。

体に痛みはない。

おそるおそる田を開くと、無頼漢は、小さめの椅子の下敷きになつていた。

すると、背後から、少し変わつた薔薇のよつな深い匂いがした。それは、オード・トワレによるものだと気がついた時には、誰かの腕に体を抱きとめられていた。

「怪我はないか、お嬢さん？」

「え…？」

櫻子は、おそらく椅子を無頼漢に命中させたであろう男を見た。正確には、見上げた。

背丈が高くて、がつちりとした逞しい体をしている。

そして、洒落た黒の背広に、アスコット・タイをしめた洗練された服装からは、男の色気のようなものすら感じた。

櫻子も、この非常事態において肝が据わつていた方だったが、男の方も、全く揺るがず、落ち着いている。

その自信に満ち溢れた雰囲気から、実際より、もつと背が高くて大きな人物ではないかと錯覚してしまう。

「おい、そのあと一人、もう止めにしないか？直に警察もやって来る。それとも、今度は、本当に顔を潰されたいのか？？…って、もう遅かつたか。」

残りの一人は、既に菊弥にのされて、気絶していた。

他の一人も、起き上がる気配はない。

その時に、警官が広間に押し寄せて来て、気絶したままの犯人を捕縛して、連れ去つていった。

おそらく、門でも同じような事が起こつたのだらう。

血相を変えた桃真が、外から飛び込んできた。

「おい、大丈夫だつたか、櫻子？」

「兄様！」

櫻子は、偉丈夫の腕をすり抜けて、桃真に駆け寄った。

桃真は、櫻子をしつかりと、抱きしめた。

突然、力強く抱きしめられて驚いたが、兄からは、血なまぐさい臭いがしない事に安心した。切り合つたわけではなさそうだった。きっと、得意の柔術でしとめていたんだろう。

「良かつた…。」

「ちょっと、兄様？？」

桃真は、はつ、と気がついて、櫻子を離した。

「あの方が助けてくださつたのよ。」

「そうか、すまない。妹を助けて下さつて、感謝いたします。」

桃真が、男性に向かつて、一礼する。

「いや、なに、礼を言われることの程でもありません。」

「なんでもないことをしたかのように、答えた。

「そうだ、菊弥！」

「なんですか？」

「頼む、ちょっと軽傷を負わされた者がいるのだ。手当をしてやつてはくれまいが？」

「もちろんです。」

そうして、菊弥と、桃真は再び屋敷の外へと出て行つた。

「さて、もう夜会どころではなさそうだ。遅れて到着してしまつたが、帰る事にしますかな。」

男性は、先程のはずみで足元に落ちてしまつた、自分の黒い山高帽を拾つて、深くかぶりなおした。

「あ、あの…ありがとうございます。助けていただいて…。」

「いや、当然だろ。あの状況で、誰も何もしなかつたならば、お嬢さんは、今頃あの世行きさ。いや、しかし、そのおかげで俺は…。不幸中の幸いというか、なんと言つが…。」

「何か、仰つた？」

「いやなに、こっちの話を。それより、手首をひねつたりはしなかつたかい？」

「心配してくださつてありがと。全く問題ないわ。」「そうか。」

男も、櫻子がなんともないとわかり、安堵したようだつた。飘々とした面持ちで、櫻子を見ている。

ふいに、櫻子は、この人は何かに似ている、と感じた。

「あつ！」

「どうしましたかな、お嬢さん？」

「あなたを見て、何かに似ているな、と思つたのよ。思い出したわ。」

「ほう…、何に似ていましたかな？」

「音楽よ。この間、横浜港に行つた時に、米國から来た船員達が演奏をしていたのを聞いたの。

その音楽の雰囲気が、なんとなくあなたと合つてゐるわ、と思つて。

「

無邪気に笑いかけた後で、

「あ、でも、私、その音楽をその時に初めて聞いたから、実は良く知らないのよ。氣を悪くされたらごめんなさいね。」「

と、謝つた。

男は、じらえきれずに吹き出して、ははは、と笑つた。さも、愉快そうだった。

「堪らないな、お嬢さんは。實に面白い。」「

「『』、ごめんなさい！失礼だったかしら？」「

「いや、俺の方こそ、笑つてしまつてしまないね。」「

初対面の雰囲気から、傲慢そうな男だと思ったが、結構、快活な男でもあるらしい。

「お嬢さんが初めて聞いたのも無理はない。それは最近、日本に渡ってきたジャズという音楽さ。

アメリカのある場所で生まれた音楽だ。」

櫻子は、記憶の中の音楽が、そのような名前である事すら知らなかつた。

「俺の商売は、貿易商でね、外国の客人を相手に商売をしているものだから、自然と西洋の文化の影響を受けてしまつて。それをぴたりと言い当てられたものだから、笑つてしまつた、というわけさ。」

「あら、 うな。 变な」とを言つてしまつて氣分を害されたのかしら、と心配したわ。」

ははは、と男は再び笑つた。

「お嬢さんは、またいづれお会いしたいものだ…。」

「ええ、お名前をお聞きしてもよろしいかしら?私は、一階堂櫻子よ。」

「いやいや、名乗るほどの者でもないのでね、それでは、またいづれ。」

そして、男は、去つていつてしまつた。

「あ、君…?」

ぴたり、と足を止め、乱闘の一部始終を見ていた、葵に声をかけた。

「出しゃばつてしまつて、申し訳なかつたね、お坊ちゃん。」

「は? アンタ、何言つてるわけ?」

葵に睨み付けられても、どこ吹く風、といった様子で、そのまま行つてしまつた。

「一階堂さん、あの人と知り合い?」

葵が、不機嫌そうに尋ねた。

「いいえ、初めてお会いしたわ。葵君がご存知の方?」

「ちよつとね。うちの会社と取引をしていたのを見た事がある。一代で身を起こして、今は、海外に広い人脈を持つ貿易会社の若社長だよ。あちこちの夜会に時々顔を出している、有名な成金の一人だよ。」

「へえ、あの方が……。」

納得がいった。

あの、洒落た服装に負けない、自信に満ちた雰囲気は、事業に成功した証だつたのだ。

「あの人も招待されたのか。素性のはつきりしない方だけど、ずいぶんなやり手らしいよ。女性に入気もあるから、良い所のお嬢さんを全部骨抜きにしているそうだ。そつ、か、財閥令嬢を娶れば、自分の事業をさらに拡大できるものね。」

納得したように、葵が言った。

「に、しても、あなたがそこまでお馬鹿さんだとは思わなかつたよ。日本刀を振り回す輩に、突っ込んでいくなんてどうかしてる。」

葵は、あきれた声を出した。

「せつかく、花婿探しの宴だつたのに、なにやつてるのさ。もう、これで、嫁の貰い手はないかもしれないよ。あなたみたいな人が義理の妹になるなんて、耐えられないと考える女性がいるなら、大佐殿の婚期も遠のくよね？」

親友の弟だが、やっぱり、この意地悪な性格を好きになれないでない、と感じた。

騒ぎが収束に向かう中、確かに、少し、考えに思慮深さが足りない、と反省したのも事実ではあつたが……。

その時、耳を劈かんばかりの悲鳴が庭から聞こえた。

桃真や菊弥が慌てて駆け寄る。その後に、警官も続く。

櫻子も、じつとしていたらず、後を追つた。

草陰には、白目をむいて、人が横たわっていた。

月明かりが照らすのは、バツの字に無残に切られた背中。

男性は、すでに、事切れていた。

生前の恐怖を、その顔に刻むように、口を大きく開いたまま。

「櫻子！」

遅れてたどり着いた櫻子に気がついた桃真は、彼女の視界を遮る為に、抱きしめ、そのまま現場から遠ざかった。

「ちょっと、兄様、押さないでよ。後ろから倒れてしまいそう。」「見るもんじゃない、なんでついて来るのだ、おまえは。」

十分に、見えない所まで移動し、櫻子を解放した。

「うちのお客さまが亡くなられたの?」

自分で口にしたくせに、恐怖で悪寒が走った。

「……ああ、の方は、堂島社長だ。堂島金属会社のな。」「そんな…。」

泣きそうになつた。

人が一人死んだのだ。

何かが違つていれば、死んでいたのは自分だつたのかもしれないのに。

「現場は警察にまかせよう。今晚は、念のために、おまえの部屋ではなくて、俺の部屋の隣を使え。いいな?」

騒ぎを確かめるべくやつて来た斎木に、「女中に言つて、あの部屋に寝具を準備してやつてくれ」と言つて、櫻子を引き渡す。

恐怖に震える櫻子は、そつと斎木に背中を支えられながら、屋敷に戻つた。

## 序章（6） 日曜日ノ訪問者

あの事件の日から、一週間がたつた。

今日は、日曜であり、学校で国語の教師をしている櫻子の仕事は休みだつた。

あの時、父の梅造は、夜会の途中で休憩する為に別室に居たところ、日ごろの疲れが蓄積していたのか、そのまま寝入つてしまつて、結局おきたのは、次の朝だつた。

あのような騒ぎがあつたにも関わらず、目を覚ましもしなかつた豪胆さに、斎木は、「この娘にして、この父あり」と思つたが、その鉄面皮の下に隠した。

そして、朝一番に、神谷から昨晩の襲撃事件と、広間の被害の見積額を聞いたが、聞き終えた後は、しばらく笑い転げて、薰をも睡然、とさせた。

「櫻子が、日本刀を振り回す輩に突っ込んでいつて、啖呵を切つて、振りかかつた白刃を避けて、相手を花瓶で氣絶させた……はつはつはつ……！」

一言一句、全て紛れもない事実だが、総理事長の一言の関心事がそこか、と思うと、周囲は脱力した。

人が、屋敷内で死んだのだというのに。

しかし、今日も、その梅造は、朝食の席でなにやら「機嫌だつた。

「どうしたんですか、理事長？」  
と、神谷は恐々尋ねた。

「つきつきといふよりは、にやにやとした笑いを浮かべているので、はたからみると、何かあつたのか、と思つてしまつ。

日曜日の朝は、桃真、櫻子、そして梅造の三人で朝食をとるのが、一階堂家の習慣になつてゐる。

今日は、それに加えて神谷も同席だ。

彼は、昨晩は一階堂家に泊まつていたので、今朝は一階堂家の

者と朝食を取る予定である。

ちなみに、今日は、和食だった。

「いや、櫻子の面白い様子が見れなかつたのは、残念だったな、と思つてな。」

なんだ、思い出し笑いだつたのか。

「面白い、つて何よ、父様？私も必死だつたのよ？」

怒つてゐるようだ。額に皺がよつていて。

「なのに、その跡、嫌味を言われたのよ。嫁の貰い手がなくなるつて。」

「違ひないな！」

面白かつたのか、梅造は、またカラカラと笑い出した。

「確かに、今後は、お前に恐れをなして、並みの肝をもつた男ならば、もう、求婚の手紙を届けてくる」ともなかろうよ。」

そういつて、味噌汁をすすつた。

「だが、そんなことで、恐れをなすような小物は、義息子にはいらないから、丁度良い。私は、面白い男と酒が飲みたい。」

「父様の酒飲み相手を探しているわけじゃあなくつてよ。」

櫻子は、梅造を睨みつけながら、焼き鮭に箸を伸ばした。

「だが、しかし、篩いにかけられて残つた男は、より熱心に、お前に近づいてくるだろうよ。」

そして、にやり、と笑つた。

「え、父様？そんな手紙が届いているの？」

「ああ、お前に言わなかつたが、届いてるよ。」

寝耳に水だ。

「桃真にもな。」

「え、俺にもですか？」

「当然だ。わしからは、そろそろ身を固めよ、とは決していわんが、二人とも、今の世にどんな貴婦人や紳士がいらっしゃるか、だいたいわかつただろう？その機会を与えたに過ぎんよ。」

「でも、名前の件は？花の名前がないといけないんでしょ？」

「まあな。花の名前ではない男の元に嫁げば、短命になる、と先祖から伝えられている。実際、過去を見ると、そういうえなくもない。長生きしたければ、そういう男を伴侶に選ぶ事だな。」

ちょっと、適當で、いい加減な言い方にも聞こえた。

「また近いうちに、夜会を開くからな。まあ、ゆっくり考えるといい。」

「ええ、また夜会を？」

「気に入らないのか？」

「だって、ダンスが苦手なんですもの……。」

「おまえなあ……。」

梅造はあきれた声を出して、我が娘を見た。

「どうして、子女が剣道ができる、ワルツが踊れんのだ。普通、逆だぞ。」

桃真も、父に賛同した。

「お前な、日本の外はシベリア出兵だのといひいろ、物騒なのだ。その中で、夜会を開けることに感謝しろ。」

「恥をかくのは嫌なの。じゃあ、兄様が教えてくれたらいいじゃないの？」

櫻子は、軽く兄を睨んだ。

「少佐殿が、踊れないわけはないわよね？」

「踊れぬわけではないが、女側の足順がわからん。」

櫻子の挑戦的な視線を受け流して、白米を頬張る。

「なら、櫻子、しばらくは斎木くんにでも教えてもらひえ。」

梅造が、女中に茶碗を差し出して、お代わりを持つてくるように言った。

「それは、いい考えですね。」

今まで、静かにしていた神谷も顔を上げた。

斎木は、一同が食卓を囲むこの部屋の、扉の横で立っていたが、突然、話題に自分が持ち上がったので、驚いた。

「音楽に関することは、きみに任せておけばよい。のう、斎木く

ん。

「私ですか…？」

「ああ、しばらく、櫻子が夜会を嫌がりんですすむよつこ、踊りを見てやつてくれ。」

斎木は、梅造と櫻子を交互に見比べていたが、最後に、わかりました、と返答した。

「あら、父様の許可がでたわね、斎木！」

どうやら、自分は、墓穴を掘つてしまつたらしい事に、斎木は気がついた。

「じゃあ、今週中に上達しとかないと、次の夜会に間に合わないわね。」

「せいぜい頑張れ、櫻子。」

他人事のように、桃真が言った。

「そうだ、忘れておつた。」

唐突に、梅造が言った。

「櫻子、午前中に、客人が来るぞ。」

この人の思考は、時々唐突に何かが飛び出す時がある。いつも、様々な事に思考をめぐらせているせいだろうか。

「お前に御用だそうだ。わしと、桃真は出かける用があるから、斎木にはよろしく伝えておいたぞ。」

「客人…？私に？」

「ああ、ま、会えばわかる。」

そうして、梅造は、最後に卵焼きを食すと、それで朝食を終いにした。

## 序章（7） 日曜日ノ訪問者

その客人とやらは、十時頃に訪ねて來た。  
自室で読書をしていたところを、斎木に呼ばれて、応接室までや  
つてきた。

「失礼します。」

部屋の扉を軽く叩くと、「じゅうぞ」という斎木の声が聞こえた。  
長椅子にゆつたりと腰掛け、用意された紅茶に口をつけていた  
男が、カツブを皿に戻して、ゆつくりと立ち上がった。

「あらあなたは…。」

見慣れた顔があった。

「やあ、お嬢さん。またお会いできましたな。」

昨晩、櫻子を救つてくれた男。

「まあ、名無しさん！お会いできてくれれしいわ！」

男は、少し、よりめいた。

「お嬢さん、名無しはあんまりじや あないですか？」

「お名前を教えてくださいなかつたじやないの。」

「……そうですね。俺が悪かった。」

男は、気を取り直した。

「楓崎蓮一、歳は二十八です。漢字は、睡蓮の蓮に、数字の一で、  
蓮一です。ちよつと変わった名前で覚えやすいでしょ？ 楓崎商会  
といふ貿易業をしております。」

そして、貴禄のある笑みを見せた。

「昨日は、とんだ災難でしたな、櫻子さん。しかし、お怪我が無  
いよつて安心しましたよ。これが、お見舞いではなく、ちよつとし  
た贈り物の花になつて、良かつたです。」

そうして、今まで見たことが無いよつな、大きな真紅の薔薇の花  
束を、櫻子に渡した。

「まあ、ありがと。」

櫻子の顔が、ぱつ、と明るくなつた。

「欧羅巴のものを真似た香水も、商品として取り扱つていましてね。国内外に原料となる花園をいくつか持つておるのですよ。」

「それで、貴方からは、薔薇の香りがするのね？…どうぞお座りになつて。」

「おや、昨晩の騒ぎの間に、そんな事まで見抜かれていたとは恐れ入つた。やはり、あなたはただの令嬢ではなさそうだ。」

楓崎は、もう一度長いすに腰をかけた。

「昨晩も、無頼漢共に啖呵を切つて乗り込んでいく様は、さすがの私も少々びっくりいたしましたがね。さすがは大佐殿の妹さんだ。」

「ほんと初対面の男性に、面を向かつて言われると、今更ながら恥ずかしくて、櫻子は、耳のあたりを紅く染めた。

「知り合いを通じて、浅草で絡んできたならず者を蹴散らしたお嬢さんが居なさる、というのを聞いて、興味を持ちましてね。一度、会つた見たいと申し上げておいたら、その方が、昨晩の夜会を紹介して下さつた事で、こうしてご縁を頂く事ができたのですよ。若い男性は、花の名前が自分の名前に含まれている事が、条件だとお聞きしましたときには、奇妙な規定だと思いましたが、生まれて初めて、自分の名前に感謝しましたね。幸運でした。」

（どうして、浅草の一件が、噂になつてゐるのかしら？？）

世間は、狭い、と櫻子は思つた。

「ええ、今朝も、父から全くはしたない娘だ、と怒られていましたのよ。どうか、恥ずかしいですから、それ以上は仰らないでください。」

実際の梅造は、かなり面白がつてゐたが。

嘘も方便、という諺もある。

「褒めているのですよ、俺はね。だから、こうして、先手必勝とばかりに、お宅に伺つたというわけだ。」

「はあ…。」

話が読めない。

そういえば、彼は何の要件で、この屋敷に来たのだらう。まさか、忘れ物を取りに来たわけでも、あるまいし。

「ですからね、私は、貴方にこうして結婚を申し込みに来たのですよ。」

「は……？」

（は……？）

櫻子は、ぽかんと口を半開きにして固まつた。その様子は、あまり、令嬢には似つかわしくない。

「どなたの……？」

「ですから、俺と、貴方の、です。」

「……。」

「気の強い女は世間には『まんとい』るが、実際に白刃が光るのを前にして、啖呵を切つて乗りめるような気の座つた女性は、初めて見ましたよ。ますます、貴方が欲しくなりました。」

「……。」

「しかも、まだ日本人には馴染みのないジャズを、一度聴いたらで覚えておられて、おまけに、それは俺のようだ、と仰つた時には、もう、その帰り道には、貴方以外の女性は、俺には霞んで見えてしまつてね。たまらず、『うして足を運んでしまつた、というわけですよ。』

「……。」

「おつと、自分ばかり少し喋りすぎたようだ。櫻子さんは、どう思つたかね？」

尋ねられてわれに返つた。

「櫻子さん？」

「『めんなさい。ちょっとびっくりしてしまつたわ。だつて、榆崎さんとは、昨日、お会いしたばかりだもの。』

「ははは、それもそうですな。しかし、どうやら、俺が一番乗りだつたようで、安心しましたよ。」

「ええ…、昨晩も、あの後で、知り合いかから、このようなはしたない娘に求婚してくださる方なんて、現れない、と嫌味を飛ばされたばかりでしたもの。」

「そんな事、言わせておけばいいことですよ。むしろ、俺は、こうして花束を抱えて、屋敷の門に並ぶ熱心な殿方が増える事を、心配しましたからね。」

「そういえば、父も篩がどいつの、と、似たような事を言つてていたようだ。」

櫻子は、頬に、指をすこし当てる、ちょっとと首を傾げた。

「これからどうしたものか、といつ風に。」

「どうしましょう?」

昨晩、そろそろ婚約者を…といつ話を耳に挟んだと思つたら、今日、既に一名、現れてしまった。

心づもりもなかつたことなので、承諾する気はさらさらないが、お断りしたところで、また新たな男性が屋敷にやつてくるような気がした。

それに、このよつたな自分を、「気に入つた」とこつてやつてくる、よつたな風変わりな若者なのだ。それに、朝一番に駆けつけてくる、行動力もある。

「貴方の気持ちを代弁いたしますと、今は承諾するつもりはないが、すつぱりこの口断るほど、まんざら嫌でもない、と言つた感じですな。」

すばり、心の中を言つて出てられてしまった。

「私は、先手必勝が信条だが、せつかちではないのでね。どうですか?これからお忙しくなれば、ご一緒にどつかへ出かけませんか?」

思つても見なかつた申し出に、櫻子は驚いた。

慌てて、斎木の方を見る。

「旦那様から、お嬢様に任せると仰つておつました。」

父様は、本当に自由主義者だわ、と思つた。

「私は、今日は午後からは特に何もする事が無いのよ。お断りする理由が思い当たらないわ。そつおつしやるなら、どこか一緒に行つてくださる?」

「ははは、貴方は正直な方だ。もちろんですよ。俺がお誘いしたのだからね。」

もう、車は、用意してあるのだよ、と、榆崎は笑つた。

「『』婦人は、支度に少々、お時間が必要だろ?俺は、ここで紅茶を頂きながら、いくらでもお待ちしているから、準備ができたらまた戻つてくれないか?」

ええ、わかつたわ、と櫻子は、応接室を出て、臥室に戻つた。

部屋から出ると、廊下には、しかめ面の桃真がいた。

「あら、兄様、まだ家に居たの?」

「……斎木から、話は聞いた。」

「ちょっと、お出かけしてくるわ。」

「子女が、よく知らぬ男と一緒にいくのは好ましくないが、父様が了承した、という事は身元もしっかりした相手なのだろう。俺は心配はせぬが、気をつけて行つてこいよ。」

「ええ、車を出してくれるから交通はお任せするつもりだけど、そうするわ。」

「気をつけて、の意味が違う、と思つたが、言わなかつた。

「そういえば、兄様も、昨日の一件で、どこもお怪我はなかつたの?」

「あのような斬り合いで負傷しておれば、軍人なぞ務まらん。それより、菊弥には、今度会つたら、お前からも礼を述べておけよ。負傷したものはいすれも軽傷だったが、全員彼が見てくれたんだからな。」

「わかつたわ。せつかく來ていただいたのに、彼にも申し訳なかつたわね。」

「全くだ。来週、彼の両親が帝都を尋ねてくるそうだ。お前も、<sup>田</sup>じるお世話になつたのだから、一度は顔を出しておくのだぞ。」

「そうだ、と桃真は思い出したように、声をあげた。

「お前に返事をするのを忘れていた。来週の終末に浅草に行きたいといつていたな。俺の予定は大丈夫だ。」

十一月は、浅草では酉の市と呼ばれる年中行事があつた。開運招福と、商売繁盛を願う祭りで、江戸時代から続いている。お祭り好きの櫻子は、毎年、この行事を楽しみにしているが、人が多すぎて、一人で行くのはいささか危険なので、毎年、兄についてもらつてている。

「よかつたわ、ありがと。」

「ああ、じゃあ、気をつけてな。」

夕方には返つて来いよ、と言わされて、部屋を後にした。

序章(8) 日曜日ノ訪問者（選択肢有り）

「おや、櫻子さん…。」

榆崎は、櫻子の洋装を見て驚いた。

黒を基調としたテーラード・スーツは、襟や、スカートのなど、部分的に、白くなっている。

全体的に直線的なシルエットは、巴里あたりから巻き起こった、最近の流行だという。

「…変かしら？」

「いや、よくお似合いだ。」

「髪は、短い髪のほうが、この服にはよく似合つたかもしれないわね。今日も、あなたは洋装で着てくださったから、真似てみたのだけれど。」

「あなたは、流行には敏感な性質なんだね。」

この時代、男性は三割程度は洋装をたしなんでいたが、女性はまだまだ百人いて一人くらいの割合しか親しまれていなかつた。

「でも、この格好は、もう少し痩せた女の子が着た方が似合つわね。」

「そんな事ないさ、さあ、もう昼ですから、何処に行くか決める前に、昼飯にでも行きましょうか。」

榆崎の車で、仏蘭西料理を食べに行き、それから帝劇へ行く前に、銀座の喫茶店で時間を潰した。

「この間の夜会といい、あなたは地味好みなんですね。」

紅茶のカップを傾けながら、意外そうに、榆崎が言った。

「私、実は、あまり服は持つていませんから、新しく仕立てていただく時は、なるべく質素な服にするようにしてるので。他の人の印象に残つてしまふ服なら、そう何度も着れないでしょう。特に、夜会ではね。」

櫻子は、いたずらっぽく微笑んだ。

「あなただつたら、服どころか、銀座の呉服屋をまるごと買えるでしょう。」

「私が、稼いだお金ではないもの。」

榆崎は、ほう、と、眉を上げた。

どこの夜会に顔をだしても、家が金持ちな所の娘は、今の流行は何だの、この間新調した着物はどうだと、榆崎には消費する事ばかりしか考えていないようになつたので、櫻子の考え方には、少し驚かされた。

「それでお嬢さんは、国語の教師もそれでいらっしゃるのですな。」

「ええ、なるべく身の回りのものは自分で買つようにしていし、それに、私は、生徒に国語を教えるのが好きなのよ。」

「俺は貧乏でしたから、尋常小学校しか卒業していませんからな。勉強というものも、あまり好きではありませんでした。」

「私は、実を言つと、国語以外はあまり出来なかつたのよ。」

櫻子が、照れ笑いをした。

「家同士の付き合いの長いお家に、大変頭の良い息子さんがいらっしゃつてね。京都から上京されて、私の家から大学に通いなさつたの。その方に、私は勉強を見てもらえたから、女学校を卒業できたようなものなのよ。」

「もしや、昨晩の軍医殿ですか？」

「あら、『存知？』

「直接の知り合いではありません。が、しかし、こういった商売をしていりますと、自然とあちこちの夜会に顔を出させていただく機会が増えるので、情報が入つてくるのですよ。」

「私のお話も、一体どこから入つてしまつたのかしらね……。」

櫻子は、浅草の一件が榆崎の耳に入つっていた事を思い出し、右手で頬を押さえた。

「いいや、元を辿れば、俺はそのおかげであなたに会つことが出来たんだ。もし、俺が他の夜会に出席していた時に、あなたも出席

して いた と し て も、俺 は あ な た が、あ な た と、わ か ら な か つ た か  
も し れ な い。」

あ な た が、あ な た だ と わ か ら な か つ た。

国 語 の 教 師 と し て は、な に や ら 心 に つ つ か え る 表 現 だ。

「あ ら、昔 に あ な た と お 会 い し た 事 が あ る と い う 事 か し う？」

ふ ふ ふ、と 榆 崎 は 不 敵 の 笑 み を 浮 か べ る だ け だ つ た。

「私 は、あ な た を お 探 し し て い た の で す よ。」

そ の 笑 み が 消 え、真 剣 な 田 つ き に な つ て、櫻 子 を ま つ す ぐ に 捉 え  
た。

さ す が の 櫻 子 も、ぎ く り、と し た。

剣 道 の 試 合 な ら ま だ し も、男 性 か ら、強 く ぎ く り と 光 る よ う な 視  
線 を 送 ら れ る の は、父 や 兄 か ら 叱 ら れ ら た 時 だ け だ。

し か も、こ の よ う な 喫 茶 店 で そ う さ れ た 経 験 な ど な い。

怖 い、と 櫻 子 は 思 つ た。

「こ の 人 だ、と 思 つ た。俺 は 本 気 で す よ、櫻 子 さ ん。本 気 で あ な  
た を 欲 し い と 思 つ て い る の で す。」

心 に 突 き 刺 す よ う な、真 撃 な 口 調 だ つ た。

こ の よ う な 直 接 的 な 口 説 き 文 句 を 聞 か さ れ た の は、初 め て の 経 験  
だ つ た。

不 覚 に も、赤 面 し て し ま つ た。

「女 性 を と き め か せ る の が お 得 意 な よ う ね？そ の 手 練 手 管 で、一  
体、何 人 の 女 性 を 今 ま で 虜 に な さ つ た の か し ら？」

「そ ん な こ と は な い、私 が こ ん な に 情 热 的 な 言 葉 を 伝 え た の は、  
あ な た だ け だ。自 分 で も、び っ く り し て し ま つ た。」

そ れ す ら も、演 技 な の か、あ 有 り は、本 気 な の か。

「で も、榆 崎 さ ん な ら、私 よ り も、も つ と 美 し く て お 金 持 ち の お  
嬢 さ ん と で も 婚 約 で き そ う よ。」

「ふ う、……、さ す が は 教 職 に 就 か れ て い る だ け あ つ て、真 面 田 で  
す な。」

「そ れ に、こ 存 知 の 通 り、私 は 教 師 で、財 閥 と は あ ま り か か わ り

が無いのよ。もし、『商売の為に、私を利用となさるなら……。』

「あなたは、俺が金や人脈目当てで近づいたとでも思つていらつしやるのか？」

榆崎は、己の自尊心を傷つけられたようだつた。

その瞳が、凍るように冷たくなつた。

「失礼な事を言つてしまつたわ。」

「いや、俺の立場なら、似たような事を考えたかもしれない。しかし、俺は、ゆつくりと事を進めるのは嫌いな性分でね。」

「正直に言うとね、自分が結婚するだなんて考えてもいなかつたもの。」

櫻子が、紅茶のカップを持ち上げて、口に含んだ。

生ぬるいというか、すでに冷たくなつたそれが、この男と一緒に居る時間が長いものになつた事を表していた。

「……それ以前に、まだ、人を好きになつた事がないんですもの。」

この時、櫻子の脳裏には、何故だか神谷の顔が浮かんだ。

そんな、自分に、少し動搖した。

しかし、その事に気がつかなかつたことにして、胸の奥にしまいこんだ。

「…………。」

少し、驚いたように、榆崎の瞳が丸くなつた事に、櫻子が気がついた。

榆崎は、この前のようなきらびやかな夜会を、当たり前のように開き、華やかな御曹司達に囲まれて育つてゐる女性から、このような台詞を聞くことになるとは思わなかつた。

「だから、恥ずかしい話ですけど、私、こんな歳になつても、恋というものがどんなものなのか、よくわかつていないので。」

榆崎は、笑わない。

しかし、妙に納得した。

普通ならば、年頃の男女が一人で何処かへ出かけた時、どちらか

が、艶っぽい視線を飛ばしたら、用意、ドン、だ。

自分が今まで相手にしてきた女性達は、そこから駆け引きが始まつた。

すると、女性といつものほは、突然、なんともいえない雰囲気を醸し出し始めるのだ。まるで、花が綻んで、中に閉じ込められていた香りが、外へこぼれ出すように。

しかし、彼女は、まるで、まだ固くて青い薔のままだった。

自分は、ここまで感情をむき出しにして、彼女を欲しているのに、返つてくるものは、こんなにも味気ない。

わざとばぐらかされているのか、と思つていた。

しかし、そりではないらしい事には、ずいぶん早くから気がついてしまつた自分が、悲しい。

もしかすると、彼女は、自分がそれなりの歳の男であることすら、時々忘れているのかも知れない。

その無邪気な笑顔を見るたびに、愛おしく思つたが、同時に憎らしい、とも思つた。

心の芯から、嫉妬にも似た、なんとも例えようのない黒い感情が、渦を巻いているようだつた。

「急にほんやりされて、どうしたの？」

「ああ、いや…なんでもないさ。」

きっと、まだ彼女は気がつかないだろう。

恋の味を知らないあなたに、これからどんな策を講じようか、と考えてゐる事を。

「本当に、今日は良い天気ね…。」

櫻子は、話題をそらせようと、窓の外を見た。

秋の日差しは柔らかい。

「そうだ、散歩でもしましょ？か。まだ、紅葉にはちと早いが。」

「まあ、いい提案ね。…でも、劇場の準備をしてくださつたのではないのかしら？」

「他に行くところが無ければそりするつもりでしたがね。なにぶ

ん、仕事が忙しくて、何処か自然の多い場所で安らぎたかったので、丁度よかつた。」

「どうやら、忙しい間を縫つて、自分を訪れてくれていたらしかつた。

「お忙しいのに、来て下さったの？」

「この時勢に仕事が多いのは、良い事ですよ。では、外へ出ましょうか。俺も、室内より外をぶらぶらしたい気持ちになつていたのでね。丁度よかつた。」

「じゃあ、行きましょう。」

「ああ、ゆうべ。」

そうして、一人はそういうことになつた。

もみじは、まだ朱色のものが多くて、真紅ではない。

もう少し、寒くなれば、深く色づくだろう。

それでも、櫻子を感激させるには、十分だった。

「あと一週間後くらいに、京に行けば、きっと最高でしょうね。」

「京都がお好きなのですか？」

「父の祖父の実家は、もともとは京都だったのよ。だから、本当に古いお付き合いをさせて頂いているお家は、京に多いから、今でも父に連れられて、よくうちの別荘に行くのよ。特に春は必ず。」

「櫻ですか？」

「そうよ。京の櫻でなければ、観た気がしない、といって、父が言うの。生まれた時から帝都に住んでいるのに、血が騒ぐのかしらねえ。」

「自分は、もとは関東の生まれですが、そこから神戸に行つて、大阪も少しは居ました。大きくなつてから、神戸で会社を興して、拠点を帝都に移しました。だから、京の櫻も知っていますよ。」

なるほど、だから、関西の商人が、まるで無理やり標準語になおしたかのような独特の話し方をするのか、と櫻子は思った。榆崎は、紅葉の葉を数枚取ると、それをじっくりと手を凝らして眺めた。

まるで、物思いに耽るかのようだ。

「きれいでしょう？ 京の櫻は。」

「あ？ ああ……」

上の空だった榆崎は、声をかけられたことに驚いて、うなづいた。いつの間にか、日差しは西へ傾いて、周囲は葉と同じ朱色に染まっていた。

「長い事、喫茶店で時間を潰してしまったよつだ、櫻子さん。帝劇を見たいと仰っていたが、それでは帰宅が夜になる。」

兄にも夕方には戻ると言つてしまつた。

「どうだ、来週も一緒に何処かへ出かけませんかな？」

「来週も？」

きっと、この人は、また忙しい間を縫つて、私に会いに来てくれるつもりだらう。

櫻子は少し考えた。

来週は……

「一緒に帝劇に行きたいわ。」

【榆崎蓮一】編へ

「斎木にフルツを習わなければ。」

【斎木萩人】編へ

「菊弥さんの家族に挨拶をしなければ」

【京極菊弥】編へ

「兄と浅草へ行く予定なの。」

【一階堂桃真】

編へ

## 【榆崎蓮一】編（1）戸惑ヒ

「一緒に帝劇に行きたいわ。」

櫻子は、少し顔を上げて、蓮一を見た。

「でも、その後、一緒に浅草にも行ってくださる？」

後で、兄に謝る事を忘れてはいけない。どうせ、乗り気ではなかったのだから、自分と付き添わずにすんで、喜ぶだろう。

「浅草ですか？」

「西の市に行きたいの。でも、一人では危ないって言つから、兄様に一緒に来てくれる様にお願いしていたの。代わりに一緒に、行ってくださると嬉しいわ。」

榆崎は、少し戸惑っている。

「あ、でも、お仕事が忙しいのよね？そんなに長く一緒に居ていただいたら、悪いかしら。」

やつぱり、浅草は兄様に、と櫻子が考えたときだった。突然、榆崎に腕を引かれた。

咄嗟の出来事に、逆らえず、櫻子は榆崎の胸に倒れこむ。その胸からは、眩暉のするような、あのオード・トワレの香りがした。

今日、彼が持ってきた本物の生花よりも、深い深い真紅の薔薇の匂い。

「ちよつと、榆崎さんっ？」

驚いた櫻子は、声が少し裏返っている。

「…俺は、あんたが好きだと言つただろ？…」

耳元で、低くて艶のある声が囁いた。ゾクリ、と体の心が震えた。

「そのおれを兄貴代わりにする気かい？」

「離して！」

櫻子は、榆崎の胸を突つ撥ねた。

しかし、その逞しい胸は、びくともしなかった。

どうして、こんな事をされているのか、櫻子にはまだ理解できない。

「駄目なら、いいの。私は気にしないから…………っ？！」

何が起きたか理解する事に、時間がかかった。

すつ、と榆崎の顔が近づいてきたかと思うと、そのままぶつかりそうになった。

ぎゅつ、と櫻子が口を開じると、自分口元に何かが触れた。

それが、榆崎の唇だと気がついた時、櫻子はどうしてもいかわからなくなつた。

自分の下唇を何度も、何度も吸つている。

「ん……！」

その執拗さから逃れようと、櫻子が顔を上へそらそらとすると、その拍子に、榆崎は自分の顔の角度を変えて、口の舌を櫻子へ潜り込ませて來た。

結果的に、より深く、榆崎と唇を絡める事になってしまった。

口内を蹂躪される、その生々しい行為に、櫻子は戦慄した。

このような至近距離で男性と接した事は、今だ経験した事がない。榆崎本来の体臭は、彼が纏っている香りよりも、官能的だつた。きつと彼自身は、気がついていないだろつ。

しかし、少なくとも櫻子には、この野生的で、荒々しい匂いを、薔薇の香りで包み込む事で隠していふように思えた。

齧える櫻子は、恐怖から顔を離そうとするが、榆崎はその度に追いかけてくる。

「ん……あなたが悪いんだ。そんなにつれない事をするから。」

熱情に支配されている榆崎は、櫻子が今まで聞いた事のないようなどろけた甘い声で、彼女に囁く。

頬を手の平で固定されて、より深く繋がる位置へ、顔の角度を変えられた。

櫻子には、もう抵抗できる状態ではなくつてしまつた。

唇だけではなくて、魂までもが抜き取られて、くもの糸に絡め取られてしまつたような感覚に陥つた。

誰かに、見られているかもしれないとか、余計な何かを考えようとしても、すぐに、頭の中を乱されてしまう。

「好きだ……あなたが……。」

「うわ」とのようにな、呟く。

何度も送つても、彼女の元まで届けられなかつたその思いを吹き込むかのように、何度も角度を変えて、唇を吸つた。

最後に、彼女の顎の後ろまで吸い、そこでようやく、名残惜しそうに顔を離した。

濃厚すぎる榆崎の行為に、櫻子の耳元や頬は火照つてしまつた。

それに気がついた榆崎は、優越感に眩暈がしそうになり、彼女の顔から手を離して、それを腰にまわした。

そして、うなじや首筋につけばむような軽い口づけをして、ゆつくりと、顔の肩に埋めた。

櫻子の匂いを榆崎も吸い込んで、それからうつとりして息を吐いた。

「はあ……。」

嵐の後のような静けさによつて、櫻子は、意識を取り戻した。

「酷い人……。」

奪われていた声を取り戻したかのようにな、櫻子が呟いた。

「でも、これで、俺の気持ちはあなたに伝わつたろう?」

「……あなたが、野蛮な人だという事も、よくわかつたわ。」

高鳴る心臓が静まつてくると、逆に怒りが込みあがつてきた。

「私は、あなたなんて嫌いよ!」

櫻子は、榆崎の腕を振り払つて、逃れた。

「全部が、全部、あなたの思い通りになる女人の人だと思つのは、大きな間違いだわ。」

葵が言つていたように、この男は、相当女性からもてるのだろう。

「これだけ無体な事をされながら、完全には嫌い貫けない自分がいる。浅草で、自分達をからかつた男達にしたような扱いを、彼にはする」ことが出来ない。

もちろん、それは、夜会の時に命を救われた事から、彼が根っから悪人ではない事を知っているからである。

しかし、自分がされた蛮行を、櫻子は受け入れる事は到底出来なかつた。

「あなたは、最初にお会いした時に、あなたの魅力の虜にならなかつた私に執着しているだけなのよ。私が、あなたを好きになれば、それで終いにするつもりでしょ。」

「ふふ……、もし、それが本当であったとしても、それが何だといつのですか？」

「私は、あなたを好きではありません、と言つていいのです！」

櫻子が声をあげた。

「まあまあ、そんな可愛い顔をしなさんな。  
からかわれている。

「今にも、噛みつかんばかりだな。俺は女に噛みつかれるのは、闇の中だけで十分だ。」

冷たく榆崎が笑う。

一代で富豪にまで上り詰めた男だ。まだまだ世間知らずの女が相手にするには手ごわすぎた。

きっと、榆崎には、子犬にでも吠え立てられているよつて映るのだろう。

あんまりだ。

「来週のお約束もなかつたことにします。もう、私に近づかないで！」

榆崎は、精悍な顔つきを引き締めて真面目な顔をした。

そして、抗う櫻子をなんなくもう一度抱き寄せて、深く口づけた。しかし、その行為には、先ほどのよつて凶暴さはなかつた。優しい、慈しむように触れる。

その違いに、櫻子は驚いた。

「……震えなくてもいい。」

顔を離した榆崎は、もう一度櫻子を抱きしめた。

くつつきすぎて、榆崎の心臓音が櫻子にも伝わってくる。

「震えていなんかないわ。」

それは、嘘である事は、抱きしめている榆崎にはわかつてしまつ

事だつただろう。

「大丈夫さ、そんなに怖がらなくとも、あなたに危害は加えない。

「……加えだじやないの。」

「それは、あなたがあんまりにも憎らしい事を言つからだ。逢引の約束をしたがつてゐる相手を自分の兄貴代わりに使おうとするなんてあんまりだ。俺じやなくても、怒る。」

考えてみれば、配慮に欠けていた。

榆崎を焼きつけてしまつたのは、自分である。

でも、謝りたくは無い。

その代わりに、少し戸惑つたよつて、上目遣いで榆崎を見た。

「はあ……。」

もう一度、榆崎は、櫻子を抱き寄せた。

「本当に、あなたは、憎らしい人だ。俺にとつては。」

「できれば、このまま連れて返つてお楽しみ、と行きたいといつたが……。」

「下品!」

全てを言い終わらないうちに、櫻子は、榆崎を突き飛ばした。

「痛つ……全く、財閥令嬢ともあうつ方がはしたない事をいたしますな。」

「あなたが、そんな事ばかりするから悪いんでしょう?」

「いいでしよう。どうせ、あなたは俺のものになるんです。それまで待つ事にしましよう。好機を逃すこととは嫌いだが、せつかな性分ではないのでね。」

十分せつかちだ。自覚が無いだけだ、と櫻子は思つた。

「もう、帰りましょう、日が暮れますぞ。」

飄々と、榆崎が言つ。

櫻子は、おとなしく榆崎の車に乗つたが、家の前に着くまで、むすつとした顔を保つて、彼とは一言も話さないようにした。

家の門につくと、櫻子は「もう来ない」と念を押したが、榆崎は、ちらりと受け流して、「また来る」と言つて、運転手に命じて車を出して去つてしまつた。

櫻子は、榆崎が去つて見えなくなると、急に、先ほどの感覚が蘇つた。

抗えない力、熱を帯びた吐息、榆崎の体温。

恐怖にもにた冷たい感情と、火照るような甘美な情熱の両方に絡みとられるようだつた。

自分の何処かが、壊されてしまつたような気がした。

「お帰りなさい、お嬢様。」

扉の前で悶々としていると、それが急に開いた。

「どうかされたのですか？」

斎木が訝しがる。

「なんでもないわ、斎木。ただいま。」

自分の動搖を悟られないように隠すだけで精一杯だ。

斎木の目は何でも見透かしているように思えて、心が震えた。

「どうでしたか、榆崎様とは？」

「そうね、昼食をご馳走していただいたわ。斎木、私の部屋に、紅茶とケーキの余りを持ってきてくれる？今朝、私が焼いたやつよ。

」

「はあ…わかりました。しかし、夕食前ですよ。」

「夕食も食べるわ。お願ひね？」

無性に、紅茶と甘いものが食べたくなつた。

あの男とは正反対の、紅茶の高貴な香りを楽しみたかったし、甘い食べ物で、鬱憤を吹き飛ばしたかった。

「熱いダージリンにして頂戴。ミルクもお願ひね。」

きっと、紅茶が、今日自分の身に起こった全てを清めて、何も無かつた事にしてくれるに違いない。

櫻子は、そう考えながら、自室へ戻る為に階段を上がった。

一方、車の中の榆崎は、あれだけ無下に扱われながらも、何処無くうれしそうに、薄い笑みを浮かべていた。

「広くなった車内で、足を組み、ゆつたりと深く腰をかけている。

「……………気持ち悪いです、榆崎さん。」

運転手の新堂が、視線を正面に向けたまま、自分の主に向かっていった。

彼は、榆崎より一年下の付き人だった。運転手、秘書などの仕事を兼任している。

「正直びっくりしましたよ。あなた、ああいう人が好みだったんですね。」

「どういう意味だ？」

「私はてっきり、あなたは熟女好みだと思っていましたから。」

榆崎は、すり落ちそうになつた。

「どうしてそんななんだ。」

「夜会でも、いつも金持ちの奥方様に囲まれているじゃありますせんか。あなたもまんざらでもなさそうですし。」

「おいおい、社交の場だぞ。愛想を振りまかないでどうする。」

体、どうやつたら、そんな豪快な見込み違いができるんだ。」

「おや、違うのですか？」

「婦人やお嬢様から誘いを受ける事は、多々あるわ。しかしながら今まで社交上の範囲内だ。」

「誰かに、本気になつた事は？」

「ないさ。深入りしすぎて怪我でもしたら大変だ。俺が社交場に出るのは仕事の交友関係を深める為さ。逆に損を負つては意味が無いだろう。」

確かに、金と女のもつれは、身の破産を生む。

どこぞの誰が不倫をしたばかりに、身を破滅させたとか、そん

な話はいくらでも転がっている。

しかし、だからといって、つれなくしうさぎの毛、高飛車だとか、生意気に映つてしまつ。

つまり、自分のような成り上がりものは、つかず離れずの安全地帯で、周りの人間と関わつていくのが都合が良かつた。

「まあ、そのあなたがここまで一階堂のお嬢様にご執心とはね。

「可愛い人だらう？」

「あんなねんね、私の好みじやありません。」

「べもない。

「しかし、盛りのついた犬でもあるまいし。震えてましたよ、櫻

子さん。」

「……おまえ、のぞいたな？」

榆崎が、眉を上げた。

「珍しく人気がなかたつとはい、公園のど真ん中でがつついている人に、羞恥心なんてもん、ありはしませんでしょう？」

榆崎は、しつと無視して受け流す。

「恋をした事がない……か、知らない分、その無邪氣さが返つて毒ですね。」

「おまえ、喫茶店にもいたのか。」

「珈琲を頂いていたんですよ。」

「あきれたやつだ。」

榆崎は、崩れて額にかかつた前髪を後ろへなでつけた。

「彼女、このままだとあなたを門前払いしますよ。あんなに怖がらせて。ちょっとせつかちが過ぎましたね。榆崎さんらしくもない。」

「あのお嬢さんがあんまりつれない事をするんでね。わからせてやつたのさ。」

「うしなければ、淡い下心を持つて近づいてくる男共に、また彼女は無邪気に接するだらう。」

自分が居ない間に、他のやつに何をされるか、わかつたもんじや

ない。

「そもそも、あの気の強いお嬢さんのことだ、おまえは震えるとは言つたが、慣れない事をされたんで、びっくりしただけさ。」

「確かに、深窓の令嬢とは少し違う方ですね。」

「そうだろう。」

「つまり、半分は衝動的で、半分は計算ずくだったといつわけですか？」

「そういうことになるな。」

「怖い人だ。」

「怖いのは新堂の方さ。覗き趣味があつたなんてね。俺は安心して女性も口説けない。」

新堂は、榆崎の皮肉を笑い飛ばした。

「無頼漢に、一度も啖呵を切つたお嬢さんの顔を見たかったのは事実ですよ。」

浅草と、夜会の夜だ。

「もう一つは、榆崎さんの耳に入れておきたいことが急にできまして。」

「なんだ？」

「今朝、衆議院の議員殿が、一人亡くなられたそうですよ。日本刀じやなくて、毒殺だったので、まだ自殺か他殺かわからないですが、おそらく他殺の見込みです。」

「ふむ。」

「夜会の晩に、二階堂家に襲撃來た者とつながりがあるのかはわかりませんが、その議員は企業の経営活動の推進の為に、いろいろな法整備に尽力をつくしていた方だったので、よもや、と思いましてね。」

「確かに、襲撃者は社会主義や無政府運動に関わるもののは仕業かもしれないという話だったな。どこの国では、財産は盜奪である、と表現した者もいたそうだ。」

それならば、まさに資本主義の恩恵を受けている自分は、彼らに

とつては富の略奪者だ。

あの日の襲撃者の狙いは、本当は何名だったのか知る由もないが、もし、彼らの計画が失敗に終わっていたのだとすれば、それを妨害した櫻子と榆崎は恨まれてているかも知れない。

報復される可能性があるなら、顔も知られている分、危険だ。

「全く、物騒な世の中になつたもんだ。」

「物価もこここの所、不安定ですしね。」

「物価は、どの時代も不安定なものさ。どんな時でも、知恵を絞れば、しこたま儲ける事はできるわ。」

榆崎は、自分の頭を指差した。

「話を元に戻しますとね、榆崎さんとお嬢さんが一緒にいるなんて、まとめて始末したいものには都合のいい状況ですから。まだ危険か安全かがはつきりするまでは、十分に気をつけてくださいね。」

「ああ、わかつた。」

そう言つと、榆崎は、軽く目を閉じた。

「ちよつと眠る。仕事で、今週は殆ど寝ていなからな。」

新堂は、自分の仕事の代わりはたくさんいるが、榆崎の代わりができるものがいない事を知つていて。間近で仕事ぶりを見ている分、疲れが溜まるのも、無理は無い、と思った。

「悪いが、着いたら起こしてくれないか?」

「新吉原ですか?」

うとうとと、まどろみかけた榆崎は、ぱつちりと目を開いた。

「なんで、そうなる?」

「違うのですか?一階堂のお嬢さんに無体にされた分、妓<sup>おんな</sup>にでも、優しくしてもらつて自信を取り戻されでは如何かと。」

「知らぬ人が聞けば、誤解されそうな口ぶりだ。俺は、昼は仕事、夜はどこぞの夜会でくたくただ。」

「ですから、吉原でその疲れを取つてきてはいかがですか。」

それとも、遊女はお嫌いですか、と新堂は声をかけた。

「俺は、嫌だ。遊んで、うつかり、子供でもできたらどうする

んだ？」

「用心深いですね。」

「それにだ、吉原は、一人の馴染みしか作れないんだろう？」

京の島原と違つて、吉原では、男は馴染みの女が出来ると、他の遊女へは登楼できない不文律がある。つづかり浮氣をすれば、女の報復を受けると聞いた。

「どうせ通うなら、島原がいいや。京は、女余りだから、ビニも愛想がいい。」

といふのは、榆崎の方便で、本当は妓遊びには興味が無いだけだつた。

ちなみに、女余りといふのは、単に、人口比が異なるからだ。京の人口は僧と女性の数が多く、江戸は男性が多いので、自然とそうなる。

榆崎は、自分の商売に良い影響を『えそな夜会には顔を出すが、一夜の夢を買う時間があるなら、もつと己の商売を大きくして、今以上に力と権力を持つてゐる人間になりたかつた。

それを目指して、今まで突つ走つて來たのだ。

その夢ももうすぐ叶う。

立ち止まつてゐる暇は、無いのだ。

「聞いてもいいですか、榆崎さん。」

「なんだ、新堂？」

「どうして、あのお嬢さんにそこまで執着されているんです？」

「今以上に、しこたま儲ける為さ。櫻子さんは、自分は父親の仕事に何も関わつていないと言つていたが、二階堂家の名前はこの日本で知らぬものはないだろ？にも関わらず、この間の夜会に出席していた御曹司どもは、生まれたときからぬるま湯に浸かつているせいで、野心のかけらもない。」

そんな軟弱者共に、みすみす奪われるのを黙つてみている程、自分には被虐趣味はない。

「確かに、金と権力を手に入れたものが、次に手に入れたがるの

は家格ですが、梅造氏は実力主義者ですね。」

長女の撫子嬢も、たまたま若手の中央官僚の妻になつたと聞いた

が、それも本当は恋愛結婚なのだとか。

「近頃の富豪は娘を持てば、官僚や華族に嫁がせて血縁関係を持ちたがりますが、梅造氏はそういう事は重要視されていないようでしたね。」

「貧しいものや、素性の良くわからぬものも、気に入れば取り立てて、傍に置くという噂だ。」

あの、神谷藤隆のよう。

「だから、これは、俺にとつては、願つてもいられない機会なんだ。俺は金はそれなりにはあるが、それだけでは、資産家の令嬢にとつては魅力的な結婚相手にはなりえんからな。」

「ですから、一階堂のお嬢さんを手玉に取る為に、回りくどい事をしていらっしゃるんですね。」

食えない人だ、と榆崎はにやりと歯を見せて笑つた。

「しかし、最近の榆崎さんは、特にお忙しかつたでしょう。たまには息抜きも必要だ。」

「だから、今日、いつしてもお嬢さんと食事に行つただろう？ 来週の約束も取り付けた。」

「はあ……。」

傍目には、思いつきり嫌われてはいやしなかつたか？

「とにかく、俺は寝る。会社に着いたら、起こしてくれ。」

「まだ働く気ですか、あなたは？」

「急に不安な案件が思い浮かんだ。ちょっと調べて、すぐに自宅に戻るひ。」

そうして、再びまどろみ始めた。

榆崎は、そこでとても幸福な夢を見た。

しかし、新堂に起こされ、目覚めると、その夢の内容をすっかり忘れていた。

「先生、どうしはつたの？」

若い尼僧に覗き込まれて、櫻子は我に返つた。

女学校で、今日の授業を終えた櫻子は、尼寺に居た。

仕事の後、時間を見つけては、ここへ書を習いに来ていた。

国語の教師のくせに、書道だけは、どうしてもなかなか上達できない。

しかし、近場の教室へ通えば、学校の生徒と出くわすかも知れない。そこで、わざわざ、少し離れたこの尼寺まで通つては、書の練習に励んでいた。

「いつまでそうして、墨をすらはるおつもり？」

小柄な尼僧は、まだ年は三十ぐらい。昔は、京都に住んでいたらしく、言葉もそのままだった。

「妙月先生、ごめんなさい。ちょっと、ひかりしていたわ。」

櫻子は、照れ隠しに、最後に、硯で墨を一、二すつた。

筆に適度に墨を吸わせて、半紙の上に滑らせる。

最近は、ずっと漢詩を題材にして練習している。

「李賀の秋来やなんて、また渋くて暗い詩を選びはつたなあ。」

中唐の詩人である。

「あの芥川龍之介先生もお好きらしいけど、うちば、この人の詩はちょっと怖くなつてしまつくらいの印象がありますのや。研ぎ澄まされた、才能に畏怖すら感じる。」

さすが、鬼才と称されたお人やな、と妙月が言つた。

確かに、彼の生きた時代の風潮を突き抜けて表現するような印象を、櫻子も持つた。

「でも、書道の先生としては、ちょっと丸はつけられへんな。」

線に迷いがある、と妙月が言つた。

「心が動搖してゐるような感じやね。」

「そうかしら?」

「ええ。口では何も言わんでも、筆は教えてくれますのや。」  
もう一度、やり直して書こうと、新しい紙を用意したが、妙月に遮られた。

「今日の櫻ちゃんは、ちょっと変やで?」

澄んだ瞳は、全てを見透かしているようだった。

「どうしたのや、何かあつたん?」

櫻子は、困った顔をした。

「やっぱり、何かあつたんやね。」

「実は…」

妙月は、人の異変には良く気がつく人だったが、相手から心を開こうとしない限り、無理に踏み入つたりはしない人だった。だから、櫻子の方から、先週あつた出来事を全て話した。夜会、そして、楓崎の事、全てを。

「そう、大変やつたなあ、櫻子ちゃん。」

妙月は、櫻子を包むように抱きしめた。

袈裟からは、わずかに沈香の香りがした。

「今日は、練習は終いにして、お抹茶でも飲もう。丁度今朝、ええ和菓子を頃いたんや。」

そして、につこり笑つて、準備を始めた。

出された菓子は、扇型にきれいな色がつけてあって、中にはこしあんが入っていた。

「本当に美味しい…。」

「そうや。お茶もやで。」

すすめられて、口をつけないと、ほろ苦い甘みが口内に広がった。

「本当…。」

息をついた櫻子を、妙月はにこにこと見つめていた。

気持ちが和んだところで、縁側を見た。

「ここ庵にも紅葉が植えられているのね。」

「そうや、今はまだ朱色やけど、来週には真紅になるさかい、

楽しみにしてるんよ。」

「……私、来週どうしたらいいのかしら。」

「どうせ、その強引なお人は、断つても、また別の日に来なさるんやろ？それやつたら、お会いしてみたらどう？それでも、嫌やつたら、次から会わんかったらよろしいのや。」

「簡単に言いなさるのね、妙月様は……。」

「悩んでも、体の毒になるだけや。」

櫻子は苦笑した。

「煩惱の数だけ、人は強くなれるんですけど。死んだら煩わしいも何も在りはしません。悩めるだけ幸せや、と気楽に構えとき。」

妙月は、抹茶をすすつた。

小柄な人だが、櫻子以上にしつかりした人だと思った。

「でも、聞いてもらえるだけでも、随分楽になつたわ。」

「うちかて、びっくりしたで。最初に見たときから、櫻ちゃんの顔が暗かつたさかい。」

「そんなに……？」

「ええ。そして、筆を持つたら、いつもの勢いもなくて何かよわよわしいし。声かけたら深刻な顔をするから、てっきり何か悪い病気にも罹つたんかと思つたんよ。きっと、家には話せる人がいなかつたんやろ？氣鬱になる前に、こうやって、美味しいものでも食べながら、全部吐いてしまえばいいんや。」

確かに、家に帰つても、誰にも相談できなかつたのは、事実だ。

今、働いている女中には、年が近くて親しい人もいなし。

斎木に話したところで、あの鉄面皮は微動だにしそうにないし、兄は怒つて榆崎を切りつけそうだ。

そして、父は、面白がつて、榆崎を屋敷に招きかねない。

あの俺様で、豪胆で、飄々とした男は、父が好感を持ちそうな人物だと思う。うつかり気に入つて、屋敷を出入りするようになつては、それこそ逃げ場が無い。

梅造と榆崎が、仲良く日本酒を酌み交わしている姿が、ありありと想像できてしまう。ああ、嫌だ。

「そうや、櫻子ちゃん。今年の大晦日は忙しいの？」

「いえ、年末年始は父もお休みするみたいにしてるから、特に何もないわ。」

「それやつたら、うちの庵で、一緒に年越蕎麦でも食べへん？それとも、家族の方と一緒に過ごわはる？」

「私が来ていいの？」

「もちろんや。ほかの尼僧も喜ばねるよ。」

「じゃあ、お邪魔したいわ。」

櫻子は、妙月と約束をして、そのまま櫻子の続きをせざて、帰宅した。

土曜日、榆崎蓮一は懲りずに、意氣揚々と一階堂家の門をくぐった。

「やつぱり来たのね？」

榆崎は、前回と同じように、鷹揚に長椅子に腰をかけて、斎木から用意された紅茶をすすつていたが、現れた櫻子を見て、立ち上がつた。

「やあやあ！また、お会いできましたね、櫻子さん。」

榆崎は、快活に笑いかけた。

ぬけぬけと言つもんだ、と櫻子は思った。

「お約束していた通り、帝劇を見に行きましょう。」

「私、もうあなたとは一緒に行かない、って言つたわ？」  
今日の櫻子の髪型は、横髪をすくつて後ろで留めただけだ。緩やかなくせのある長髪を、背中に流したままでいる。腕を組んで、王立ちのよう、榆崎の前に立つている。

「おや、嫌われたようですね。」

「当たり前よ！」

傍にいる斎木が疑惑の目を向けたのに気がついて、櫻子はとりあえず落ち着く事にした。

「怒ると額に皺がよりますよ。この花でもご覧になつて、安らかな気分を取り戻して下さい。」

そう言つて、榆崎は、また大きな薔薇の花束を取り出す。

今度は、真紅ではなくて、淡い桃色の薔薇だった。香りも、この間のものよりも、やわらかで、甘い。

「ありがとう。」

小さく言つて、櫻子はそれを受け取つた。

斎木にそれを後で花瓶にでも生けるよつて言つて、渡す。

「あと、今日は、これもね。」

すこし大きな包みを渡された。

「開けてみてください。」

中から出たのは、着物の帯だった。

赤地に、櫻の文様が散らされた、高級そうな品だった。

「きれいな帯ね。どうもありがとう」

「……素直ですな。突っ返されるかと冷や冷やしましたよ。」  
案するどころか、その強い瞳は、底抜けない自信に満ち溢れている。

その瞳を細めて、笑う。

「では、今日は、こうしましよう。そんなに心配だつたら、家の者を誰か一緒に連れてくればいい。」

思つてもいない提案だった。

「どうだ? それともこの屋敷には芸術には興味が無い者ばかりか? 違うだろ? 俺はあなたと外出できる。あなたは、安心して俺と一緒に居られるつてわけさ。」

どこか勝ち誇ったように、榆崎が言つ。

どうしてそこまでして、自分と出かけたいのかがわからない。

櫻子がどうしてよいかまじついていると、榆崎がさりげに提案する。

「そこの執事さんは、今日は忙しいのかい?」

「は?」

斎木が口を大きく開いた。

「私はこの家の執事ですから、外聞もありますので。お嬢様と外出はできません。」

「お嬢さんのお守も仕事のうちだろ? なに、ほんの数時間の事だ。帝国劇場に行つて帰る、それだけの事だ。固い事言いなさんな。

斎木と櫻子は、困ったように、お互に顔を見合せた。

しかし、この年になつて、外出に使用人付とは、いかがなものか。

「ま、待つて、私の付き添いなんて斎木が可哀想だわ。私、一人で行けるわよ。」

「

いつも忙しくしている斎木に、余計な負担をかけたくなかった。

「ほう、お嬢さんは一人でも大丈夫との事ですね？」

言つてしまつてから、しまつた、と思つた。

「それじゃあ、参りましょうか。」

榆崎が、手にしていた紅茶のカップを戻して、立ち上がつた。

「あ、あなた、私を嵌めたのねつ？」

「何を言いなさる。俺は、妥協案を提案しただけですぞ。」

驚いたような顔をしているが、その目は据わつていて、  
勝ち誇つたようにも見えた。

やられた。

「外で、車を待たせています。私は先に乗つて待つていていますから、  
後で会いましょう、櫻子さん。」

傲岸な声音で言い放つ。

「紅茶は大変美味しかつたよ、執事さん。今度、うちの秘書にも、  
淹れ方を教えてやつて欲しいものだ。」

斎木の肩を、ポンと右肩で叩いて、応接室を出る。

「私でよければ、いつでもお教えいたしましょう。」

一礼して榆崎を送る斎木が、複雑な顔をしていた事には、誰も気がつかなかつた。

## 帝国劇場

通称、帝劇は、1911年にした開館した、日本発の西洋式演劇  
劇場である。

しかし、知識人の尽力により、歌舞伎も上演できる和洋折衷の劇場に成し遂げた事は、古代から大陸の文化を真似ではなく吸收する事で、日本文化を成長させてきた日本人の真髓を象徴しているかの

ようである。

ルネサンス様式を基調とした四階建ての外壁には、白色の装飾煉瓦が使われ、屋上には能楽「翁」の彫刻像が施された。

その帝劇の象徴は、当時の新聞から、「巍然きせんたる白亜の一閣を成して宛ら劇界の霸王たらんず壯觀ていを呈せる」と評された。

また広い敷地には、劇場のある本館以外にも、技芸学校、大道具製作所、背景部製作所等が設置されていた。

「櫻子さんは、もちろん帝劇は初めてではないだろ?」

「数回ね。でも、いつも、中に入るとびっくりするわ。ここつて、座席も、切符売り場も、休憩室も、お手洗いも全部左右対称なんだもの。」

一階の正面玄関の扉を通されて、その前面の階段を、榆崎と上りながら話していた。

今日は、和風の装いで来た櫻子は、行儀作法として、榆崎からもらった帯を締めている。

着物は、白地に、振袖の裾の部分だけ赤と桃色になつていて、榆崎を、帯に合わせて持ち合わせの内から選んだ。

榆崎は、時々、ちらちらと櫻子の装いを見ながら、じことなく満足げだった。

上ると、また扉があり、そこで切符を見せて入る。

「どうぞ、櫻子さん。」

榆崎が、その扉をうやうやしく開けた。

「ありがとう。」

その奥は、大理石の柱の立つている広間にでる。そここの廊下を進めば一階の客席にたどり着ける。

客席は約1700席で、一階と二階が椅子席、三階と四階はベンチ席で、馬のひづめのような形に並んでいる。内壁は金色。天井にはドーム型のシャンデリア。

櫻子は、天女が羽衣を纏つて昇天する場面が描かれた天井画を見た。

三年後、関東大震災が起ころる事になるのだが、耐震性や防火装置に力を注いでいたこの劇場は、倒壊を免れ火災も起きなかつた。

しかし、周囲から火の粉が、まるで隕石が落下するかのように飛来したことで、壮絶な消失を遂げる事になることを、櫻子達はまだ知らない。

並んで座つてしばらく経つと、暗くなつて、劇が始まつた。

しかし、灯りがなくなつたのをいいことに、楳崎は、櫻子が座席のふちに置いていた手に、自分の手を重ねた。

驚いた櫻子が、何かを言いたげに横を向くと、楳崎もこちらを向いたのが、影の輪郭でわかつた。

その頭が近づく。

「いいでしよう？ これくらい。」

甘みを帯びた、艶めかしい声音が、耳元で囁く。

許可を求めるというよりは、否とは言わせず、と言うつかのよう。また、もとの位置に戻つていつた楳崎の顔は、わからない。しかし、きっとイタズラ坊主のように、にやついているのだと思つた。

櫻子は、眉をしかめたが、暗闇のせいで、楳崎には伝わらないと思ひ、あきらめて、劇に集中した。

しばらくすると、今度は、櫻子の手をひっくり返して、手のひらが上向きになるようにし、指の間に自分のを絡めて、握つてきた。大きな手に、長い指をしているが、節が目立つて、つづつしている。皮膚の皮も厚い。苦労を重ねた手なのだと直感で思つた。

そこから、熱いような温かいような、楳崎の体温を感じて、櫻子の心臓は高鳴つた。

楳崎の方を見たが、彼は知らんふりである。

無視、ではなかつた。

彼は、劇中に、すっかりご就寝だつた。

いびきは立てていないが、その安らかな呼吸具合と、すっかり椅子に体を沈めている事から、眠つているとわかる。

手探り、しかも無意識の中で自分の手を求められた事に、顔の血

潮がたきつた。

きっと、榆崎は、本当は観劇なんて興味はあまりないのだらう。

（私の為……なのよね、やっぱり。）

忙しい間を縫つて、好きでもない劇を、自分と見る為に来てくれたのだと思うと、たゞがに、心の端を、さもつとつままれる様な思いがした。

いつも、さうした眼をした獅子のような彼が、じつもやすやすと眠りこけてる所に、自分が隣で座つてこるのは、奇妙な感覚だつた。

そのまま、榆崎は結局、終幕まで田観めることは無かつた。

「榆崎さん？ 劇は終わりましたよ。」

灯りが戻ると、観客達は、わらわらと立ち上がり始めた。

「おーい！」

櫻子は、揺すっても起きない榆崎の耳元に、口を寄せた。

「……ああ？」

ようやく、自分が眠りこけていたことに気がついた榆崎は、まぶしさつい田を何回か開けたり閉じたりして、それから、首を左右にあつて運動してから、辺りを見回した。

「もう終わつたのか？」

「今、さつあ。」

榆崎は、しまつた、と言つた感じで、右手を額に当つた。

「すまない、眠つてしまつた。」

「仕方ないわ、きっとお疲れなのよ。」

不審げに、櫻子を見た。

「な、何？」

「いや、今日のお嬢さんは、前回と比べて、やけに優しいな、と思つてな。」

「私は、いつでもこれくらい優しいわよ。」

つん、とすまして、櫻子は、榆崎を置いて、扉の方を向いて歩き出した。

慌てて、榆崎も立ち上がり、櫻子の横に並ぶ。

そして、腕を曲げて、示した。

手を絡めろ、といつことらしい。

躊躇していると、早く、といつよつて、榆崎が軽く頸でしゃくつた。仕方なく、手を置いた。布越しでも、引き締まつた固い腕の感触と、榆崎の体温が伝わってきた、

「どうだ、俺を好きになつていただろ？」「

歯を見せて笑いかける。

「そ、そういう所が傲慢だつて言つのよつ。」

それでも、榆崎は上機嫌だ。

そのまま、一人で劇場を出た。

今日は運転手はいないようで、榆崎が運転席に座つて車を運転する。

「まだ四時か。軽く夕飯でも食つてから行くか？鶏肉はやめておいた方が良さそうだが、櫻子さんは、何がいい？」

「私は好き嫌いは無いから、食べ物なら何でも好きだわ。榆崎さんは、最近食べてなかつたものとあるかしら？」

「ふむ。そうだな……寿司でもいいか？最近、洋食ばかりでな。

「じゃあ、そうしましょ。」「

一人は、途中で、榆崎が行きつけだという寿司屋に入った。

「浅草の酉の市か。一体、何年ぶりかな？」

お絞りで手を拭きながら、榆崎が首を傾げた。

「そんなに言つてないの？賑やかで楽しいのに。」「

「ははは、そうだな。これからは浅草にも暇が出来たら出かける事にしよう。せっかく帝都に住んでいるからな。」「

「そういえば、榆崎さんは、関西にも詳しいものね。私も、京都

の嵯峨とか、奈良の吉野に小さいけれど別荘があつたから、少しは知っているんだけど、最近は、あまり行く機会がないわね。

「この間も、そう仰つてましたな。」

榆崎は、出してもらつた温かい茶をすすつた。

「しかし、別荘が嵯峨に吉野にあるとは。雅な所に建てましたね。

「そうね。私が小さいとき、まだ生きていた母は、体が弱かつたので、帝都よりも、関西の別荘の方で暮らす事が多かつたので、私もその頃はよく居たわ。特に春は、あの辺りは、櫻が綺麗なのを存知かしら?」

櫻子は、田を瞑つた。その光景をまぶたの裏に思い出していくようだ。

「嵯峨はまだ知りませんが、吉野の櫻は、随分昔に、一度だけ。

「すこでしょ? 国語の教師をするようになつてから、和歌を勉強するようになつたけれど、吉野の櫻について詠んでる歌の多い事! でも、無理もないわね。」

「…………。」

榆崎の顔が、急に何かを考え始めたのに気がつくこともなく、櫻子は、出された寿司を見て、感激した。

「なんてお魚の身の色が綺麗な寿司! あなたつて、本当にいいもの食べてるのねえ……。」

「ははは、俺はあなたの方がいろんな物に食い飽きてるだらうと思つて、今回もここに連れて来てよいものか一瞬考えたのだがなあ。ようだつた。」

「榆崎は、鮪の寿司を一口で、中に入れん。

この間、仏蘭西料理店に一緒に行つた時から、ほんやり気がついていたが、どうやら櫻子は、榆崎が思つていたほど、飽食ではないようだつた。

きっと、自宅での通常の食事は、質素なものなのだろう。あの斎木とかいう執事が、内容を決めているのかは知らないが。

「そういえば、今日は、あの運転手さんは居ないのね？」

「ああ、私的な用事にも、あいつを使うのは間違いだつたとわかつたのでね。」

榆崎は、何故だか急に、くつくつ、と思い出すかのよひに笑った。

櫻子は意味がわからなかつたが、聞かない事にした。

食べ終えると、二人は浅草に向かつた。

## 【榆崎蓮一】編(4) 浅草四重奏(R15)

「まるで、江戸時代に戻ったみたいねえ。」

浅草「長國寺」の西の市は、江戸時代からの伝統と文化を受け継いで、参詣者に小さな江戸を体現させてくれる場所だ。

西の市の始まりは、近在の農民が鎮守である「鷺大明神」（わしだい）に感謝した収穫祭であつたと伝えられている。やがて江戸市中からは武士だけではなく、町人がこぞつて参詣するようになり、江戸文化の一翼を担つた。

長國寺は、東隣に新吉原をひかえている。祭り当日、吉原は通常は開けない大門以外の門も開放して、昼見世から開き、遊廓にとっても特別な日であった。

深夜零時に、鷺神社で祝詞が始まり、その夜まで続くが、夜は一層、客が増える。

長國寺や鷺神社にびっしりと掛けられた提灯が、こつこつと境内を照らし、金銀細工の縁起熊手がきらきらとその光を受けて輝いている。

周囲では、熊手商と客の駆け引きが繰り広げられている。

「榆崎さん、熊手は買わないの？会社を経営してらしてるのに。」

熊手を「買つた買つた」の掛け声や、手縫めが聞こえてくる。賑やかさが高まるにつれて、周囲の屋台の居酒屋も、大変繁盛していた。

「今日の俺は、あなたの付き添いだからな。それより、あなたはどうなんだ？」

「私は、こっち。」

櫻子は、飴や、切山椒、江戸いり豆の屋台を指差した。

榆崎は、噴出しそうになるのをこらえた。

しかし、顔の引きつり具合は、隠し切れなかつたようだ、

「どうしたの、榆崎さん。」

と、櫻子に不思議がられている。

女と逢引のようなものをする時、榆崎は、これまで自分が櫻子にしてきたように、高級な料理店や、観劇などに連れて行ってやつた。浅草には来た事がなかつた。

ましてや、程よい夕方に一人つきりで来ているにも関わらず、周囲はどこからこれだけ集まつたんだろうか、という程の人込み。そして、沢山の屋台に興味津々な相手。

何もかもが、自分の今までの常識から、大きく逸脱していた。本当に、お嬢さんは、色んな意味で、面白い。

「栗餅の事を、ここでは黄金餅つて言つて、食べれば黄金持ちになれるつていうけれど、榆崎さんは、<sup>いら</sup>必要ないわよね。」

そんな事を考えていたら、当の櫻子は、既に何処からか、いろいろ買い込んで来ていた。

「つき合わせちゃつて、ごめんなさいね。兄も、今年は私のお守をしないで済んだから、助かつてるとと思うわ。……あら？」

櫻子は、人込みの奥に、見慣れた人物を見つけた。

「やだ、兄様だわ。」

榆崎も、つられて前の方を見ると、夜会の時、見かけた男が確かに居た。

「確かに、兄上は軍人殿でしたな。」

「そうよ。」

櫻子は、「兄様！」と声をかけようと手を上げかけたが、止めた。今まで、桃真に重なつて見えなかつたが、その隣には、女性が居たからだ。

綺麗に化粧をして、藍色の着物を着た、色白の美人が居た。結い上げた髪には、簪を挿している。

「ご婦人と一緒のようですな。」

榆崎に言われなくても、一目瞭然だつた。

「私と一緒に行くのを渋つていたのは、きっと、あの方と一緒に行く為だつたんだわ。」

「あなたと、御知り合いの女性かな？」

「知らない人、よ。」

櫻子は、素つ気なく言った。

急に、兄が遠い人のように思えた。

「櫻子さん？」

榆崎は、桃真と女が顔を寄せ合つて何かを話している様子を、じつと見つめたままの櫻子に声をかけた。

「あ、ごめんなさい。榆崎さん、あまり来た事がないんでしょう。何か見てみたいものはある？」

櫻子は、榆崎に気を使って、酉の市のいろいろな所を広く見て回る事にした。

少し疲れてきた頃、二人は、屋台に腰をかけて、おでんなどを食べていた。

「榆崎さん、お酒飲んで大丈夫なの？」

日本酒を口に含み、飲み込む。

榆崎の喉仏が大きく上下した。

「大丈夫だ。実は、あやつは今晩この近くに来ているのでな、八時になつたら山門で会う予定だ。彼に運転を頼めばいい。」

あやつ、というのは新堂のことである。

「心配ない、あいつは下戸だ。一滴も飲めんさ。」

そう言つた榆崎の顔は、ほんのり紅く染まつていた。

「最近は、洋酒ばかりだったから、日本酒は久しぶりだ。」

「美味しそうに飲むわねえ。」

「あなたは、飲まないのか？」

「甘酒は大丈夫だけど、日本酒は辛くて無理ね。」

「よし、もらつて来てやろう。」

櫻子が何か言う前に、榆崎は立ち上がつた。

そして直ぐに、一つ瓶を抱えて戻ってきた。

「ほら、持ちな。注いでやろつ。」

櫻子が差し出すと、杯に甘酒が注がれる。

白い湯気が、立ち込めた。

熱いそれを口に入れると、じつじの甘い味がした。

「いいか？」

「うん、甘いわ。」

体が芯から温まつてくる。

榆崎が、不意に、杯をもつていなしの方の櫻子の手を握った。

「なんだ、すっかり冷えてるじゃないか。大丈夫か？」

「このくらい大丈夫よ。」

櫻子がそういうと、榆崎はもう一口酒を含んだ。

「まさか、お嬢さんとこうして酒が飲めるとはなあ。」

「どうしたの？」

「夜会で会つた時のあなたは、いかにも財閥令嬢だつたからさ。新しい服を着て、白銀の簪を挿して、ほんのりと白粉の匂いをさせていた。」

「本当は、あなたが思つていたような上品な女性でなくて、ごめんなさいね。」

「いや、楽しいんだ。仕事柄、ご婦人やお嬢さんのお相手をさせて頂く事もあるが、一緒に杯を傾けるのは、高貴な洋酒や葡萄酒ばかりでね。一緒に並んで、屋台で酒を飲んだのは、あなたが始めてだ、櫻子さん。」

酒が回つているせいか、いつにも増して、上機嫌だ。

「それは、良かつたですこと。」

櫻子は、軽く受け流して、おでんの鉢の卵を箸でつづつついてくる。

「ははは、まいつたなあ。」

榆崎は、櫻子の背中に腕を回して、軽く抱いた。

「俺は、あなたが本当に可愛い。」

「だから、どうして直に、そういうこと言つたの。」

「嘘じやないさ。」

榆崎は、少し体を櫻子の方に寄せて、囁いた。

「その証拠に、今、猛烈にあなたに口づけしたい。……が、いかん

せん、人が邪魔だ。」

櫻子は、箸でつまんでいた大根を、鉢の中に落とした。驚いて、榆崎を凝視する櫻子を、面白そうに見ている。櫻子は、甘酒を一人で注いで、一気に飲み干した。

「櫻子さん、どうしてあんた、甘酒で酔うんだ？」  
「酔つてないわよ。酔つてるのは、榆崎さんの方よ？」  
車に戻った二人は、もつれ合つようにして、後部座席になだれ込んだ。

結論から言うと、二人とも、軽く酔っていた。  
頬の血色がほんのり良くなっている。

「まだ七時半も前じゃないか。」

とろんとした顔で、榆崎が自分の腕時計の文字盤を見た。それから、上を仰いで、タイを緩め、シャツの襟を開いて、風を送つた。

「いかん、少し飲みすぎた。」

「気分は悪くない？」

榆崎の右隣に座った櫻子が、心配そうに覗き込んだ。

「気分は、最高さ。」

榆崎は、太い腕を、櫻子の背中に回して、がつちりと抱きしめた。気だるいような、熱気と酒の匂い。

自分の頬が、榆崎の広い胸にひつついている事がわかる。櫻子が口を開く前に、榆崎の指が伸びて、唇に触れた。そして、優しく下唇をなでられた。

触られているか、いないのかと、いのうような動きで、触れられたせいで、櫻子は震えた。

「なあ、貞淑な二階堂のお嬢さんのここに、一体今まで何人が触れたんだ？」

櫻子は、一瞬、言われた意味がわからなくて、まばたきをした。

「榆崎さん……？」

しかし、櫻子の戸惑いを無視して、榆崎の指が顎にかかる。

上に向かされて、榆崎の顔が、酒の匂いと共に近づいてきた。

「また、怒られても、俺はかまわない。」

櫻子が気がついた時には、柔らかい彼の唇が重なっていた。恥ずかしくて、瞼を伏せた。しかし、その為に、彼が何度も触れる感触がより感じられてしまう。

ついばまれるようになり、少し離れたかと思いつとまた吸われる。その強さも、始めは唇の形を確かめるような軽い感触だったのが、だんだん深いものになっていく。

顔から食べられてしまひではないか、と思いつゝ、最後はかぶりついてくる。

櫻子は、息が出来なくなり、どうしたものかと思つて、顔を背けようとする。

しかし、榆崎の濡れた舌が忍び込んできた。

舌は内側にすべり込み、歯をなぞる。

榆崎は、舌が、より深いところを田指す為に、一層吸い付いてくる。

離されて、息をつく隙をとられたと思つて、また貪られる。そして、怖くて、逃れようとする櫻子の舌に絡んで、攻め立ててくる。

「すまない……。」

かされるようなさわやかとともに、顔が離れた。火照った唇は、発火してしまいそうだった。

しかし、再び抱きすくめられる。そして、耳の後ろに口付けられて、耳を甘く噛まれた。噛まれるたびに、口内にこめられた息が耳にかかり、その熱さにぞくくりとする。

やがて、首筋をゆっくり辿つて、鎖骨に下りていき、襟もとに顔を埋められる。朝から時間が経つたせいで僅かに伸びた髪のぞくくりとした感触に、怯えた。

着物をはだけられて、鎖骨を激しく口付けられる。全身を貫く刺激に、恐怖心が増した。

「だ、駄目！」

榆崎の肩を掴んで、押し戻す。離れた顔が上げられた時、その心を射抜くかのような強い瞳に、はつきりと情欲の色が宿っているのを櫻子は見た。

それに圧倒されて、何も出来ないでいると、今度は優しく抱き寄せられた。

そして、白銀の櫛を外され、解けた髪を、榆崎の指で優しく何度も、梳かれる。

その一房を掴んで、唇を寄せた。

「綺麗な髪だな……石鹼と香油の香りがする。」

熱病にでも冒されたような、狂おしげな、甘い響き。

「今日のあなたは少し変だ。慣れぬ酒まで飲んで……。」

髪を愛おしそうに梳きながら、別の房を掴んで、何度も、何度も、髪に口付ける。

「はあ……あなたは髪まで甘いのか……？」

そして、また抱き寄せて、首と肩の間に顔を埋める。

「いくら祭りとは言え、こんな霜月の夜道を、毎年、あの兄貴と一緒に帰っているのか？知らぬ女と一緒に所を見て、本当は寂しかつたんだろう？」

なあ、あんたは、あの人の事が好きなのか、と榆崎が言った。

「な、何言つてるの？血はつながっていなくても、兄弟なのよ？変な事言わないで。」

「血が繋がっていない……？ そ、うか、だからか。じゃあ、なあさらだな。夜会の時、櫻子さんに駆け寄る彼を見て、そうじやないかという気がしてた。」

「え……？」

「その枷が、もし外される事があるならば、あの男、あなたを抱く氣でいるぞ。」

「いつもの悠然とした、どこか人を見下すようなからかうよつな声ではなく、真摯な口調で榆崎が言った。

「あなたが、本当に、兄貴の事を好きじゃなくても、彼の方はわからん。」

「馬鹿な事言わないで！」

酉の市は、夜の方が賑やかだ。しかし、玲子などを誘えば、危険な目に合わせてしまうかも知れない。

だから、兄について来てもらっている。それだけの事だ。

女性と一緒に居たところを見た時は、確かにびっくりしたが、それは、私が随分前から頼んでいたにも関わらず、なかなか一緒に行けるのか、行けないのか、という返事をくれなかつたからだ。

他の人と一緒に行きたいならば、自分などに遠慮せず、はつきり言えば良かつたのに。そもそも、自分と一緒にに行くのが面倒ならば、外出をあきらめても良かつたのに。

なのに、どうして、自分が兄を好いている、などといつ結論に到るのだろう、この男は。

わけがわからない。

「どうして、そういう思考回路にたどり着くの？私の事を良いけれど、兄の事を悪く言つのは止めて頂戴。」

「あなたはっ……。」

何か言いたげな榆崎だったが、その先を言つ事はなかつた。代わりに、まるで襲い掛かるかのように、深く腰を抱きしめられた。

『』のように後ろ向きにしなる体に、ぴつたりと榆崎の体が合わさり、激しく、首筋を口付けられる。

「あ……。」

唇の間で何度も食まれ、最後にきつく吸われると、泣きたくなるくらい、怖い感覚が襲つた。

「嫌つ！」

反射的に、榆崎の体を、思いっきり強く、突き飛ばしてしまつた。

慌てて、左右の襟を寄せて、彼から離れる。

「もう、信じられない！何で、こんな事するの？」

そうして、車の扉を開けて、外に飛び出した。

その弾みで、櫛が、音を立てて、道路に落ちる。

「ちょっと、櫻子さん！？」

榆崎の静止も聞かず、一刻も早く車から遠ざかるつと、走り出す。

慌てて、榆崎も飛び降りて、後を追う。

草履の櫻子と、靴の榆崎では、比べるまでもなく、あっさりと、榆崎に腕を掴まる。

「離して！」

「馬鹿、こんな暗い道を一人で行くなんて危険じゃないか。俺が付き添つた意味が無くなる。」

「あなたと二人つきりでいる方が、危ないってわかったわよっ、私は！」

離して、離さない、の攻防が繰り広げられている最中に、二人の前にあきれたような声がかかった。

「何、痴話喧嘩してるんですか、お一人さん。」

新堂だった。

背広の上に、黒いトレンチ・コートを着込んでいる。

「それとも、もう夫婦喧嘩ですか？気が早いですね。」

たつぱりと皮肉を含ませて、言い放つ。

しかし、無表情である事にかわりはない。

櫻子は、どうしようもない様子を見られて、穴があれば入りたいような気持ちになつた。

「新堂…。」

「私をお持ちだったんでしょう？とつとと運転しますから、乗つてください、お一人さん。」

淡々と言ひながら、車の方に向けて手を広げて、促す。

櫻子は、渋々言われるがまま、引き換えた。

しかし、帰宅途中、自分は、後部座席の左端にぴたりとくつつい

て、右側にいる榆崎と少しでも距離を離そうとしていた。

「送つてくださいって、ありがとう、新堂さん。」

車から、降りると、新堂に礼を述べたが、榆崎にはひとつひ、葉どころか視線すらも交わわず、屋敷の中に入つていった。

櫻子が去つた後、榆崎は手にしていた彼女の櫛を取り出して、見つめた。

「返し損ねたな。」

道に、音を立てて落ちた、彼女の白金の櫛。

「でも、まあ、いいさ。これで、また会う理由ができた。」

それを、手のひらで弄び始めた。

「……恋は人をお馬鹿にするつて言いますけど、あなたは救い様のない大馬鹿ですよね、社長？」

心を剣山で差すように、ずけずけといつ。

「私が来なければ、一体ナニをしようとしてたんです。」

車内とはいえ、往来の多い、門前で。ちょっとは、学習して欲しい。

犬ですら、お座りと待ては覚えるところに。

「あきれたな、また覗いたのか。」

不可抗力、という言葉を彼の脳みそに叩き込んでやりたい。

「八時に約束したじゃないです。俺は、どうしたもんかと思ってこの寒空の中、外に居たんですよ。」

思わず、「私」から「俺」に戻つている。

律儀に十分前にやつてきた新堂は、声をかけるわけにもいかず、櫻子が飛び出してくるまでの十五分間程度も、そのままだった。

「おかげ様で、体が芯から冷え切つてしましましたよ。ええ。」

「俺は、来なくていい、と言つたのに、来ると言つたのはお前だ

るつ？」

その言葉を聞いて、新堂は、この主を手でひねりつぶしてやりたい欲に駆られた。

そんな新堂の心中にも気がつかず、榆崎は、ぽつり、と思いついたように言った。

「思わず平手打ちされるかと思つたが、違つたな。」

「怒つていたとは言え、よつまどんの理由が無い限り、の方は簡単に他人を殴つたりしませんよ。」

「どうして、わかる?」

「いくつか、武道をたしなんでおられるんでしょう。お嬢さんが本氣で殴つたら、あなた、口の中を切る程度ではすみませんよ。」

「こわや、こわや、と榆崎がからかうように笑みを浮かべる。

「お嬢さんが、あの白い体を火照らせて、可愛い声で啼いて俺にすがりつく姿を早くみたいもんだな。」

そして今度は、くつ、くつ、くつと笑う。

新堂の忠告は、既に素通りされている。

「あなたって、本当に何処までも前向きですね。」

新堂の忠告は、既に素通りされている。

「あなたって、本当に何処までも前向きですね。」

新堂は、なぜだか、自分が自宅で飼っている柴犬を思い出した。いつもはそれなりに可愛いが、疲れて帰宅したときも、庭先で尻尾を振つて自分に向かえる姿がうつとおしい。それで、「あつちへ行け」と、追い払つても、そんな新堂の気持ちを汲み取れずに無邪気にまとわりつこうとする。

その瞳は、榆崎とは違ひ百倍は愛くるしいが、どことなく性質が似ている……気がする。

（榆犬……。）

心の中だけで、柴犬をもじつて、自分の社長を恐ろしい名で呼んだ。

そして、新堂は、気を取り直した。

「しかし、私の話を聞けば、私がお邪魔虫だなんて、言えなくなりますよ。」

また、一人称が「私」に戻つてゐる。

「次は、農務大臣が、亡くなりました。明日、日報に載りますよ。」

事故死としてね。」

榆崎が、眉を上げた。

「本当か？」

「ええ。私は、あなたが人様から恨まれるような事はしていないと信じていますが、それでも夜道をお一人で行動されるのは、部下として認めるわけにはいけませんから、こうして来たのですよ。」

新堂の前職は、警察官だった。ゆえに、彼の仕事は、榆崎の身辺警護も兼任している。

この事は、社内でも極秘事項であった。

「何の事故だ？自動車か？」

「大きな野犬に襲われそうです。喉笛を裂かれ、男の急所も噛みちぎられていたそうな。」

榆崎は、想像したのか、痛そうに顔をしかめた。

「一連の事件と、関係がありそうなのか？」

「まだ、わかりません。しかし、今回も夏椿の花が遺体の前に落ちていました。」

椿は、花盛りのうちに、頭がとれるように、ぽろりと落ちる。

その姿から、武士が大変忌み嫌っていた花だ。

「今回も？」

「前回の議員殿は、体の近くには落ちていませんでした。その後、彼の背広の胸ポケットに入っていたのを家族の方が発見したのです。」

「金属会社の社長の場合は？」

「彼の場合は……。」

聞いた話を思い出して、新堂の声が曇った。

「悔やみの日、棺が運ばれて、参列者と最後の対面をする時、中の花が全部、すっかり夏椿とすり替わっていました。」

「なんだと……？」

色々とりどりの花を供えていたはずが、最後に、一面の白い花に変わっている。

美しいようで、この上なく氣味が悪い。

「しかし、別々の犯人が結託して、夏椿を使う事で、同一犯の仕業に見せているかもしません。

「一体、何人の悪党が、こうして政財界の偉い人たちを襲撃しようとしているかはわからないのです。」

「しかし、夏椿といえば、その通り夏の花じゃないか。どうして、今の時期に？」

今の時期といえば、冬に咲く紅い椿も咲かない時期だ。

「そんな事、私が知るわけないでしょ？」

榆崎は、考え込むように、顎に手を当てた。

「だから、あなたも氣をつけてくださいね、という話です。」

「わかった。今のところ、俺には見に覚えがない話だが、氣をつける。」

「頼みましたよ。あ、そうそう。」

新堂は、思い出したように、別の話を切り出した。

「例の件、上手くいきそうですよ。新しい協力者を得ることが出来ました。」

「おお、そうか！」

榆崎は、嬉しそうに叫んだ。

「師走に、ホテルで社交があるでしょう。その時に、お会いできますよ。」

「そうか。」

老舗の子女、つまり次期の跡取りや、若手実業家などの交流を深める為の、若年層を主とした、宴会があるのだ。榆崎は、それに参加するつもりだった。

「あなたの代わりはいないのですから、うつかり殺されたりしないで下さいね。あと、ちょっと、窓を開けてくれませんか？」

「寒いじゃないか。」

「酒臭いです。」

渋々、窓を四分の一程開けて、夜氣を入れる。

その時に、榆崎は、雲の無い天から、やや欠けた月が、黄色く光を放つて、下界を照らしていることに気がついた。

祭りの賑わいからすっかり遠ざかって、灯りのない暗闇の道に来ていた。

「あなたは、人前では酔わない人だと思っていましたよ。俺の前でも、そうした事はないのに。」

「おまえの前で酔つたって、気分が良いことでもないさ。」

「あんまり、無茶な事はしないで下さいね。英吉利や仏蘭西で、淑女の扱い方は身につけたでしょ？」。今に嫌われても知りませんよ。」

「ふん、何とでも言つがいいさ。」

そういつて瞼を閉じる。

まだ酒の抜け切らない体は、まるで体の芯を温かい湯気で包まれているような気がする。

安心感にも似た安らぎに包まれて、榆崎は眠りに落ちた。

一方、屋敷に戻った櫻子は、ただいまも言わずに、自分の部屋へ戻つた。

入った瞬間、今まで張り詰めていた糸が切れたように、床に座り込む。

しばらく、茫然自失となつて、部屋の壁を見ていたが、急にあの男を思い出して、恐怖にも似た怒りに襲われた。

（許せない、あの男…。）

熱を帯びた吐息、体臭、腕の感触。

彼に触れられた部分を、何もなかつた事にしたい。

櫻子は、湯を浴びる事にした。

準備を整えて、浴槽に向かう為に、廊下にでる為に、辺りを見回す。

今は、誰にも、自分の姿を見られたくない気がした。

無理やり殻を割られて、中身を取り出されそうな恐怖。

元の自分を取り戻したくて、頭の先からつま先まで、石鹼で洗つた。

湯を浴びた後、髪を布で拭きながら、浴室に戻る。

空気に触れて、冷えてきた濡れ髪が、頬や首筋にまとわりつく。頭を振つても、水を含んだ重みのせいで、また自分を絡め取るよう、鎖骨や胸元にまで攻め入つて来る。

その感触に、まるで、心までもが捕らわれて、そのまま、もう何処へも抜け出せないような気がした。

榆崎が、梳いた髪。

それを断ち切れば、この思いは消えるだらうか。

蜥蜴の尾切りのよう、残された部分は、もう一度新しく、なれるだらうか。

（何も知らなかつたあの頃に。）

櫻子は、急いで一階に下り、裁縫道具の置いてある和室に飛び込んだ。

簞笥にしまつた、布切り鋏を取り出す。

そして、その刃先に、もうすぐ腰まで届けりとしている、自分の長い髪を、押し当てる。

ジヨキン、という鈍い音が、部屋に響く。髪が一房、畳に落ちた。

涙はこぼれなかつた。

母親が、亡くなつた時すら、自分は泣くことはできなかつた。どうやら、感情を体の外へ剥き出しにするのは、苦手な性質らしい。しかし、逆に、もし、じぶんが、声をあげて泣く事が出来たら、こんな行為には及ばなかつただらう。

もう、一房、掴んで、切る。

また、鈍い音と一緒に、自分の太ももの上に落ちた。

濡れた髪によって、夜着がしつとりと湿つてくるのがわかる。

その時だった。

「さ、櫻子様??」

神谷が、蒼白な顔をして、櫻子が右手に握り締めていた鍔を奪い取つた。

「乱れた足音が響いたので、来てみれば……。どうしたんですか、そんな顔をし御髪なんか切りなさつて?」

「神谷……?」

我に返つたように、櫻子が顔を上げた。その姿は、ぱらぱらの長さの髪が、垂れていて、美しくはなかつた。

「ああ、髪を切つっていたのよ。」

「下に髪も敷かない今までですか?それに美容院に行つた方が、格好がつくでしよう?」

「急に切りたい気分になつたのよ。この長さになると手入れも大変で、うつとおしくてね。」

それが誤魔化しの為の方便だという事は、神谷もわかつていた。櫻子も、神谷がそれをそつくり信じるとは思つていなかつた。しかし、無理やり笑うような櫻子の顔を見て、神谷は何も気がついていない風を装つた。

「大分、お切りになりましたね。」

切られた部分は、肩の少し下辺りまでしかなかつた。

「洋装が似合うようになるかも知れないわ。」

鍔を返してくれる?と櫻子が手を伸ばした。

「……僕が切つてあげましょ?」

「えつ?」

「自分で切れば、後ろ髪の具合がわからないでしよう?僕が切つてあげますよ。」

思つてもいなかつた申し出だつた。

「今、下に敷く何かと、櫛を持つてきますから、ちょっと待つて下さい。」

「あ、いいの。筆筒に要らない布があるから、それを使って頂戴。」

櫛もこの部屋にあるから。」

櫻子が取り出したそれを彼女の周りに広げ、彼女自身にも布を巻いた。

そうして、神谷は、櫛で櫻子の髪を梳いて整え、一番最初に切った髪の長さに合わせて、切り始めた。

「綺麗な髪なのに、もつたいないです。」

「いいのよ。また直に伸びるから。それにしても、神谷さんは手先が器用なのね。」

鏡がないので、自分の姿を見ることは出来ないが、手馴れたような手の動きに、驚いた。

「僕には、妻が居ましてね。病気になつてしまつて、最後は寝たきりだったので、こうして髪の手入れをしてやつていたんです。病人は、そう頻繁に湯に入れないでしょ。ですから、手入れがしあすいように、こうして、髪も肩の辺りで整えて。」

「まあ、そうなの。」

「これが、妻です。」

背広の胸ポケットから、写真を取り出した。

今より大分若い神谷と、並んで写っている女性は、優しそうに微笑んでいた。

「これは結婚前の写真なので、少し若いですね。僕とは幼い頃から顔見知りだったので……僕のお守りです。」

そう言って、また大事そうに、元の場所へしました。

神谷が、既婚者で、しかも、その妻を亡くしているといつ話は初耳だった。

まだ若いのに、相当、苦労をしているのだと思つ。

しかし、その苦労を感じさせない柔軟な笑みを、いつも、櫻子や周りに見せている。

「長さはどうします?」

「肩の上の辺りで、お願いできるかしら?」

「随分、切られますね。これは、いろんな方がびっくりされます

ね。」

神谷は微笑んで、櫻子の注文どおり仕上げていく。切り終えると、手鏡を櫻子に渡した。

「どうですか？」

「完璧だわ。どうもありがとうございます。」

「どういたしまして。……よく、お似合いですよ。」

神谷は、切り終えた後の始末をして、部屋を出ようとしました。

「これは、僕が片付けておきましょ。では、おやすみなさい、お嬢様。」

「ありがとうございます、神谷さん。」

そうして、櫻子は、自分の新しい髪型に満足しながら、就寝した。

## 【榆崎蓮】編(6) 手懐ケラレナイ恋

日曜日、榆崎はまたもや一階堂邸にせつて來た。

斎木に呼ばれて、応接室の前の扉に立ち、櫻子は叫んだ。

「申し訳ありませんけれど、もうあなたとお会いする事はありません！」

長椅子に腰掛け、紅茶のカップを手にしたまま、榆崎が目を丸くした。

「おや、すっかり嫌われたようですね。部屋の中にも入ってくださいな」とは。

榆崎は、落ち着いている。

「お顔も拝見したくありませんから。」

「櫻子様、それではあまりにも榆崎様に失礼では……？」

「彼は、今日は何の御用でいらっしゃったの、斎木つ？」

櫻子の剣幕に、斎木の方が慄いている。

「あの……、お嬢様が、昨晩お忘れになつたという櫛をお届けに来てくださいました。」

「櫛？」

そういうえば、榆崎に髪を解かれた後、その櫛が何処へいったかなんて、気にも止めていなかつた。

「そうですよ、立派な理由でしじう？」

榆崎は悠然と、述べる。

「今日もあなたに、花とちょっとした贈り物を持って参りました。俺は、それをお渡ししたい。どうぞ、機嫌を直して、部屋に入ってきて下さい。」

「嫌！」

「ふん……仕方のないお嬢さんだ。」

横柄に長椅子から立ち上がり、自分から、櫻子を向かえ入れる為に、扉を開けた。

「お嬢さん……？ その髪は……。」

昨日とは全く異なつた姿になつた櫻子に、榆崎が動搖した。

眉をしかめて、目を何度も瞬いている。

「切つたのか、髪を？」

「あなたは乱暴で、礼儀を知らない野蛮人よ！ できる事なら、あなたが触れた所を、そつくりそのまま新しくかえてしまいたいくらいの気分だわ！」

「俺のせいなのか……？」

「とぼけないで。私は、もうあなたにお会いしたくはないの。帰つて頂戴。」

櫻子は、榆崎の前で、強引に扉を閉めようとした。

「ま、待て……！」

その腕を引き寄せられる。

「あなたは、そんなに俺の事が嫌いなのか？」

「そうよ、と言いかけて、榆崎が、今まで見たことのないような哀しげな表情をしているのに気がついた。

「衝動的に、髪を切つてしまつ程、俺を拒絶するのか？」

切なげな低い声で問われて、躊躇しそうになる。

「嫌い。」

しかし、逃げずに、その目を真正面から捉える。

「奥さんが欲しいなら、他の人になさつて。あなたなら、私よりも綺麗で、いい所のお嬢様をお嫁にもらえるわ。」

「…………。」

「きつとあなたは、今までとは違う、風変わりな私に興味を持っているのだわ。そして、その私が、全然あなたの思い通りにならなければ、躍起になつているのよ。その事に気づきなさつて？」

早口で、必死に、それだけの事を言つ。

「あなたは、俺が、一時の醉狂であなたに近づいたと、本氣で思つていてるのか！？」

榆崎が急に声を荒げた。

いつも余裕綽々といった感じの彼が、怒っている所を初めて見た。櫻子は、反射的に首をすくめて目を瞑つた。ぶたれるかもしれない、思ったのだ。

しかし、恐る恐る瞳を開くと、そこには、もじかしにような、悲しいような、顔があつた。

「榆崎様、どうか、落ち着いてくださいませ。」

ただ事ならぬ様子を察し、斎木が慌てて、割つて入る。

「……帰る。」

榆崎は、肩をすくめ、流し日に櫻子を一瞥すると、

「もう、あなたとは、会わない。いろいろすまなかつた。」

そして、長椅子の足元に置いておいた自分の荷物を持ち、扉を出て櫻子の横を過ぎ去る。

「元気でな、櫻子さん。」

一度だけ振り返り、屋敷の外へと去つていった。

完全に足音が聞こえなくなつたのを感じると、応接室の中へと入り、長椅子に乱暴に腰掛けた。

「お嬢様……。」

「これで良かつたのよ、斎木さん。」

なんでもなかつた風に、斎木に微笑みかける。

しかし、口の中は、何も食べていないので、苦い味がするかのようだつた。

「私にも、紅茶を入れてくれる?」

「え?ええ……今、新しいお湯を沸かして参りますので、少々お待ちください。」

そういつて、厨房へ戻つていった。

残された櫻子は立ち上がり、机をはさんで反対側の長椅子にある、榆崎が残していった花束を持つた。

一番最初に彼からもらつたものと同じ、深い真紅の薔薇だった。

「ん?」

良く見ると、その真中に、薔薇と同じ色の包みが埋められている。

それを取り出して、開けると、中から小さな木箱が出てきた。

「…………！」

その木箱の中には、桜の模様のした、新品の銀の櫛が入っていた。ところどころに、真珠や宝石が埋め込まれたそれは、櫻子が忘れていたものよりも、何倍もの値段がするような品だった。

（だから、榆崎さんはあんなに怒っていたんだわ。）

この髪の長さでは、髪を結えない。

彼を見せた、悲しげな表情が思い出される。

心を傷つけてしまった、と櫻子は思った。

その櫛を胸に抱きしめて、どうにもならない思いの行き場を探そうとした。

月曜日、仕事を終えた櫻子は、妙月の庵に書を習いに行く事にした。

庵の周りに作つてある生垣にそつて、道を歩いていると、緑葉の匂いに混じつて、金木犀の匂いがした。前回もきつと薫つっていたのだろうが、気がつかなかつた。

門の前まで来ると、知らない女性が丁度入れ違いに出てくれるところだつた。

白い着物を着た、たおやかで上品な女性。その立ち姿は、まるで清廉な百合のようだつた。

その美しいうなじに近づけば、その香りが漂うのかもしれないといつ錯覚すら覚える。

「こんちは。」

軽く会釈をして、通り過ぎようとするとい、紅をした唇で微笑んで、櫻子に会釈をした。

心を奪われるような清楚な様子は、きっと自分が男性なら、虜にならずには要られなかつただろう。

「櫻ちゃん、お久しぶり。」

妙月は、丁度、玄関に居た。どうやら、さつきの女性を見送った後のようだつた。

「あら、髪を切らはつたのね？」

前回とは違う櫻子の様子に、妙月が声をあげた。

「そう、ちよつと……手入れが面倒になつてきてね。」

また、嘘をついてしまつた。この人は、他人の心を見透かす能力に長けているところに。

「良う似合つてゐよ。」

「ありがとう。さつきまで、お箆をまがいらつしゃつていたよう

ね、

「ええ、さつきまでね。さあさあ、入つて。」

櫻子は、庵に上がって、早速、書道の道具を広げ始めた。

「妙月先生のおかげで、私の書は随分良くなつたと思つわ。これで、生徒にも自信を持つて教えられそつ。」

「ふふ……基本を覚えれば、書はある程度は様になるもんや。練習の成果やねえ。」

妙月は、目を陽だまりの中の猫のように細めて、にじにじしている。

櫻子は、硯で墨を丹念に塗つてから、半紙に筆を下ろし始めた。

「そういうば、この間言つてた好い人とはどうなつたの？」

筆が乱れた。

「好い人じやありません！」

「え、なんで？ 帝劇と浅草行く事にしたんやろ？ 立派な逢引やん。」

「無垢な顔で、妙月が言つ。」

「その方とは、もう会わぬことにしました。」

「何で？」

「……いろいろ、私とは合わない所があるので。」

櫻子は、失敗した半紙を取り除いて、新しい半紙と取り替えた。

「ふうん。」

「何ですか？」

「私から言つてもええの？」

「……………白金の櫛を頂きました。」

櫻子は、筆を置いて、正座をしたまま、しかし目線は妙用からそらしたまま、悪戯がばれた子供のように告白した。

「え？」

「その方が私に失礼な事をしたので、ずっと私は怒っていました。そして、次の日私の家にやつてきた時に、追い返してしまいました。でも、彼が置いていった物の一つに、私への贈り物があつたんです。」

「それが、銀の櫛？」

「はい。私は、彼に無礼に触られた髪が気持ち悪くて、前の晩にざつくりと鋏で切り落としてしまったんです。」

そうしたら、彼は怒って帰ってしまった。

かといって、自分が謝るのは、なんとなくおかしい。最初のきっかけを作ったのは楢崎の方なのだから。しかし、衝動的に髪を切り落としてしまったのは、やりすぎだったような気がする。

そして、頭を離れないのは、楢崎の悲しそうな目。

理由はどうあれ、他人の心を傷つけてしまった事は確かなのだから。

もう会わないと決めたのだから、このまま謝らずに通すか、それとも……。

櫻子は、自分がどうすればよいのかは、全く検討がつかなかつたのだ。

「なるほどね。」

「だつて、私から謝るのも、理屈で考へるとなんだか変なんだもの。でも……。」

妙月も、腕を組み、眉を寄せて悩んでいる。

「妙月様は、何かに悩んだ時、大事にしている事とかあるの？」

「私？」

驚いたように、眼を丸めて、自分を指差した。

「特に、人間関係の悩みにおいて。」

「人間関係ねえ……。」

その人が、明日急にいなくなつても、後悔しないように振舞う事

かなあ、と妙月は言った。

返答が漠然としすぎている。

「人は、いつ何がどうなるかわからなあ……。」

「そうだけど、それはそんなんだけど。」

櫻子も、更に悩み始めている。

それ以前に、なんとなくあの生命力の塊のような楢崎が、明日死ぬ、という想像が浮かんでこない、といつのはまた別の問題である。

「でも、つまらん意地はつたり、逆に意氣地なし（へたれ）過ぎて、するべき事をせんかつたら、後で困るで？」

「まあ……ね……。」

「昔の人もよいつ言つてゐやん。過ぎ去つた時間は戻つてこないつて。」

結局、自分で考へる、という事らしい。

「そうや、櫻子ちゃん、大晦日来るつて言つてくれてたやんなあ？」

妙月は急に話題を変えた。

「大晦日は、行くあての無い子も庵に呼んで、皆で蕎麦食べようと思つてるんよ。」

「眞で？」

「（）の庵は遊郭にも近いせいか、孤児が多くてなあ。どぶの中やら道端の物を拾つて食べて、赤痢やコレラにかかる子も居てゐ。つちの庵は貧乏やから子供を抱える事はできひんけど、いつやつて、時々、世話みたいなものをさせてもらつてるんよ。」

「まあ、そうだったの。長らく書を習いに来させてもらつていてるけど、そんな事もしてらつしやるなんて知らなかつたわ。」

「大正やなんやと浮かれてるけど、いつの時代も、末端に生きる人らの生活は苦しいさかい。」

お互い様よやなあ、と妙月は笑つた。

「「」めんな、お齋中斷させてしまつて。わたしは、休憩の為のお茶の用意をするし、戻つてきたら、何枚か採点しましょ。」

そういうて、ゆつくりと立ち上がる。

「あ、妙月さん。」

「何?」

「妙月さんは、時間を巻き戻したくなるほど、何かを後悔したことはあるの?」

「どうして、こんな質問が口から飛び出たのだらうか、と後になつてから考えた。」

「…………あるよ。」

そういうて、笑つた。

「昨日も、大切にしてた花瓶を割つてしまつてなあ。全くビリバロかならんやろうか。」

その言葉に櫻子も笑つた。

しかし、一瞬だけ、悲しそうな深い眼をしたのは、氣のせいだつただろうか、とも思つた。

「櫻子、来週の週末は暇か?」

朝食の席で、梅造が櫻子に問うた。

霜月が過ぎ去り、師走も半ばになつた季節は、隙間さえあれば木枯らしを部屋の中へも吹きかけてくる。

「今週は、特に何も予定はないけれど、どうしたの?」

櫻子は、焼いたパンに上品にバターを塗る手を止めて、顔を上げた。

今日は、桃真は既に家を出でているので、一人だけの朝食だった。

「すっかり忘れておつたんだがな、宴会の招待状をもらつておつた。主催者は親しくさせていただいている方でな、出席してはくれんか?」

梅造によると、本当は桃真が、組織の誰かを遣りたかつたらしいが、誰も年末が近づいている為に忙しく、都合がとれないらしい。つまり、組織内の重要な位置についているものが、無理やり予定をねじ込んで出席する必要性はないが、顔見世程度に参加した方が良いとは考えているらしい。

「私が…?」

「そうだ、娘を寄越したと思ってもらえば、先方も喜んでくださるだろ? 一人が嫌なら、私の若い秘書の誰かをつけてやろ? 顔と名前を覚えなくてすむ。そうだ、吉良がいいな。」

確かに、その方の父親も、梅造の秘書をしていてくれた。引退した後、今度は代わつて息子が梅造の仕事を補助してくれている。

「彼が居なくては、父様が困るでしょう? 他の方も忙しそうだし、一人で行くわ。」

「そうか? 大丈夫か?」

「ええ。」

こうして、櫻子は、軽い気持ちで梅造の頼みを承諾したのだった。

ホテルの最上階の大広間を貸しきつて行われたその会は、天井に吊るされた豪奢なシャンデリアの下に、きらきらしい着物を身に纏つた紳士や淑女が、優雅に会話を楽しんでいた。

ちょっと緋色は派手すぎかしら、と思いながら、着物を選んで来たが、その華やかさにおされて返つて逆に地味すぎたかも、と錯覚してしまつほどだった。

なぜ、参加者が全員着物かといふと、主催者が大酒店の呉服商の主人だからである。

「いやいや、これは二階堂のお嬢さん。」

「こんばんは。」

その主催者の主人、皆川が、ゆっくりと近づいてきた。細面の顔立ちは、どこか菊弥に似ている、と思ったが、その若旦那は、着物よりも洋装が似合いそうな、現代的な雰囲モダン気がした。

「これは、今日もお美しい。私に気を使つてか、皆さん着物を来て下さつて。呉服商としてはとて も嬉しいのですが、この立派なホテルには、洋装でもまた来てみたいものです。二階堂邸で開かれた夜会で、あなたが着ていた物も大変あなたにお似合いでした。」

「まあ、来て下さつていたのね。ご挨拶できずに申し訳ありませんでしたわ。」

「いえいえ、突然の災難で櫻子様も、それどころじゃなかつたでしちう?」

皆川は、まだ何も手にしていない櫻子に、どうぞ、といつて杯を渡した。

「葡萄酒は、嗜まれますか?」

「ありがとう、頂くわ。」

受け取つて、少し口をつける。甘さの中に、鼻腔をくすぐるような渋さを感じた。

「今日は気楽な会です。これから日本経済を担うような若い人々の社交の場としてね。どなたか、御知り合いはおられますか？何方かご紹介させて頂きましょうか？」

櫻子は、来た初めに広間を見回したが、知り合いらしき人はいなかつた。

「ちょっと、柳葉、こっちに。」

皆川は、そばに居た大柄の男を、こっちへ手招いた。

「紹介させて頂きましょう、櫻子さん。こちらは、柳葉海運会社を経営しておられる次期社長です。」

「いらっしゃる、皆川、先代の息子とはいえ、まだ決まったわけじゃない。」

「……じんばんは、二階堂のお嬢様。」

日焼けした顔に、白い歯を見せて、柳葉が櫻子に手を差し出した。背が高く、筋肉のつき方も良くて、まるで運動選手のようだと思つた。

「「じんばんは。」

櫻子も、微笑んで、柳葉と握手をする。

「おまえ、少し太つたんじゃないかな？」

皆川が、柳葉の腹部の辺りを見ながら言つた。

「ははは。恰幅が良くなつたと言つてくれないか？」

櫻子は、体躯の大きい柳葉が拗ねた様な言い方をしたので、不謹慎だと思いながらも、不噴出してしまつた。

そんな談笑しているときに、並んで経つ二人の男性の体の隙間から、その顔を見てしまった。

榆崎だ。

緑青の渋い着物を颯爽と着こなして、他の人より一つ分高い頭が、何やら楽しそうに話している。

その向かいには、見覚えのある顔があつた。

それは、妙月の庵に行くときに、門の前ですれ違つた貴婦人だつた。今日も、白い着物を着ているが、この間のとは、柄が違つていた。白色が本当に良く似合う人だと思う。

榆崎が何か可笑しいことを話したのか、口元に手を当てて、彼女の方も一緒に笑って微笑んでいる。

そして、再び顔を寄せ合って、親しげに話していた。

ほぼ半月の間、本当に全く姿を見せなかつたので、自分の事など忘れていたのだと思つた。

それなら、それでいい。

しかし、あれだけ自分に執着していたにも関わらず、この身の変わりようは何だろう。

自分に会う前から、このよつな場に一緒に来るよつな関係だつたのだろうか。

それとも、今晩会つた、見知らぬ女性だろうか。

（私には、どうでもいい事だわ。）

会わないことにして、正解だつたと思い直した。そして、榆崎からはこちらが見えないよつに、上手く柳葉と皆川の陰に身を隠した。その後も、今晩は会つて話す機会もないよつに、なるべく広間の隅にいることにした。

一時も経つた頃、そろそろ疲れてきた。軽い頭痛がする。

一旦、化粧を直す為に、広間を出て、お手洗いに行き、広間の前の扉で息を吐いた。

（そろそろ帰ろうかしら？）

今晩は、随分たくさんの人と話しかけられたような気がする。少し、声も枯れている。

「おや、櫻子さん。」

別の方から、皆川がやつて來た。

「楽しんで頂いていますか？」

「ええ、ご招待頂いて、どうもありがとうございます。」

その時、ふつ、と眩暈がして、体が大きくよろけた。慌てて、皆川が抱きとめる。

「大丈夫ですか？」

「……」「ごめんなさいね。ちょっと、ふらつとしてしまって。」

「風邪でもひいてしまわれたのでは？」ひみつと別の部屋を用意してしまったか？」

「大丈夫よ、どうもありがとう、皆川さん。」

その時だった。

「ねや、櫻子さんではありませんか？」  
鷹揚としたこの話し方は聞き覚えがある。

（榆崎さん……？）

快活な笑みを浮かべる榆崎が、そこに居た。先ほどの女性も隣にいる。

「あなたもこの宴会に来ていらしたのですか？」これは、偶然だ。そう言つて、皆川から奪い返すかのように、櫻子の手を引く。

「ん？ どうしたのですかな、額を押さえて。」

「……櫻子さんが、軽い眩暈を起されたので、どこか休憩できる場所を」用意しようとしていたんだよ。」

「ほう、そうですか、では、私が屋敷までお送りしましょう。」

「え……？」

この期に及んでも、顔を合わせることに躊躇いがあったので、顔をそらしていたが、思わず上げてしまつた。

「私は、今日は車なのでね。あなたの家の場所も詳しいですし、この気分が優れないなら、送つて差し上げましょ。」

「あ、あの……。」

何か言おうとしたが、また急に眩暈が襲つてきた。びりやう、見知らぬ人の多いこの場に、自分が思つていた以上に緊張していたらしく、体はくたくたになつてしまつていたらしい。

「どうしましょ？ 抱えて差し上げましょつか？ それとも、この自分で歩かれますか？」

「あ……ありがとう、まだ、大丈夫、歩けます。」

右手を額に押されたまま、櫻子が言つた。左手を、榆崎が引いて、歩き出す。

「では、皆川、そういうわけで一階堂のお嬢さんの心配はいらな

い、俺がちゃんと届けるぞ。」「

「あ……ああ。」

「ありがとう、邪魔したな。」

また、会おう、と空いている方の手を振り、櫻子を連れてその場を去ろうとした。

その時だった。

広間の中から、突然、白煙が上がり、その煙が櫻子たちの居る方へも流れ込んでくる。

「な、なんなのつ？」

櫻子の傍を、黒い服装の男達が横切った。

その手には、しつかりと日本刀が握られているのを見た。次の瞬間、一拍遅れて、客達の阿鼻叫喚が、響き渡る。

あの夜と、同じ。

「金に飢えた富豪の子女共が、無駄に殺されたくなれば、おとなしくしろ。」

男達は脅かすように、食事が乗った卓子などを切り付けてくる。

「け、警察を呼べ！」

皆川の怒号が響いた。

客達は、そのおぞましさに危険を感じて、一斉に広間の外へと出ようとする。

「あつ……。」

白煙の向こうで、白い着物の貴婦人が、誰かに押されてよろめく姿が見えた。

「大丈夫ですか？」

櫻子が、助けようとすると前に、誰かによつて、抱きとめられ、事なきを得た。

榆崎である。

しかし、その事に気を捕らわれている場合ではなく、当てもなく振り回されている白刃の存在に気がついて、櫻子は身を避ける。

その動きから、きっとまともな剣術を習つた事が無い者である事

を悟ったが、竹刀どころか、その代わりになるようなものすら身に着けていないこの状態では、考えなしに動くわけにはいかない。つぐづぐ、柔術も兄様に習つておけば良かつた、と思うのはこういう時だ。

男の中の一人が、他の客のように、恐怖の感情をその顔に貼り付けるのではなく、自分達をかみこらさんばかりの野獣のような目をして睨み付けている櫻子に気がついた。

「ほう…あんたか、この前の夜会では、」苦労な事だつたな。

その言葉に、櫻子は、彼らが自分達をかつて襲つたものと同一犯である事を知つた。

「あんたも、標的対象の一人だ。女は、殺すか、連れて帰れ、と言われている。」

そうして、男は、大きく刀を振りかぶつた。

しかし、振り下ろされたそれを、なんなく避ける。櫻子にとつては、十分に遅い動きだ。

そして自分に危害を加えようとしている男をねめつける。その時、ピイイイイと、いう甲高い笛の音が聞こえた。

「ちつ、時間か。引き上げ時だな。」

男が、野卑な眼で櫻子を見て、つばを吐いた。

「命拾いしたな、女。」

そうして、他の襲撃者と一緒に、廊下を駆けて、何処かへ去つていつた。

騒ぎを聞いて、他の階から駆けつけた従業員によつて、ホテルの窓が全開にされ、そこから白煙が抜けていく。

櫻子は、再び眩暈を感じて、よろめいた。

「大丈夫か、櫻子さん？」

榆崎だった。現れた方向から考へると、一度、階下に逃げて、それからこちらに戻つてきらしい。

辺りは、従業員と駆けつけた警官ばかりで、貴婦人の姿どころか、他の客は既に居なかつた。

「……全くあなたという人は、どうして逃げ出そうとしないんだ。一階に客達は全員避難したというのに。姿が見えないと思って、戻つてみてよかつた。」

ホテルの玄関に向かう為に、階段を折りながら、櫻子の手を引いていた自分の手を、彼女がよろめいて倒れないように、背中に回す。「あの人たちだつたわ！私の屋敷も襲つた人たちよ。今回は、誰も怪我をしていない？大丈夫だつたかしら？」

「自分より、他人の心配をしている場合ですか？何人が、切りつけられたそうだが、重症ではないらしい。」

「どういふ事は、今回の襲撃は失敗したのだろうか。それとも、他に目的があつたのだろうか。」

「財界の子女が襲われる事件が師走になつてから続いている。……重症ゆえに、亡くなつた方もいるそうだ。にも関わらず、もしかして、お嬢さんはお共の者も今日は居ないのか？」

なんとも言えずにいると、楓崎が冷めた声で言った。

「……皆川の時もそうだ。あなたには、防衛本能というものが欠けているらしいな。」

「皆川さん？」

「あの男は、俺の友人の一人ですが、呉服屋のくせに、着付けるより脱がすほうが百倍上手いんだ。偶然通りかかっていなかつたら、もう少しで、あやつの毒牙にかかる所でしたよ。」

はあ、とため息をついて、少し、櫻子を抱き寄せる。

「そうなの……？」

「俺が嘘をついても、得する事はないだろう？それよりも、あなたはどうして今日此処へ？」

「父に頼まれたのよ。主催者の方と親しいから、顔見世程度でもいいので出席するようにつけて。」

「ほう、そういえば、皆川の父親と、あなたの父上殿は昔から懇意だつたなあ。」

「そららしいわね。気がつかなかつたけれど、この間の夜会にも

来て下さつていたと言つし……。」

「眞川が？ そうか、俺もその話は聞いていなかつたな。にしてもだ、一階堂の誰かとは、一緒に来なかつたのか？ 日頃、財閥とは全くかかわりの無い国語教師のあなたが一人で来ても、会う人々の顔や名前がこんがらがるし、商売の具合の話はされるし、氣づかれするだけだぞ。」

確かに、櫻子が一階堂の組織の状況について全く知らないにも関わらず、あの事業は最近どうだ、とか、世間話というよりは、腹の探り合いをされている風に感じた時もあつた。

「……どうして、わかるの？ 図星なだけに、辛いわ。」

「あ、と榆崎は、もう一度ため息をついた。

「事前にあなたが来ると知つてたら、一緒に来て差し上げたのに。それでなくとも、広間に俺の姿を見かけていたのなら、声をかけてくだされば良かつたんだ。そうすれば、上手い具合に話を切り返してあげたのに。」

確かに、榆崎ならば、そのような社交術は手馴れたものだらう。

「俺が、唐突に話しかけた時も、それほど驚いていない様子だつたから、きっと気がついていたんだろう？」

そんなことまで、見抜かれている。

「……でも、声をかけにくかつたのよ。あなた、知らない方と一緒に居たし。」

「宴会だから、それは当然だろ？？」

「ち、ちがうの。最近、その方とすれ違つた事があつたから。軽く会釈しただけで、名前は知らないんだけど。」

「じゃあ、なおさら、声をかければ良かつたじゃないか？」

榆崎には、分けがわからない。

「あなたが、あの女性の方と親しげに話していたから、今晩はその方と一緒に参加されていたのかしら、と思って、声をかけなかつたのよ。」

「あの女性……？ わからんな、誰の事だ、櫻子さん。」

「白い着物の人。」

しばらく、楢崎は考えていたが、やがて、ああ、とうなづいた。

「誰の事かわかつたぞ。」

「そう。」

「あれは、柳葉の妻だ。」

「そう……ええつ？」

あのうなじの綺麗な美人が、日に焼けた運動選手のような柳葉の隣に居る様子が、思い描けない。

「ははは。お嬢さんの気持ちは言わなくとも、俺にもわかる。あやつも友の一人だが、仲間内では、美女と野獸だと、いつもからかわれているのだ。」

「そんな！柳葉さん、格好良かつたわよ。私が言いたかったのは、その奥さんと一緒に居る姿が思い浮かばなかつたつて事。どちらかというと、皆川さん……いえ、楢崎さんの横に居るほうが似合いうよねえ。」

「今度、そう言つてやろう。」

「わ、私が言つたつて言わないで頂戴ね？」

「わかつてているさ。」

楢崎は、愉快そうに声を立てて笑つた。

「ふむ……と、いう事は……。」

楢崎は、何かを考えたかと思うと、次は、不敵な笑みを櫻子に見せた。

「あなた、俺が居るとわかつて、声をかけなかつたのは、柳葉の奥さんに嫉妬していたからか？」

意地悪そうな視線を向ける。

「嫉妬つ？」

「だつて、そうだろ？俺と一緒にいる方がしつくりきたつて事

は、彼女が俺の新しい恋人じゃないか、とでも思つたんだろ？」

「確かにそう思つたけど、でも、今晚新しく会つた方かも知れないじやないの。」

「だつたら、声をかければよかつたんだ。どうだ、違うか？」

「むむむ、と櫻子は声を曇らせた。

「……だつて、私、あなたにひどい事をしたもの。でも、先にその原因を作つたのはあなたでしょ？私が謝るのは、変じゃない？でも、傷つけてしまつたのは事実だもの。」

そう言いながら、また櫻子は混乱し始めた。

「だから、今度あなたと会つた時は、一体どうこう風に声をかけるべきか悩んでいたのよ。心の準備が出来る前に、会つてしまつたから、どうすればよいかわからなかつたのよ。」

「…………。」

「なのに、あなた、あんなに怒つて出ていったのに、今日も何にもなかつた風に、私を助けてくれたじやない？私の事、怒つてないの？」

「あ？」

「あ？じゃないわよ、普通は、ああゆう別れ方をした後に、再会したら、氣まずいもんなのよ？」

「この人は、大丈夫だらうか。」

「それとも、私の方がどこか、おかしいのだらうか？」

「銀の櫛、下さつたでしょ？なのに、私は、すっかり髪を切つてしまつて……傷つけたでしょ？」

「ごめんなさい、と小さく櫻子が謝つた。

「…………俺は、謝らない。」

少し、低い声で、榆崎が言った。

「わ、私を馬鹿にしてるの？」

せつかく謝つたのに。

「俺は、あなたみたいな年下を、しかも精神年齢はそれ以上に下の女を相手にした事は今までにない。押せば怖がられる、引けば異性としては見られない……どころか、まるで兄貴がわりだ。次の一手中に、俺はどう駒を進めれば良いんだ？」

榆崎は、立ち止まって櫻子の正面を向き、その両手を自分の手に

取つた。

「しかも、逆上して髪は切り落としてしまつ……。」

「ああ、と榆崎がため息をついた。

「可哀想な銀の櫛。緬甸の稀少なルビー<sup>ビルマ</sup>や、伊勢の高級な真珠を

使って、お嬢さんの為に櫻柄に仕上げた特注なのに。」

そして、顔を右斜め下に背けて、もう一度ため息をつく。

「『ごめんなさい』…高級そつだとは思つてたけど、そんな品だつたなんて思つていなくて。」

櫻子が焦つて困惑し始めた顔を、面白<sup>面白</sup>に見つめる為に、彼女の身長に合わせて体をかがめる。

「でもいいさ、頑ななお嬢さんは、まだ自分では気づいていないらしいが、どうやら他の女に嫉妬してしまつ程、俺の事が好きみたいだしなあ……。

吐息が、かなりお酒臭い。

「扉を開けられないなら、誰かにそつとあけてもらひのもいいもんさ。」

「……榆崎さん、酔つているの？」

「俺は、いつでも自分の人生に酔つてる。へらへらしそうだ。」  
櫻子の手を握り締めたまま、顔を反らして、くつ、くつ、くつと、笑う。

何が、可笑しいんだろう。

それとも、何も初めから、可笑しくはないんだろうか。

「……まだ、混乱しているな。」

いつの間にか、榆崎の腕は、櫻子の腰に回つている。

「わからないなら、わかつている方にゆだねてみるか？そうすれば、わかることもあるかも知れないさ。」

榆崎は、そう言って、櫻子の方に顔を落とした。

酒のせいか、少し熱を帯びてゐるそれは、今までで、一番優しい口づけだった。



榆崎は、騒ぎの熱の静まつたホテルの部屋を取つた。そして、その寝台に腰掛けながら、榆崎は櫻子にゆっくりと口付けている。

誰の目も気にしなくて良い。一人以外は誰も知らない世界。

榆崎は、櫻子をかなり優しい人だと思う。夜会で会つた時の様子や、今日も自分の身よりも他の客を心配していた事、そして自分のたわいない搖さぶりに負けて簡単に謝つてしまつた事からもわかるように、少し風変わりな所もあるが。恐らく、彼女自身も気がついていない程、本当に、令嬢という言葉がしつくり当てはまる人だ。だから、そんな彼女の世界に荒々しく踏み込んでくる榆崎に、櫻子が戸惑うのも当然だった。

逆に、榆崎の方からしてみれば、櫻子は今まで自分が接してきたどのような女性よりも、理解しがたい存在だった。自分を籠絡させよとして近づいてくる女性よりも、もしかしたら悪女ではないかと時々考える程で、恋しい分憎らしさも募つた。

どちらが一方が悪いわけでも、良いわけでもないこの不思議な状況は、後々、榆崎が振り返つて考えるに、お互いの育ちの環境が正反対だったからのように思つ。

「求め」なれば、何一つ手に入れることが出来なかつた自分。求めるのではなくて、与えられる選択肢を「選ぶ」事を課せられている彼女。

普通の人よりも恵まれている自分は、これ以上何かを望んではいけないのだとでも言つよつに、与えられる限りの世界で生きてきた。だから、服や身の回りの品も、自然と地味なものになつていったのかもしれない。

しかし、恋というのはそのものが、誰かを求める行為なのだ。その経験値においては、確實に彼女を上回つてゐる自分が、ゆつくつと気がつかせていけばいい、と榆崎は思った。

じわじわと、彼女の心を、浸食していくよ。

「ずっと、こうしたいと思つていた……。」

榆崎は、櫻子の耳の後ろから首筋にかけてを、まるで彼女の体に己の唇で尋ねるかのように優しく吸つてゐる。櫻子が怖がらないよう、自分の欲望を殺して、優しく接してゐた。

そして、仕上げは、顎に口づけてから、顔を櫻子の正面に戻して、抱きしめた。その間、何度も榆崎の口から、ため息が漏れてしまう。窓掛から差し込む月明かりに濡れた櫻子は、もうとっくに、頬を上気させてゐる。

榆崎は、顔を離した。

自分より先に櫻子の唇の甘さを堪能した者が居たとすれば、金と権力で相手をどうにかして、葬り去つていたかもしれない。そう思つてしまつほど、自分より五つ以上も年下のこの女性に、自分はまいつてしまつてゐるようだ。

榆崎は、櫻子を切なげに見つめて、こう懇願した。

「お願いだから、櫻子さんの方からも、俺にしてくれないか。」

櫻子は少し照れながら、仔猫のように榆崎の顎や頬の辺りをゆっくりと口づけを始めた。

「なんで、顎……？」

榆崎は、櫻子の顔を手のひらに包んで、親指でその頬を撫でながら聞いた。

「……多分、榆崎さんと同じ理由かしら？」

櫻子の細い、女性的な顎は、男の榆崎が持つてはいないものだった。逆に、骨で角ばつていて、皮膚の厚い榆崎の顎に、櫻子は男性的な魅力を感じていた。

榆崎は、手の指を櫻子の髪の間に入れて、愛撫した。

「ああ……でも、もつたいない。綺麗な髪だったのに。」

「…………ごめんなさい。」

「冗談だ。また直に伸びるわ。」

櫻子は、小さく微笑んだ。

「そういえば、あなたは何処で柳葉の奥さんとすれ違つたんだ？」

唐突に、榆崎が聞いた。

「妙月様のいらつしやる尼寺の門よ。私は、彼女に書道を習つてゐるの。」

「なんだ、あなた彼女とも知り合いなのか。」

「妙月様の事？あなたもお知り合いなの？」

「彼女も俺達の計画の協力者だからな、当然だ。」

「一体、その計画が何のことなのか、櫻子は知らないのでわからな  
い。」

「妙月様に何も聞いてないのか？あの庵の近くに、今度、孤児院  
を立てるんだ。」

「孤児院？」

「そうだ。俺みたいな若手の事業家で資金を出し合つて、作ること  
になつた。日本は明治の経済恐慌時代に捨て子が増えたことから、  
孤児院が立てられるようになつたが、欧米では一百近くも前から既  
に作られていたんだ。米國や欧羅巴に出来ていると、そういうた  
所を自然と真似たくなるもんだ。」

確かに、日本では、昔から寺社が身寄りのない子供の面倒を見る  
風潮が有りはしたが、公や民間の機関がそういうた児童福祉に携わ  
る事は、諸外国と比べると機会はまだ多くなかつた。

「柳葉も、その一員の一人でな。だから忙しい彼に代わつて、時  
々、奥さんが庵を訪問していたというわけさ。」

「まあ、そうだったの。」

「関東出身だと言つたが、もともと俺は遊郭の生まれでね。父親  
が誰かもわからないような子供だつた。」

遊郭の子供達は、母親である遊女が貧しい事から、彼女達が生活  
する置屋でも疎まれ、こき使われたり、あまりにすさんだ生活の為  
に命を落とす子供も多かつた。

そして、運よく生き延びても、今度は働き手としてこき使われる  
ような生活が続く。

「あの場所は、男にとつては極楽かも知れないが、女とそこで生れ落ちる子供にとつては、生き地獄かも知れないような場所だ。しかし、俺は、運よく神戸の貿易商の下働きとして売られたのでね。旦那も悪い人ではなかつたので、そこでは人並みの生活が出来た。しかし、その貿易商が潰れて、今度は大阪の米問屋に売られると、生活は一変した。

下働きというよりは、犬や豚にも劣る扱いだつたように思つ。

「何度も逃げ出してやろうか、と思つたが、ある日、俺が病氣にかかつたと知れたら、あつけなく、放り出されてね。そのまま死んでやろうかと、彷徨つたが、せつかく自由になつたのだから、生きてみるのもいいものかも知らん、と思って、神戸に戻つた。前に働いていた会社の関係先をあたつては、仕事を見つけて、会社を興して今に至るつてわけさ。」

櫻子は、「そのまま死んでやろうか」なんていう台詞を、あつさりと言う人と初めて会つた。

「まあ、そうだつたの。」

あまりに壯絶な話を聞かされて、櫻子は何て返して良いかわからなかつた。

「でも、まあ、死ななかつたのは正解だつたな。死んだら、上手いものも食えないし、女とも口づけできない。」

「……もしもし？」

俗物的な台詞を吐く楳崎に対し、櫻子はあきれた声をだした。

「俺を卑しい男だとと思うかね、櫻子さん？」

突然、楳崎は大真面目な顔をして、櫻子の瞳を見つめた。

「確かに、俺は金なら腐るほどあるさ。まだ日本人が馴染みのない土地に乗り込んでいつて、そこでしこたま儲けたからな。しかし、若造だということもあって、国内では俺の名はまだまだ知られてはいないが、外国での人脈は日本の大企業にも負けちゃいない。」

「……。」

「が、俺の素性は先のとおりだ。金も地位もある、しかも母方に

は華族の血が混じつている財閥令嬢には、一緒にいる価値のない男だ。」

「じ…自分を貶めるような事、仰らないで!」

櫻子は、頭を起こして、榆崎を覗き込んだ。

「昔がどうだ、とか、今がどうだ、とかは、この先とは関係のない事よ。私だって、今にも食べ物にも困るような生活になってしまう知れないわ? そうでしょう?」

「……じゃあ、いいんだな?」

榆崎は、後ろから櫻子を包み込むように、身体を沿わせた。

「俺は、あなたの最初で最後の男になりたいと思ってる。あなたが、他の男とこうしているのを考えただけで、内臓がつぶされそうだ。……頼む、俺のものになつてはくれないか?」

そして、櫻子の滑らかな額に、口づけを落とした。

「俺と、結婚してくれ、櫻子さん。」

大晦日。

雪がちらついている。

その中を、何人もの子供達が元気に走り回り、近所の大人たちも除夜の鐘を聞く為に、集まつてきていた。

「何だ、あなた、手袋をしていないじゃないか。」

背広の外に黒いコートを来た榆崎は、櫻子の冷えた手を取った。二人は、庵の縁側に腰を掛けて、外の様子を並んで見ている。

「あ、いいわよ。それほど寒くはないから。」

今日の櫻子は、長袖のワンピースの上に、毛皮のコートを着込んで洋風の装いをしていた。

榆崎は、自分のカシミヤの手袋を外して、櫻子にまわした。

「……いいから。」

おとなしく手を委ねると、指先が余る程大きい手袋が、櫻子の手にはめられた。

「ありがと。」

外には、近辺の身寄りのない子供達も来ており、近所の子供達と一緒にになって遊んでいた。

「日本の正月を楽しみたかったが、俺は明日から海外へ出張なんだ……。しかも、一月の終わりまで日本へは帰って来れない。」

榆崎が、何処となく哀愁漂う声で落ち込んで、ため息をついた。

「本当に忙しいのね、あなた。大丈夫？」

「まあ、仕事があるのはいいことさ。が、しかし、俺は一ヶ月間は、あなたの傍にいないから、心配だ。」

皆川のような強引な輩に、何かちよっかいをかけられたら、と思うと、気が気ではない。

「また、子供扱いして！何が心配なのよ。」

「……いろいろと、だ。ああ、そうだ、巴里にも行くぞ。向こうで流行の服でも買ってきてやるつか？」

「まあ、巴里！？」

櫻子は、顔を輝かせた。

「あなた、仏蘭西の血が混じつていらつしゃるくせに、巴里は行った事がなかつたのか？」

「巴里どころか、外國へはまだ何処にも行つた事がないのよ。ああ、凄い。エッフェル塔の見える街を歩くのでしょうか？」

頬に手を当てて、夢見るよう、櫻子が言つ。

「外國に行つてみたいのか？」

「えええ、機会があれば……でも、駄目ね、国語の先生では機会はないわ。せめて英語の教師だったら、機会はあつたかも知れなけれど、無理ね。」

「何をとぼけた事を。俺の妻になれば、あなたは嫌でも世界中を巡る事になるぞ。」

にやり、と笑つて、榆崎が言った。

その言葉に、櫻子は、少し顔を紅く染めた

「英國、<sup>ベルギー</sup>伊太利亞、独逸も、行くぞ。」

「……白耳義は？」

「白耳義？あの国は明治から日本と交流があるからな。もちろん、うちの会社も取引しているから、行けるぞ。」

でも、どうして白耳義なんだ、と榆崎が聞く。

「父様が、お土産に下さったお菓子が凄く美味しかったから、覚えているのよ。名前は忘れたけど。」

「……あなた、食べ物の事ばかりだな。」

榆崎は、こらえかねて、下を向いて笑った。

櫻子が、つん、とすまして、「酷いわ」と言つてそっぽを向いた。

「ああ、笑つて悪かつた。で、だな、一月の十四日が俺の誕生日なんだが、その頃俺は、海の向こうだ。だから、俺が帰ってきた後の最初の終末に、一緒に何処か夕食にでも行かないか。」

一緒に祝つてもらえると、俺は嬉しい、と榆崎が笑つた。

「お誕生日？ええ、行くわ。約束ね。」

櫻子は、そう言つて小指を出した。

そうして、指切りをしたが、そんな子供っぽい振る舞いを最後にしたのは、一体いつだつただろうかと、榆崎は想いをめぐらせた。

「じゃあ、今晚は、日本の行事を堪能しておかないとねえ？」

櫻子が、茶目っ氣たっぷりの瞳で、榆崎を覗き込んだ。

「全くだ。」

榆崎が、眉を上げて、瞼を閉じた。

しんしんと雪が降る晦日に、除夜の鐘が響き渡つた。

## 【榆崎蓮一】編(9) 告白(上)

榆崎と約束をした終末。

櫻子は、帝国ホテルの前で彼と待ち合わせていた。街灯が灯り始めた黄昏の時刻の空は、夕焼けが忘れていった黄色と朱色に、夜の群青が混じって、幻想的な様子だつた。

雪がちらついていたので、白い手袋をはめた手で、紅い傘を差している。

今日の櫻子は、首までフリルで覆われた、紅いワンピースドレスを着ていて、控えめな小粒の真珠の首飾りをしている。

そして、その上から、羅紗の白いコートを羽織つていた。

顔も綺麗に白粉をはたいて、服と同じ真紅の口紅をさしている。髪は、前髪を七・三に分けて横に流し、熱したコテで大きなウーブをつけていた。その髪を耳を隠すようにゆつたりと後ろでまとめて、ごく低い位置に髪を作つている。これは、「耳隠し」と呼ばれる、当時流行していた髪型である。

寒さのせいで、頬も少し紅くしていた。純粹な日本人よりもやや長くて、太いまづげに縁取られた瞳で遠くを見ている姿を、過ぎ去った男達が時々、振り返つて見ている。

約束していた時刻が近づいてきた頃、櫻子が顔を向けていた反対側から、声がかかった。

「おや、椿の精が帝都にやつてきたのかと思いましたよ……」

振り返ると、皮の手袋をはめて、黒い傘を差した人物が居た。臭い台詞を、女性に向かつて堂々を言える者は、櫻子の記憶には一人しか居ない。

「おまたせしましたな、櫻子さん。」

背広に、蘇芳色のタイを締めて、黒の山高帽を被つた、榆崎だつた。

「まあ、榆崎さん、お久しぶり。」

そう言つて振り返つた櫻子を見て、榆崎は少しうらうつした。

綺麗になつてゐる。

一ヶ月ぶりに見たせいなのか、それとも、醒めるような真紅の服と口紅のせいなのか……。

それにしても、毎回思つことだが、彼女はどうして洋装の時は、いつも顎まで襟があるような服を着るのだろうか。鎖骨が綺麗な人なので、襟ぐりの大きい服を着た方が似合う気がする。

と、いうよりも、このままだと、やや重たげな彼女の胸の膨らみに視線が移つてしまふのだ。首筋すらも全く肌を見せない事が、かえつて禁欲的である。

「……蓮一、と呼んで下さいとお願いしたでしよう?」

不満そうな顔をした榆崎を、櫻子は、恥ずかしそうに上田遣いで見る。名前で呼ぶのが照れくさくて、まだ一度も、蓮一さん、とは呼べないでいた。

「こんなに深々と雪が降つてゐる夕方です。もし、先に着いたら、中に入つて待つていて下さい、と言つておいたのに。」

「ええ、忘れてないわ。でも、雪もひどくないから、待つていようと思つて。」

「冷えていませんか?」

「大丈夫よ……お誕生日、おめでとう。」

櫻子は、紅い紙に包まれた、小さな細長い箱を榆崎に手渡した。

「俺ですか?」

榆崎にとつては、全く思つても見なかつた出来事のようすで、少し眼を見開いた。

「だつて、あなたのお誕生日じゃないの。」

櫻子は、首をかしげた。

「あなたと食事するきつかけが欲しかつただけで、俺の誕生日を祝つてもらおうとは考えてなかつた。」

「……よくわかんないわ。でも、あまり中身には、期待しないで

頂戴ね?」

櫻子は、昼間に屋敷を出て、百貨店で榆崎への誕生日の贈り物を選んでから、この待ち合わせ場所にやって来た。

男性に対して、何を選べばいいのか、良くわからなかつたので、きつと仕事でも入用になるであろう品の、上質な物を贈ることにした。彼なら、きつと何でも喜んでくれるだろうが、本当に気に入つて、使ってもらえば、嬉しいと思った。

「そうか、気を使わせてすまなかつたですね。そこまで頭が回らなかつた。」

榆崎は、それを大事にそうに背広の内側に入れてから、ありがとう、と言つた。少し、耳元を紅く染めている。

「いいえ、気に入つてもらえた嬉しいんだけど……入りましょうか？」

「参りましょう。」

榆崎が差し出した手を受け取つた、その時だつた。

遠くの方で、大きな爆発音が聞こえた。

人の悲鳴と騒音の中に、銃声のような音も混じつている。

「大変だ、爆弾だ！」

「不審者が集会に押し入つて、爆発させた！」

大勢の人が、建物の中から逃げてきて、二人のいる方角へ、走つてくる。

建物の窓辺りからは、黒煙が上がつていた。

榆崎は、櫻子の腕を引いて、自分の胸元に抱き寄せた。

「何だ？」

櫻子にも、一体何が起こつてゐるのか、検討がつかなかつた。

しかし、建物から出てきた黒服の男達が、逃げ遅れた人々を、捕まえては短刀で傷をつけていた。

ある男性も、犯人の一人に捕まり、背中を刺されて、櫻子達の足元に倒れた。

刺した黒服の男が、櫻子の方を見る。

「あんた見覚えがあるな。……そうだ、二階堂財閥のお嬢さんだ。」

いい所にいる。あんたも標的の一人だ。」

そうして、櫻子の方へ、血で汚れた短刀を突きつける。

「一階堂財閥にも、苦しみを与えないではいけないからな。あんたのような、綺麗なお嬢さんが傷つくところをみたら、理事長殿はさぞ悲しがるだろう。」

「おまえたち、何ものなんだ？」

「あんたに用はないさ。榆崎商会の若旦那。俺達は、標的の娘や息子を苦しめるように、と言っているんでね。そこのお嬢さんに危害を加えれば、褒められるのさ。」

そして、短剣の切っ先を櫻子の方に向ける。

「馬鹿な真似はよさないか！」

榆崎が、犯人に掴みかかって、その腕をひねり上げようとする。その弾みで、山高帽が足元に落ちた。

「この野郎、邪魔をするな！」

しかし、犯人よりも榆崎の方が身長が高く、体も大きいので、逃れられない。

「くそー！」

その時、別の方から、弾ける様な銃声が聞こえて、榆崎の方を掠めた。

「うつ……。」

その隙に、犯人が、榆崎の右腕に刀を突き刺した。

「俺達の邪魔をすると、こうなるんだ！その腕を切り落として、女の目の前で殺してやる。」

勢い良く引き抜くと、すさまじい鮮血が飛び散った。しかし、犯人は、更に、もう一度刀を突きつける。

しかし、榆崎は逃げずに、その刀の動きを受け止めた。

「……おまえ、今、自分から、腕を刺される為に突き出したのか

？」

全く怯まない榆崎に、犯人の方がたじろいだ。

「あんたに俺は、殺せないさ。」

髪や顔まで、自分の血で真っ赤に染めたまま榆崎が、犯人に対し  
て悠然と言った。

唇は不敵に微笑んでいる。

「俺の名を知っているんだろう?」

しかし、その眼はまるで、獲物を逃がさんとする猛獸のように威  
圧感に溢れていた。

それに恐怖の念を覚えた。

「東の果てにおかしな奴がいる、と世界中の貿易商から恐れられ  
ている男だ。一度死んで地獄の底から蘇った男だから、この世の恐  
れというものを知らないんだ、と噂されているのさ。事実、刀や銃  
ぐらいの脅しには、びくともしない肝に育つてしまつてね。」

そのまま睨みつけられていれば、石化してしまつのでは、と男は  
思った。

「ひいいい、化け物。」

一步も引かない榆崎に、恐怖を感じ、男は刀を引いて、逃げ出そ  
うとした。

「逃がすか!」

榆崎は、男の背中を、思いつきり蹴飛ばした。道路に叩きつけら  
れた男は、ぐつたりと動かなくなつた。

その瞬間、別の方から銃弾が飛んできて、今度は腹部を突き抜け  
た。

「榆崎さんっ!」

がつくりと、体を二つに折り、崩れ落ちる。

その絶望的な光景に、櫻子は、まるで無声映画でも見ているよう  
な気分になつた。

榆崎が、自分の腹部を押さえた手を確かめると、手のひらに恐ろ  
しい量の血がついていた。

腕からも腹部からとめどなく流れ出る血液の量に、驚愕する。  
周囲の人々が、「人が撃たれた!」と叫び、助けを求めて騒ぐ声が  
する。

櫻子は、榆崎の傍に座り込んだ。そして、彼の頭を自分の膝に乗せて、血でぐつしょりと濡れた手を握る。

「……櫻子さん、怪我はないか？」

「私は、大丈夫よ、ありがとう。榆崎さん、しつかりして。」

良かつた、と息も絶え絶えな状態で、微笑んだ。

「大丈夫だ。」

嘘だつた。

内臓を銃弾を通過していた。

もう、持たないかも知れない。

（……死ぬのか？）

べつとりとした血で紅く染まつた手のひらを見ながら、覚悟した。もしそうなら、今この場でやらなくてはいけないことが、榆崎にある。

櫻子に、伝えなければいけない本当のことが。

「……礼を言つのは、俺の方なんだ、櫻子さん。あなたは、吉野で……俺を救つてくれた。」

「……吉野？」

「十二年前、櫻の季節に、労咳で死に掛けていた少年を……あなたは助けてくれたろう？」

「少年？」

櫻子は、榆崎の突然の告白に、戸惑つて視線を泳がせながらも、何とか彼の為に思い出そうと、記憶を辿り始めた。

「十二年前の、吉野の山里……？」

考えられるのは、その時期にまだ母親は生きていたという事だ。そして、その療養の為に、頻繁に吉野には来ていた。特に、春は。

「あ……。」

何とか記憶をこじ開けようと、もがいていると、思い当たる節があつた。

「まさか……、あの人なの、あなた……？」

確かめるような櫻子の瞳に、満足したように榆崎がうなづいた。

十二年前　吉野

十六歳の榆崎少年は、大阪の米問屋で昼夜こき使われていた。旦那は、下働きを人とも思っていないようで、米を売る仕事に携わつても、米どころかまともな食事を食べさせてもらつた記憶すらなかつた。

しかし、ある朝、皆の前で喀血してしまつた。

労咳である。

罹患者の多さから、国民病として呼ばれた明治時代よりも前から、著名人の多くも命を落としたといわれる、恐ろしい肺の病。そして、それが人に忌み嫌われる理由は、空気感染によつて広がることにある。

ゆえに、榆崎は、仕事場を追われた。

しかし、金のない榆崎は病院に行く事が出来ない。それどころか、今晩泊まるあてすらない。

(「このまま、俺は死ぬのか?」)

生まれ落ちたその時から、他の遊郭生まれの子らと同じように、溝や道に落ちている食べ物を拾つたり、訪れる客達に媚を売つて、情けをかけてもらつ生活。

物心ついた時には、神戸に売られ、そこでは最低限の生活は保障されていたが、働き詰めの生活だつた。おまけに、先輩共が、失敗を後輩に押し付けるので、その度に、理不尽な罰を受けるのは屈辱的だつた。

(十六年間、耐えても最後は病になるとは、天も不平等に人間を

造りなさつたな…。 )

しかし、どうせ死ぬなら、最後に自分が見たい景色の所で死にたかつた。

( 今の時期の吉野の山は、さぞ夢のようだうつなあ。 )

奈良の吉野山は、平安時代から有名な櫻の名所である。その数は約三万本にも及ぶといつ。

これらの櫻は、4月初旬から末にかけて、山下から順に山上へと開花してゆき、山全体が、桜色になる。

榆崎は、こうして大阪から吉野まで、行く事にした。労咳を病んだ者が、そのような大移動をする事自体、死出の旅のようなものである。しかし、榆崎は、なんとかたどり着いた。

たどり着いたは良いが、疲れきつてしまい、とある櫻の大木の根元に寝転がつた。ごほごほと止まない咳が続いたが、山の奥には人もいない為、榆崎を忌み嫌う者もなかつた。

時々、咳と一緒に血を吐く事もあるが、櫻がその花びらをはらはらと散らせるだけで、あたりは静寂である。

櫻を見上げていると、舞い落ちる花弁が、自分の顔や体に積もつていく。

その美しさに、まるで極楽浄土のようだ、と思った。

このように美しい世界が、この世にもある、と。

ここで誰にも見つからずに、櫻の花弁に覆われながらひつそりと死ねば、朽ちた体はやがてこの櫻の養分になるのだろう。

そうすれば、それを糧にして、来年も、美しい花弁を咲かせるのであろうか。

榆崎は、急に安らかな気分になつて、瞳を閉じた。閉じながら、自分の体が朽ちて、この根に吸われて、幹や枝を通して、最後には花弁になるところを想像した。

( それなら、悪くないかもしれん。 )

この櫻と一体化する事ができたら、意味もなかつたような自分のつまらない人生が、とても価値があるようと思えてきた。

その時だつた。

草むらで、かさり、と葉のすれる音がした。

血の臭いをかぎつけて、獣が近づいてきたのだと思つた。飛び起きようとしたが、既に疲れきつた体は動かない。狼か、熊か、いざれにしても、その死に方は、想像してはいなかつた。

しかし、現れたのは、紅と橙の鞠だつた。

それを追いかけて、続いて少女が現れた。桜色の上質な着物に身を包み、淡い化粧も施されている様子から、どこかの裕福な家のお嬢様の様である。年は十歳くらいだつた。

しかし、顔は日本人形と言つよりは、西洋渡りの人形のよう、彫が深い顔立ちをしていた。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

女の子が、ゆっくりと楢崎に近づく。

「死んでるの？」

座つて、顔を覗き込まれた。

その時に、『ほと咳』が出てきた。

「大丈夫？」

「……お兄ちゃんは、肺の病気なんだ。逃げないと感染してしまつよ。だから、きみは、早く戻りなさい。」

楢崎は、女の子を怖がらせないよう、優しく言つた。しかし、逃げずに、首を傾げている。

「咳が止まらない病気なの、お兄ちゃん？」

「そうだよ。だから、お嬢ちゃんとは一緒に遊んであげられないんだ。」

とても綺麗な鞠を持っているのに、『めんね、と言つ。

「ううん。今は、父さまが遊んでくれているからいいのよ。戻らなくちゃ。」

「そう、よかつたね。」

「そのびょうき知つてるよ。わたしのおばあちゃんも、そつだつたの。」

どうやら、彼女の体内も自分と同じ病であつたらしこ。

「でも、ねばあちゃんは、仏蘭西に居るから、わたしはお見舞いに行けなかつたのよ。」

「あなたのお婆様は、仏蘭西の人なのか？」

「そうよ、と女の子は笑つた。

「とても怖い病氣だつて、父様が言つてたわ。」

「そうだよ、とても怖い病氣なんだ。」

だから、はやく、行きなさい、と促す。

「おにいちゃんは、おつむに帰らないの？」

女の子は、小さな手で、榎崎の服を掴んだ。

「お兄ちゃんには、お家がないんだよ。」

「お家がないの？」

「おうちを探すよりも、いまは櫻が見たいんだ。」

「櫻を見に来たの？」

「櫻は近くに寄らないと、匂いがわからぬいだらつ？」

「だから、寝転んでるの？」

「そうだよ、だから、お兄ちゃんにかまわずに、お帰り。いい子だから。」

そして、痰や血で汚れた自分の手のひらで彼女の着物を汚さない  
ように、手の甲で、彼女を誘つて、戻るよう促す。

また、咳き込んでしまつた。「ほほほ」と醜い音がする。

「お兄ちゃん苦ししそうね？」

「……うん？」

「わたし、すぐに戻つてくれるよ。」

跳ねるように歩き出した女の子が、ちょっと待つてね、と自分の方に振り返つた。

ああ、と、手を弱弱しく上げて返事をした榎崎には、もう自分意識を保つだけの力は残つていなかつた。

再び、眼を開けると、榆崎は白いベッドの上に居た。光の当たるほうを見ると、窓があり、その奥には、櫻が風に吹かれて、はらはらと花弁を舞い散らしている。

(俺は、死んだのか?)

死んだにしては、窓とか、白い壁とか、やけに生前に見覚えのある光景ばかりである。

その時、ギイ、と扉が開けられるような音がした。

「あら、気づいたんだね、僕。」

白い服に身を包んだ、医者だった。

「あの……ここは病院ですか?」

「そうだよ、死ぬところだった。でも、生命力が強いんだね。もう此は過ぎたよ。安心していい。」

「俺、治るんですか?」

「うん。」

優しい顔をした医者は、榆崎の前の椅子に腰掛けた。

「どれ、目覚めたばかりで、どこか辛いところはないかい? 飲みたいものや、食べたいものは?」

「いえ、今は、特に。」

「そうかい。また、何かあれば看護婦を呼ぶんだよ。」

「ありがとうございます。」

「しかし、君、労咳をこじらせていたのに、どうして外にいたんだい? うん、言いたくなれば別に良いんだ。君の体や服の状態から、ある程度は予想がついている。」

優しく、穏やかに、医者が尋ねた。

「労咳で、仕事場を追い出されたので、死ぬ前に吉野の櫻を見たいと思って……。」

「そうかい。綺麗だつたりつ

「……はい。」

「また、来年も見れるさ。君をここへ運んで下さった方に感謝するんだね。治療費の事も心配いらないよ。その方が十分なお金を置いていかれたからね。」

「え？」

そういうえば、病院に運ばれたという事は、助けてくれた方がいるという事である。

「誰が、僕を助けてくださったんです？」

「女の子が、山で君を見つけてね、その方が連れて来て下さったんですよ。」

「……櫻色の着物を着て、赤と橙の鞠を持った？」

「そうだよ。そのお嬢さんのお父様が、君を発見なさってね。君を担いで来られた。」

劳咳の自分で担いで、山を降りた？ 確か、あの少女の身なりは、それなりに身分も資産もありそうな様子だった。そんな方が、自分をこの病院まで連れて来てくださったとは。

「名前はなんと仰るのですか？」

「さあ、名乗らずに行つてしまわれたのでね。僕は、この病院に来て間もないし、看護婦達も知らない風だったよ。」

「……そうですか。」

「どうやら別荘がこちらにあるらしくて、櫻を見にいらしていたみたいなんだけど、かわいそうに、急に奥様がお亡くなりになつて、本宅に戻られたんだ。君を往診中に使用人の方が呼びにいらしてね。慌てて、帰られたんだ。」

そうそう、これを忘れていた、と医者が、一旦部屋をでて、何かを取りに戻つた。

再び、部屋に入つてきたときには、花瓶に入つた櫻の枝があつた。

「あのお嬢さんが、君に渡して欲しい、と言われたんですよ。獣か、風に折られた枝を見つけて母親に渡すつもりだったが、あなたにあげて欲しいとね。」

「俺に……？」

「ええ、彼女の母上は病氣で床から出られずに、外の櫻を部屋の中からしか見られないの、持つてかえつて渡そうとしていたんですけど。でも、君も外には出られないだろうから、元気になるまで、この枝の櫻の香りで我慢して欲しい、つて仰っていましたよ。」

そういえば、あの女の子に、「櫻を見に来た」と言つた事を思い出した。

病院に入院したら、櫻の近くに寄れなくなる、と思つたんだろう。だから、この枝を自分に置いてかえつたに違いない。

（優しい子……。）

榆崎は、その枝を受け取ると、末端に沢山ついている花に顔を近づけて匂いを吸つた。

「先生、実は僕、櫻の根元で死のうと思つていたんです。」

医者は、顔色を変えることもなく、優しげな瞳で榆崎を見ている。「生きていたけれど、あの世界は僕にとっては地獄だつた。だから、あの満開の桜の中で死ねたら、人生の心残りとか、そんなのものも忘れて大丈夫そうに思えたんです。」

「だから、吉野に来たのですか……。」

「はい。でも、あの女の子が気づいてくれたおかげで、僕は病院ルに来れて、病氣も治つたおかげで、死なずに済んだ。」

榆崎は、眼にかかる程伸びすぎた、うつとおしい前髪を後ろへ撫で付けた。

その手を取つて、医者は、力強い瞳で榆崎に、こう訴えた。

「いいえ、君は一度、死んだのです。」

「…………え？」

「君を最初見たとき、正直、死体なのか患者なのか見分けがつきませんでした。それほど、腐臭と汚れと、血にまみれていたんです。顔も真つ黒でした。普通の人なら、怖がつて、近づこうとさえしなかつたでしょう。」

「…………。」

「君は何も語りませんでしたが、僕は、あなたが並みの人にとっては想像できないほど、壮絶な環境の中で生きてきたことは予想できました。でも、今の君は、布と湯で汚れも取り払われました。病も治った。君を支配していた人々も、皮肉にも、病のおかげで今は居ない。だから、これから、新しい人生を作ればいいのです。」

「ここは、あなたにとつては、二回目の娑婆なんですよ、と医者は微笑んだ。

「二回目の……？」

「君の新しい、自由な人生です。十歳の女の子でさえ、死体とも見分けがつかない君を気にかけたのです。これからも、君は、まだまだ良い人に沢山めぐり合えますよ。」

医者はそう言つて、声をあげることなく静かに涙を流す少年の為に、自分の清潔なハンカチを差し出した。

その後、楢崎は、神戸へ戻つて、新しい人生を生きることにした。医者の言うとおり、自分の人生は一度死んだのだ。

そして、あの名前もわからない、小さな恩人に、いつかお礼が言いたいと思った。

記憶にある手がかりは、十二年前の春に、女の子の母親が亡くなっているという事、そして、その女の子の祖母が仏蘭西人であったという事だ。

神戸は有名な貿易港だ。外国との接点も多い。しかし、あの混血の少女は、あの身なりと、吉野に別荘を持つてているという話から推測するに、関西の上流社会の人々の可能性が高い。

そのような人々が出入りする場所に行かなくては、手がかりを得られそうにない。その為には、自分がその場所に辿りつけられるような人物にならなくてはいけない。

だから、榆崎は、より仕事に打ち込んだ。打ち込みながら、恩人の手がかりを集めようとした。

行き詰る事があつても、自分は「一度死んだのだ」と思えば、新しい人生である「今」に対する、ためらいや迷いは、嘘のように無くなつていった。そして、勇気を持つて、新しい事に挑戦できた。そうして、現在までたどり着いた榆崎は、富豪や華族の集まる夜会に頻繁に出かけるよくなつた。

しかし、なかなか、手がかりの条件に合つた少女にたどり着けなかつた。

それもそのはずである。最初の榆崎の見込みとは違い、櫻子の本宅は関西ではなく帝都にあつたのだから。

終に、自分の会社を帝都に移した後、転機が訪れるようになる。ある日、自分の部下が、昨晩、浅草を歩いていた時に、無頼漢に絡まれている淑女二人を、咄嗟に助けられなかつた事を、猛烈に後悔していた。

二人とも、歩き方や雰囲気から、何處かのお嬢様のように見えて、もし、自分が助ける事が出来たら、いつぺんにその二人と知り合う事が出来たのに、と、こぼしていた。

じゃあ、その女性は、他の誰かが助けなさつたのか、と榆崎が聞くと、

「いや、強引に男が女性の手を引いたので、もう一人の方の女性が怒つて、返り討ちになさつたんだよ。」

と、意外な答えを返した。

手に持つていた扇子で、男の小手を叩いて、「いい加減にしなさい！」と一喝したという。その気迫と、扇子を打ち込んだ素早い動きに恐れをなして、只者ではないと感じたのか、男達は退散したそうだ。

あれは胸がすかっとして、凄かつたな、としみじみ話すので、そんないに色氣のない、男勝りな女性だったのか、と聞いたら、

「いや、それが、着物を着ていたけれども、洋装も似合つような、

彫の深い顔に、長い睫毛が印象的な女性でね。瞳は黒かつたけど、外国の血でも混ざっておられるんじゃないだろうか。」

と、話した。

それで、その浅草の一件に興味を持つて、あちこちの夜会で話していたところ、それが二階堂財閥の令嬢、櫻子が起こした事だと噂されていた。

それで、ある夜会に、その令嬢も出席されるというので、その場に榆崎もやってきた。

そして、その顔を見て、「ああ、この人だ」と思った。

十二年という月日が経つても、記憶に残る少女の面影の残る、その人。

周囲に聞けば、母親と祖母の件も、当てはまつた。そして、二階堂家で夜会が開かれるというので、何とかしてツテを辿つて、紹介状を手に入れた。

あの日に、告白するつもりだった。

あなたが、お見舞いに桜の枝を下さった少年です、と。

最初見た時、そして、夜会でも、まるで男子学生の詰襟のようにな顎まで隠れた、色気に欠けた洋装を着ていた彼女を、恩人としては惚れていたが、女としては欲していなかつた。

だが、事件の時、無頼漢に啖呵を切つていくのを見て、きっと彼女はこれからも、こうして誰かの為に、自分の身を返りみないで進んで行くのだと思った。

そして、かつて自分にそうしたように、優しく傍によつて、優雅に微笑むのだと。

「…………その時に、俺は、あなたを守つていきたいと思つた。  
櫻子からもらつた一度目の人生を、そのために生きたいと思つた。」

「覚えているわ、あなたの事は……。母が亡くなつたので慌しくて、京都になかなか戻れなかつたのよ。お見舞いに行けずにごめんなさいね。」

戻ってきたときには、全快した彼は、病院を去つていた。

「俺が、今まであの時のお礼を言えなかつたのは……もう、夜会の日から、あなたの事が好きだつたからだ。……あの時の少年だと分かれば、優しいあなたは、俺に情けをかけてくれるかも知れないから……でも、ただの貿易商の榆崎として、あなたと接したかつた。

「櫻子が気がつかないなら、このまま初めて会つた男として、他の男達と同じ立場で、堂々と求婚を申し込みたかつた。

「……櫻子さん、櫻の枝を……俺を助けてくれてありがとう……。

「いいの。あなたが元気になつたとわかつて、嬉しいわ。お願ひだから、もう話さないで。体に障るわ！」

榆崎は、血を流しすぎて、ショック症状を起こしかけていた。体が、がくがくと震えている。

瀕死の榆崎の痛みが、どこも傷を負つていらない自分にも流れてくれるような気がして、櫻子も体が震えた。

そして、妙月が「人は、いつ何がどうなるかわからなあ。」と行つた時に、榆崎が死にそうにない、と考えた事を、後悔した。人は、突然、死ぬ。

その怖さを初めて知つた櫻子は、涙をぽろぼろと落とした。

透明なしづくの玉が、榆崎の頬に落ちては、潰れる。

母が亡くなつた時すら、零れなかつたもの。

「櫻子さん、泣いているのか……俺の為に？」

「嬉しいなあ……と言つて、榆崎が眼を閉じた。

「ま、まつて……！もつすぐ、病院に運んでもらえるから。駄目、

氣を確かに持つて！」

そう言つて、榆崎の手をより強く握り締める。

「眼を開けて……待つて……蓮一さんの事、私は、とても愛しているの！」

そして、彼の血がついた手で自分の顔を覆つて、泣き崩れた。

内臓と肩をえぐられ、腕の肉を切られたことによる大量出血で、生死の境を彷徨つた榆崎が、眼を覚ましたのは事件から三週間後の事だった。

「気が疲れましたか、社長」

天井をぼんやりと見て、声のした様子を伺う為に首を動かす。

「新堂……？」

椅子に座つて、腕と足を組み、厳しい顔でこちらを見ている顔がある。

「あなたは大馬鹿ものですか？」

ふつふつとこみ上げて来る怒りを抑えて、話し出す。

「どうして、私の忠告を聞いてくださらなかつたのです。私を巧みに巻いてまで、あの方と二人でいる事に危険だとは思わなかつたのですか？」

「……悪かつた。」

名のある富豪の子女が、次々と血祭りに上げられていたのである。新堂が心配するのも当然だ。

「犯人は、どうなつたんだ？あの事件のけが人は？」

「自分の身より、他人の心配ですか？」

眉を顰めた秘書の顔を見て、榆崎は不覚にも笑いそうになつた。どうやら、櫻子の性格が、少しうつてしまつたらしい。

「主犯は、政治家の集会を爆破した時に一緒に自決しましたよ。」

「何だつて？」

「あの事件の時に、周囲に紙片<sup>しりっぷ</sup>が撒かれたので、犯人達の目的も明らかになりました。」

榆崎の脳裏に、誰とも知らぬ男が、体に爆弾をくくりつけ、往来に紙片を撒いた後で、集会に使われていた部屋を爆破する様子が浮かんだ。

「山の麓にとある小さな村があり、その山から金属が取れた為に開発が行われたそうなんですが、

鉱毒の為に住民は殆ど死に耐えたそうです。」

その開発を手がけたのが、先に殺された堂島金属であつたらしい。「鉱毒と村の人の死の因果関係は、厳密にははつきり分からぬ。にも関わらず、他の人に知れたら、他の山の鉱山採掘も、全て中止になつてしまふかも知れない。それに被害者には、多額な賠償がかかるでしょう? ですから、鉱山開発に関わった関係者は事件を黙視する事にしたんです。」

「じゃあ、主犯はその村の生き残りか?」

「ええ、そうなりますね。名前は董谷祐磨、という男だそうです。

「

「そうか……。」

榆崎は、視線を落とした。

そして、上体をベッドから起つとする。その時に、体のある部分に違和感を覚えた。

「ちょっと、社長、まだ起き上るのは、無理ですよ。」

「新堂、きみ、医者から何か聞いているか?」

榆崎は、自分の右腕に視線をやつた。

いくら力を入れても、びくともしない、棒のようなそれを。

「……切断は免れました。しかし……。」

「一生、動かないのか?」

「いえ、訓練しだいだと。」

深刻な顔をした新堂とは異なり、そうか、と榆崎は、にやりと笑つた。

「治らんかも知れんが、治る可能性もある、と言つ」とだらつ。それならいい。」

「でも、利き手ですよ。仕事にも不便が出るでしょう。」

「そういう時の場合に、俺の右腕はいつも居るのだろう。」

「新堂? と榆崎が不敵に笑つた。

新堂は、泣き笑いしたいような気持ちになつた。

「俺だけじゃありませんよ。他の人も、毎日代わる代わる見舞いに来ていますよ。社長はまだ何も食べれない、と云えたにも関わらず果物やら菓子やら持つてくるし、……俺がどうにかしなければ、この病室は花屋でも開店できそつた勢いでしたよ。いろんな花の匂いが混じりすぎるのも、かえつて、気分が悪くなるでしょう?」

「ははは。」

「あと、隙あらば看護婦にちょっとかにをかけようとするので、やれも成敗しておきました。」

榆崎商会の恥になりますから、と律儀に言った。社長が若いといふことと、海外で仕事を開拓していく貿易商社と云つ性質柄、若々しく活潑的な人材が多かつた。

「櫻子さんも、毎日お見舞いにいらつしゃつていましたよ。」

「本當か、今日も来てくれるだろ?」

「いつも仕事の帰りに、同じ時刻にいらつしゃるので、そろそろ来られるのではないかと……。」

榆崎が、窓の外を見やると、女性が、病院に入ろうとするのが見えた。白い長袖の洋装を着て、日傘を差している。その陰から、見覚えのある顔がちらりと見えた。

「あれ、彼女じゃないか? おい、お嬢さん!」

不意に上から声をかけられて、少しひづくつした様子で見上げる。

「あつ!」

そして、急いで、病院の中に入つていつた。

「榆崎さん、良かつたわ、気がついたの?」

病室に飛び込んだ櫻子は、思わず榆崎に飛びついて、彼があちこち体を痛めている事を思い出して、やめた。

「新堂さんも、今日もお疲れ様。あなた、貯古齡糖のケーキはお好きだつたかしら?」

小さな袋を新堂に渡す。

「ええ、ありがとうございます。」

「なんだ、それは新堂の分か?」

「だつて、あなた何も食べれなかつたじやないの。」

「それはそうちだが……。」

「知らないの? 新堂さん、私の兄様とは逆で、洋菓子がとつてもお好きなのよ。だから、練習台と実験台にもなつてくださつているの。」

「何の……?」

「私が美味しい洋菓子を作れるように、食べたものの感想を丁寧に教えてくださるの。」

「…………。」

つまり、あの袋の中身は、櫻子の手作りの物だという事になる。俺の意識が死の淵でさまよつてゐる間に、部下と(未来の)婚約者が仲良くなりかけている。

「新堂?」

「はい?」

呼ばれた本人は、うれしそうに病室で、お茶の準備を始めている。いつまでそこに居るんだ、とつとと出て行け、と榆崎に追い出された。

理不尽だ、と新堂は思つた。

「え、ど、どうして……?」

「あいつは、邪魔だ、いらん。」

櫻子は、榆崎に促されて、椅子に腰を掛けた。

「しまつた、目覚めたらあいつに聞かなければいけない事があつたんだつた。」

おい、新堂、ともう一度声をかけるが、既に去つた後のように、戻つてくる気配は無い。

「どうしたの?」

「櫻子さんが俺の誕生日に、何かくれたじやないか。あの中身が氣になつていてな。今、あなたの前で開けても大丈夫だろ? か?」

「あ……。」

櫻子は、はつと気がついて、気まずそうに視線を泳がせた。

「俺の血まみれの背広は、新堂が処分してしまったろうが、中身は全部取つておいてくれるだろ？ その中にあるはずだ。撃たれたのは胸じゃないから、包装は血を吸つてしまつたかもしけないが、中身に傷はついてはいなはずだ。」

「あれは……その……一旦、私に返してもらえるかしら？」

「ん、どうしてだ？ 俺にくれたんだろ？……？」

「その、えつと中身が、思い返すとちょっとあんまり良くなかったから、改めて渡したいなって。」

明らかに動搖している。

「俺は別に、中身が何たるかはそれ程、気にしていないぞ？ もらつた、という事実の方が大事だからな。で、今それは、どこなんだ？」新堂つ！

何ですか、と新堂が再び部屋にやつて来た。

「俺がお嬢さんからもらつた贈り物だ。背広の内側に入れていたはずなんだが、今何処にある？」

「……ああ、その机の中に入れておきましたよ。」

少し、血に汚れてしまつたが、と言つて、机の引き出しを開けて、中身を取る。

「ああああ、駄目！」

それを櫻子が、奪い取ろうとする。

「なんでだ、お嬢さん。新堂、俺に渡せ。」

戸惑つている新堂から、櫻子が包みを奪おうとする。その時、腕が榆崎の体に触れた。

「痛つ……！」

「え？ あ、ごめんな……。」

その隙に、榆崎は奪い返した。ちよろいもんだ。

「騙したのねつ？」

櫻子を無視して、榆崎は包みを開ける。櫻子は、そっぽを向いて、

知らんふりをしていた。

新堂は、どうすれば良いか、戸惑っている。

「これは……。」

赤い包みを開くと、中から出てきたのは、万年筆だった。

瑞西<sup>スイシ</sup>製の高級な品だ。それは、重いわけではないのに、ずつしりと重みを感じるような、上質さに溢れていた。

「ありがとう……良い贈り物じゃないか。なのに、何で取り返そうとしたんだ。」

「だって、あなた、利き手を怪我してしまったじゃないの。」

「あつ……。」

「お医者様が、治る見込みはその後の訓練しだいだから、今はなんとも言えないって。」

「…………。」

榆崎は、自分とは反対方向を向いたままの櫻子の手を取った。

「大丈夫さ。利き手が駄目なら、左手でも、すぐに書ける様になる。」

「えつ……？」

「ふん、競争しようじゃないか。あなたの髪が伸びるのと、どっちが早いか。」

櫻子は、その言葉を聞いて、榆崎に飛びついた。

彼は、まだ痛みの残る体に加えられた衝撃に、悲鳴を上げそうになつたが、我慢して、彼女のうなじに顔をよせて、柔らかな匂いを吸い込んだ。

「…………一ヶ月半も我慢したんだ。今度は、無茶苦茶に可愛がつてやる。」

「いつ……？」

「利き手が使えないでも大丈夫だ。やり方はいくらでもある。」

「いやつ！」

櫻子は、それを聞いて、榆崎の体を押しやつて、逃れようとした。しかし、榆崎の体はびくともせず、捕まえられたままだった。

「ここは、病院！あなた、病人！」

「もちろん、退院してからの話だが？」

「あなた、新堂さんも傍にいるのに、なんてこと言つたのよ。」

櫻子は、ちらりと後ろの新堂を見る。嫌だ。思いつきり聞かれているのに。

しかし、新堂は、真っ赤になつて、櫻子とは違つて、表情一つ変えない。

新堂は、一生櫻子にいう事はないだろう。まさか、彼女のいない場所で、自分の上司がどれだけ変態発言をしているか、などとは。

「まあ、素敵な街！ああ、私、この街に恋しそう。」

つばの大きい白い帽子を、風で飛ばないよう押さえながら、櫻子が言つた。

「そんなに気にいったのか？」

何處か、遠くの方で鳴らされた鐘の響き、聞こえた。櫻子は、船上から海の上に広がる街並みに声をあげた。巴里の春は、やわらかい日差しの中で、賑わつていた。

「いい街だらう」

「とても、いいわ。日本とは全く違うのね。」

隣の榆崎は、手に葡萄酒のグラスを持つて、興奮している櫻子を見守るように笑つてゐる。

「俺は一度死んで、あなたに助けられ、そして今度もまた、瀕死の状態なのに生き返つた。ははは、また新しい悪い噂を作られそうだ。」

「そんなの、きつとやつかみよ。いいじゃないの、気にしなければ。」

「そうだな、と榆崎は考えた。

「それでなくても、巴里の社交場に出席する時は、いつも一人だ

つたから、冷たい視線を送られていたからな。」

「外国の社交場は、妻などの女性をともつて行く習慣がある。」

「でも、今回は違うからな。あなたを巴里の淑女マドモアゼルに負けないくらいに飾り立てて、人前に出してやる。」

「そんな、飾り立てるなんて、私の趣味じゃないわ？」

「ははは、知つてたさ。冗談だ。」

榆崎は、ゆっくりと赤黒い濃厚な葡萄酒を口に含んだ。鼻腔を抜ける豊満な香りに恍惚とする。

「やつぱり、本場の味はいい。これは何処の酒だ？ぜひ輸入したい。」

「じゃあ、日本で売れそうな食べ物を沢山見つけて、帰りましょう。」

「……あなた、本当に食べ物の事を考えるのが好きだな。」

「ほうつといて！」

「すまない、と笑つて、機嫌を悪くした彼女の肩に手を置く。

「巴里は良いぞ。美味しい食べ物が沢山ある。あなたが、まだ見たこともないような、洋菓子もあるだろ。」

「いいわね、仏蘭西つて。」

「あと、服もたくさん、買つてやる。あなたは地味好み過ぎるんだ。パリの洒落た服を着て、上手いものを食べて、日本に帰る。」

「でも、これ旅行じゃないわ。仕事で来てるのよ。」

「もちろん、仕事が終わった後でさ。それでは、文句は無いだろ

う？」

榆崎が、櫻子を抱き寄せた。

「それなら、楽しみだわ。」

到着を告げるよつた、船の蒸気の音が、空に響いた。

【終】

「絶対、犬が良いわ。」

「いや、猫がだろう。世話が楽じやないか。散歩も行かなくていいしな。」

「犬は、しつければ何でも言つ事聞くのよ。番犬にもなるし、飼うなら犬の方がいいわ。」

榆崎と櫻子は、榆崎商会の仕事の為に、欧羅巴の長期出張に来ていた。今は巴里を拠点とし、部屋を借りて、しばらくそこに滞在している。

二人が言い争っているのは、他愛無いことである。

櫻子は、巴里の人々が、可愛い犬を連れて歩いているのを見て、自分も子犬を欲しくなった。

しかし、榆崎は、どうせ飼うなら、自分は犬よりも猫の方が好きだという。

「白くて、ふさふさした長い毛に、青い眼をした猫がいるだろう？あれが、いい。可愛いじゃないか。」

「犬にも、似たような毛色に瞳をした子は沢山いるわよ。」

「それに、猫は鼠を捕るだろう。この街はちょっと鼠が多いから、役に立つ。」

「鼠を取るなら、ぴったりの犬がいるわ。茶色に青銅色をした宝石みたいに綺麗な毛の、小さい犬がいるじゃないの。」

確かに、犬の品種の中には、ネズミ捕り用に開発された品種もある。櫻子も、なかなか譲らない。

「あの犬は、英國の犬だろう？仏蘭西なら、やつぱりあのモコモコした犬を連れて歩いたほうが、様になるんじやないか？」

榆崎の言つ、「モコモコした犬」とは、プードル犬のことである。この犬は、仏蘭西では昔から大変人気のある犬だった。

「じゃあ、その犬でも良いわ。」

櫻子が眼を輝かせた。

「猫も可愛い、って言つてゐるだらう？……いいさ、今日、知り合いの家に届け物をする用事があるが、そこでは色々な種類の猫を飼つてゐる。あなたも一緒に来て、猫と戯れてみてから決めれば良いさ。」

きっと、家に戻る頃には、猫が欲しくなつてゐるはずと、榆崎が不敵に微笑んだ。

「いいわ、受けて立とうじゃないの。」

櫻子も、負けじと言い返した。

（ボンジヨール）  
” Bonjour ! Mrs Antoine . Commen  
t a11ez - vous ? ”

（こんにちは、アントワーヌ婦人。お元氣ですか？）

（ボンジヨール）  
” Bonjour ! Très bien , Merci  
vous , Renich ”

（よく来たわね、レンイチ！お久しぶりね。あなたは？）

アントワーヌ婦人は、榆崎の両頬に軽くキスをした。これは、仏蘭西式の挨拶である。

櫻子は、女学校で英語は習つてゐたが、仏蘭西の血は引いていても、言葉は使えない。

帝都から仏蘭西に来る途中の船の上で、榆崎が様々な外国語を巧みに操つてゐるのをみると、改めて苦労して、努力してここまで上り詰めてきたのだと、しみじみと感じた。

しかし、その船の上でも、巴里に来てからも、外国语で話しかけられると、櫻子はどうして良いか分からず、ただニコニコと笑つているしかないのが、辛かった。

”Elle est-elle que votre nouvel  
aman est?”

(あら、この方は、あなたの新しい恋人かしら?)

”Non, elle est mon fiancé. Sa  
grand-mère est la Francaise.”  
(いや、彼女は私の婚約者です。彼女の祖母は仏蘭西人ですよ。)

”Oh!”

(あら!)

アントワーヌ婦人は、親しげに、櫻子の手を取つた。

”Sil vous plaît soyez prudent.  
Ilest un Don Juan.”  
(彼は女たらしなのよ、気をつけなさい。)

榆崎は、苦笑いをした。

「なんて、仰つたの?」

「……仏蘭西の血の混じつた東洋のお嬢さんに会えて、嬉しつつて。」

榆崎は、適当に「まかした。

櫻子は言葉が分からぬが、歓迎されていると知り、微笑を返した。

榆崎は、用が済むと、婦人に櫻子に猫を見せてもらえないか、と頼んだ。

婦人は快く承諾し、二人を猫の間に案内した。そして、少し家の前で買い物をしたいから、猫を見るならその間だけ、留守番をお願

いしたい、と言つて、出かけていった。

婦人の白慢の猫は、部屋の一室に飼われている。。

「まあ、可愛い！」

櫻子は、白毛はもちろん、黒や灰色、縞、黄色など 色とりどりの猫を見て、驚きの声をあげた。

「アントワーヌ婦人は大の猫好きでね。世界中から、猫を集めて来ていらっしゃる。」

「凄いわ。始めてみる猫がたくさんだわ！」

櫻子は、長い茶色の毛をした猫の傍に近寄つて、撫でよひとする。しかし、猫は、ふいと避ける。

「あら？」

あきらめて、白くて短毛の猫に近づこうとする。しかし、その猫も、トコトコと逃げて、最後は白い簞笥の上に乗ってしまった。

「嫌われたかしら？」

櫻子は首をかしげた。

その後、玩具や、食べ物をちらつかせて猫の機嫌を取ろうとするが、彼らは全く櫻子に愛想を振ることはなかつた。

「何してるんだ、あなたは？ 傍から見ていると、凄く滑稽だぞ。」

榆崎の方を振り返ると、自分の肩によじ登ろうとする黒い猫を捕まえて、撫でてやつていた。

椅子に右足を組んで座つているが、その不安定な上に別の猫が飛び乗つてくる。

さりに、床についている榆崎の左足首に体をひつつけるようして、また別の猫が眠そうな顔をしていた。

猫にももてるのか、この人は。

「どうして、榆崎さんには、そんなに猫がたくさん寄つてくるの？」

しかし、この差は、何処から生まれてくるのだろう。

「あなたが追い回すから、怖がつてしているんだりうへ・優しくしてやればいい。」

「……違つと思つの。」

でつぱりと太つた別の猫が、つん、と済ました顔で、櫻子の前を横切つた。

「ほら、私、絶対、猫に嫌われているわ？」

櫻子は、榆崎の足元でこくり、こくりとじてゐる穏やかそうな猫を抱き上げて、無理やり膝に乗せた。

毛が長くて真つ白な猫は、青い瞳をしていて、これが先ほど榆崎が言つていた猫なのだと思つた。

この猫は、とても穏やかな性格のようで、もがこつとしなかつた。櫻子のされるがままにおとなしくしてゐる。

猫は、愛嬌に溢れた瞳で、櫻子を見上げた。

櫻子は、その猫を抱いたまま、手の肉球をふにふにと押し始めた。

「もうー肉球があるからつて、自分の事、可愛いと思つてゐるなら、大間違いなのよ？」

猫は、不思議そうな眼で櫻子を見つめて、にゃうん、と鳴いた。

榆崎は、その様子を見て、溜まらず噴出した。

「あなた、その猫がおとなしいからつて、その子に八つ当たりはやめないか。迷惑そうにしてるじゃないか。」

白い猫は、櫻子の腕の中で、彼女にされるがままになつてゐる。逃げ出さうとしない様子を見る限り、大分、おつとりした性格の猫のようだ。

「だつて、あなたには懷いてるのこ、ビリして私には、この子たち冷たいのよ？」

「あなたの事は好きさうになれなかつたんだねー。」

「どうして？」

「猫は、櫻子さんの事、人間じゃなくて、同じ猫だと思つたんじやないか？」

あなた、猫っぽいものな？と榆崎がからかつて笑つた。

「同属嫌悪つてやつだろ？よ。」

「ど、同属嫌悪？」

「猫は、猫同士では、大変相性が悪い生き物だからなあ。だから、あなたに近づきたくなかったんだろ?」  
榆崎の言葉に衝撃ショックを受けて、

「ねえ、優しいあなた。私が他の猫に嫌われるのって、本当にそうだと思う?」

「唯一、自分が抱き上げる事を許した、白い猫の顎をなでてあげながら、尋ねている。

「ねつ、答えて?」

猫は、櫻子の愛撫に、眼を細めて気持ち良さそうな顔をするだけで、何も答えなかつた。

榆崎は、その様子を見て、たまらずもう一度噴き出した。

婦人の宅から自分達の家に戻つた、その夜。

ベッドの中で、櫻子を後ろから抱きしめながら、榆崎は言つた。

「明日は日曜日だろ? 一人で街を散歩しよう。その時に、あなたの念願だつた、仔犬を飼つてやる。」

「本当?」

櫻子は、振り返つて、榆崎の方を見た。

「あんなに反対していたのに、どうして?」

「……いや、まさか、俺の人生において、猫と張り合つ女性が現れるとは思つてなかつた。」

「しみじみと、言つた。

「…………。」

榆崎は、櫻子の顔の輪郭に手を添えて、じつと見つめた。

「今日、沢山の猫に触れたが、いつもして良く見ると櫻子さんの顔は猫に少し似てるな。」

「どの辺りが?」

眼かな、と榆崎は、櫻子の髪を撫でながら言つた。

「どの辺りが?」

眼かな、と榆崎は、櫻子の髪を撫でながら言つた。

「あとは……てくてく歩いているのに、突然振り返る所とかも似てるな。」

「……嬉しくないわ。私、猫 자체は好きだったけど、私は、猫とは仲良くなれそうにないって、確信したから、今日で嫌いになったのよ。」

「……だから、猫と張り合つてどうする。」

櫻子の奇怪な振る舞いが、榆崎には、いちいち面白くてしょうがない。

「俺の猫は、あなた一匹で十分だ。一匹もいらん。世話が大変だ。」

「私が猫？ 私、猫は嫌いになつたつて、さつき言つたのに！ その猫と私が似てるって言うの？」

「ああ、やだ。何処が似てるっていうのよ、と榆崎とは反対の方を向いて、ベッドの中に少し潜つてしまつた。」

私、鼠なんて捕つた事ないのに……とかぶつぶつ言つているのが聞こえてくる。

「なんで、落ち込むんだ。喜べば良いじゃないか。仔犬を飼つてやるつて言つているんだ。」

「嘘じやないわよね？」

「なんでそうなる。」

「本当に仔犬買つてくれるの？」

「だから。さつきから言つてるじゃないか。」

榆崎さん、素敵、好き、と言つて、櫻子が首に抱きついたので、榆崎はちょっと驚いた。

いつもの櫻子なら、こんな媚びたよつた、可愛らしい振る舞いはしない。何か変だ。

この人、今晚は酔つてゐるんじゃないだろうか。食後に飲ませた葡萄酒が悪かったのだろうか。

顔を近づけてみると、確かに吐息が酒臭かった。

（……本当に、酔つてるな？）

少し、落ち込んだ。

……でも、まあ、いい。

榆崎は、櫻子を抱き寄せて、とつておきの艶っぽい声で、耳元に囁いた。

「だから、明日の昼間は一人つきりだ。」

しかし、櫻子はすっかり安らかな呼吸をしていて、その声を聞いてはいなかつた。

【終】

「別れよつ……。」

仏蘭西料理の名門店である、築地の精養軒<sup>せいようけん</sup>で食事中に、恋人にこ  
う切り出した。

明治の鹿鳴館時代から、華やかな文明開化の一翼を担い、國賓・  
貴賓の交歓の場として利用されてきた格式高いこの空間で、女性と  
二人つきりで食事をする事など、数年前では考えられなかつた。  
ましてや、目の前の人には、うちの会社と取引のある重役の娘であ  
る。

見た目は華やかで美しく、気品に溢れる女性だが、少々派手好み  
なのが元々気に食わなかつた。

所詮、成り上がり者の自分には、ふさわしい相手ではなかつたのか  
も知れない。

「何？他に好きな方でも出来たのかしら？」

「そうではない。」

「じゃあ、何？」

「申し訳ないが、きみの事は、もう女性として見れそうにないん  
だ。」

「茂さん、本気で言つていいの？」

新堂茂<sup>しんどう しげる</sup>といふのは、俺の名前だ。職名上は社長秘書だが、榆崎商  
会で一番目に力を持つてゐる人物だと、周囲からは認識されている。

「すまない、俺は冗談が嫌いなんだ。」

「……っ！」

恋人は、立ち上がり、グラスに入つた水を俺にぶちまけて、出  
入り口へ出て行つた。

従業員が驚いて、慌てて布を持つてやつて来る。

「大丈夫ですか、お客様？」

「ああ、ありがとう。すまないね、見苦しい所をお見せしてしま

つて。他のお客様にも失礼な事をした。」

俺は、自分はさも、どこかの高貴な紳士であるかのように振舞おうとした。驚いてこちらを見ていた他の客たちにも、優雅に微笑み、軽く会釈をする。

怒らせるような言い方をした自分も悪かつたかもしけないが、あれくらいはつきりと言わないと、きれいに別れられそうにない。それに、どのような言い方をしても、彼女は怒つただろう。

しかし、自分のものではなくなつた瞬間、男に恥をかかせる女性というのもいかがなものか。しかも、このよつた格式高い料理店の中で。

それでなくとも、男は、女性よりもずっと社会的な生き物で、面前で恥をかかされる事を心の奥では恐れているというのに。

（きっと、櫻子さんなら、こつはなさらないだろう。）

恋人と同じ、令嬢と呼ばれる彼女だが、表面上は活潑に見えて、中身は実に奥ゆかしい人だった。

しかし、自分の恋人を、他の女性と比較してしまった時点で、やっぱり自分の恋はとうに終わっていたのだと、確認できた。

せっかくの料理を一人で食しながら、その日は一人で店を出た。

十代の半ばまで、俺は機械工として、古びた大きな工場で働いていた。

毎日、汗と泥と油にまみれて暮らしていたが、慣れてくると、そこまで大変な仕事だとは思わなくなり、休日になるとその辺の川で釣りをしたりして、過ごしていた。

その後、貯めた金で勉強して警察官として、帝都で働くようになつた。

ある日、同僚と一緒に飲みに出たところ、酔っ払いに絡まれて、警官であるにも関わらず、酔つた同僚の数人が、その男を殴り返す

という事件が起こつた。

翌日、俺もその殴つた内の一人だという事で、処罰を受けた。事実無根である。

しかし、一緒に居た他の同僚も、酒のせいであまり記憶がなかつたせいで、無罪を誰も、証明してはくれなかつた。

考えた末に、俺は同僚だと信じていた彼らにはめられたのだとわかつた。

おそらく、彼らは、あまり俺の事を好いてはいなかつたのだろう。確かに、それ程真面目だったわけではないが、新人の中では、いつも優秀な成績を残していく、一目置かれる存在ではあつた。その事に対して、驕るわけでもなく、かといって謙遜をするわけでもない俺の事が、なんとなく気に食わなかつたのだろう。

その原因は、元々、人に好かれる性質たちではなかつた事を自覚していなかつたことなのだろうと、今になってからわかつた。

人付き合いは下手ではなかつたように思うが、元々、人間としての感情表現が乏しいせいでの、得体の知れぬ人間として、周囲には映つていたのだと思う。

そのせつかく誘つてやつているのに、彼は、喜んでいるのか、それとも、単に付き合いの為で仕方なくついてくるのだろうか、と周囲は疑つていたに違ひない。

そもそも、警察と言うのは組織のつながりを大切にする所なので、俺と言う人間は、その環境では、あまり好かれない種類の人間だつたのだろう。

そうして、職をなくして、毎日ぼんやりと、日刊新聞の求人欄を見ていた。

食つていけるだけの金を得られそうな職なら、どこでも良かつた。

その中から、適当に一つを選んで、応募してみる事にした。

それが、後に自分の人生を振り返つたときに、最大の分岐点になるとは知らずに。

「やあやあ、はるばる『へへ』。」

「私は、新堂茂と申します。本日はお時間を取つて頂き、ありがとうございました。」

「俺は、榆崎商会の社長をやつしている、榆崎蓮一だ。以後、よろしく。」

そう言つて、快活に笑いかけた。

面接に行つたら、一回目から、いきなり社長が出てきたので驚いた。

背が高くて、肩幅が広い。

英國紳士の着るような茶色の背広に、蘇芳色のタイをしている。香油で前髪を後ろに撫で付けるように整えている。そして、近づくと、かすかに香水の匂いがした。

薔薇の匂いだ。

それ以上に、この人物を特徴付けているのは、底知れない自信に満ち溢れた瞳と、悠然とした物腰だった。

昨日まで、英國で仕事をしていて、今日の朝に横浜に着いた、といつこの社長が予想以上に若かつた事に、驚いた。

「かけてくれたまえ。」

俺は、促されるまま、長椅子に腰を掛けた。

「実は、今度、本社を帝都に移そうか、と考えていてね、この辺の地理に詳しい人材が丁度欲しかったのだよ。それに、君の事は、聞いていたよ。」

「はあ……。」

何を聞いたというのだろう?

「警察の人間の何人かと知り合いでね、若くて優秀だった警官が辞任してしまつたと、酒の席でこぼしておられた。」

冤罪だったんだろう?と榆崎は、すばり問うた。

一介の警官の事件まで把握しているとは、この男の情報網は、一体何処まで張り巡らせているのか。

急に、田の前の男が、恐ろしくなった。

「そんな、怪しい者じゃないさ。本当に、たまたま、君の話を聞いたんだ。その方は、君の様子を見て、冤罪だと確信したらしいが、いかんせん、目撃者が口をそろえて紡げばそれまでだからな。残念がつておられたよ。」

その言葉に、少し救われた気がした。嫌われていると思つていた職場でも、密かに自分を評価してくれていた人が居たことを。

「警察が要らぬなら、俺にくれ、と言つたんだが、酒の席での『冗談と取られてしまつたらしいな。まあ、いい。きみはここに来てくれたのだから。』

きみは、もう、来る前から採用と決めてある、と社長は言つた。

「本当にですか？」

「もちろんだ。来てくれるな？」

はい、と新堂は返事をした。これで、明日から食事に困らなくてもすみそうだ。

「でも、その前に、一つ質問をさせて欲しい。」

「何でしょう？」

「貿易商して、これからたくさんの方所に行く事になるだろうが、ある場所にやつて来た、と仮定しよう。」

「……はい。」

「きみは、靴を売る商人としてやつて来た。その場所には原住民が住んでいたが、靴を履く習慣が彼らはない。それを見たきみは、俺になんて報告する？」

まるで、謎々のような質問を突然、出された。

俺は、しばらくの間考えて、自分の答えを言つた。

それを社長は、目を閉じて聞いていたが、言い終わると満足そうに微笑んだ。

「思つた通り、きみは優秀で、聰い男だな、新堂くん。……少し真面目すぎて、先見の明に欠けている風もあるが、十分な合格点だ。」

「

そういって、長椅子から立ち上がり、手を出した。

「よひこそ、榆崎商会へ、新堂くん。俺たちと一緒に世界を田指

そつ。」

手を差し出すと、力強く握手をされた。

その手は、洗練された外見とは裏腹に、厚みがあつて皮膚も固く、指は節が田立つていた。

「新堂さん、いつも悪いわね」

明ぐる田の夕方、櫻子さんを迎えて一階堂邸の門前で、車を止めた。

社長が夕食に誘つたのである。行き先が、会社と一階堂邸は逆方向であるので、自分が自分の車で迎えに行くのは、時間の無駄になると言つ。櫻子さんだけを会社の方まで送るのが、言つつけられた仕事だった。

「もし、私を送らなくてすんだひ、もう少し早く帰れたでしょ？」

「……まあ。」

「じゃあ、この後は、やつぱつこの間はなしてくださつた素敵の方と、お食事でも行かれたりするんでしょう、やつぱつ申し訳ない事をしたわ。」

「うん？……ああ、別れましたよ。」

え、と彼女が、驚いた。

「お似合いだったのに……。」

そして、気まずい事を言つてしまつたと思つて、困惑した顔をする。

「気にしないで下れ。私から振つたのです。今日は暇ですから、心配なく。」

「 うなの…… でも、やつぱり、私的な事柄まで、秘書さんにお願いするのもどうかと思うわ。 」

困った顔をしている彼女は、今日は紺のワンピースドレスに、黒いコートを着ていた。しかし、今日の服は、鎖骨の辺りに襟剃りがある。きっと社長に何か言われたに違いない。顎まで襟がある服を、彼女は好んで着ていたが、それを社長は、色気がない、といつも不満そうにしていたから。

そして、化粧も落ち着いた色の服に合わせて控えめにしてある。髪飾りも、小さな銀の花のようなものにして、服と合わせていた。最近流行の、横髪にパークを当てて、低い位置に髪を作る「耳隠し」と呼ばれる髪型は、長髪の頃より、むしろ彼女には似合っているようだ。自分は思う。

「 私は、迎えはいらぬって言つてこりの、あのひと聞かないんだもの。『めんなさいね。』

今度こそ、きつく言つておくわ、と後部座席から運転席を覗き込むよつこにして言った。

すると、彼女からかすかに花の香りがした。

深い薔薇の匂い。自分と四六時中一緒にいる、社長のオード・ワレと同じもの。

おそらく、あなたは花屋か、と思つまび、定期的に榆崎さんが、薔薇を贈っているからだろう。

飾られている部屋には、絶える間も無いほど、きっと香りが充満しており、それが移ってしまったのか。あるいは……。

「 がまいませんよ。社長の私的な事柄もお世話するのが、秘書ですから。 」

「 いいえ、良くないわ。 」

ああ、そうだ、と思い出したよつて、一度に後ろに引っ込んでから、また運転席を覗き込む。

「 今日は、カステイラを作り直してみたの。あなたが教えてくれ

た通り、お砂糖は少し控えて蜂蜜の量を増やしてみたわ。助手席に置いておくわね。」

そういうて、緑色で取っ手のついた、小さな紙袋を渡した。

「あの人見つからないようにして頂戴ね？五月蠅いから。社長の入院の時から、こうして定期的に彼女の作る洋菓子の味見をしている。

洋菓子作りは彼女の趣味なのだ。残念な事に、家の者は辛党派ばかりらしい。

ちなみに、社長は洋菓子は嫌いではない。しかし、酒の味は分かっても、それ以外の食べ物の味の、微妙な違いが分かるほど、纖細な舌を持つていね。実は。

「新堂さんが、いつも次に何を気をつけて作ればいいか教えてくれるおかげで、私、かなり上手になつたと思うのよ。」

「いえ、お役に立てたなら。私も、甘いものが食べれて嬉しいです。」

「どうもありがと。」

そう言って、ニコニコと笑っている。

「やつぱり、お料理が上手な方は、味もよくお分かりになるのねえ。」

「そうだ、最近、オープンを新しいものに取り替えたんですよ。外国製のね。」

本当の話だつた。昔のものは、使い勝手は良かつたが、古すぎで上手く焼けなかつたので。

「まあ、本当？絶対、素敵ね。」

好奇心で、彼女の顔が輝いた。

「もし、よければ、今度は、私の家でカステイニアを焼いて下さいます？」

運転をしながら、このときだけ、彼女の顔を見た。

きょとんとして、突然、言われた事の意味を理解しようとしている。

「あ……あの……。」

「ふふふ。からかってみただけです。」

「冗談ですよ、とは言えなかつたのは、何故だらう。」

会つた当時の彼女なら、本当にオープンを使ってみたくて、のこ  
のこやつて來たかもしれないが、現時点でそのような事をしたら、  
きっと榆崎さんが機嫌を悪くするだらう事を知つている。

きっと、今夜も、一人で顔を寄せ合ひながら、一緒の毛布に包ま  
つて、あの広い寝台ベッドの上にいるのだろうか、と考えたら、冗談いか  
ら安心の表情に変わつた彼女が少し、憎らしくなつた。

「なんで、こんな寝台を買つうんです、社長？」

「この形状デザインのやつは、この大きさしかなかつたんだ。洒落てるだ  
らう?」

「でも、これは一人と半人分位の大きさがありますよ。女性でも、  
とかえひつかえ連れ込む気ですか。」

「下世話な発想をするな、新堂。この仏蘭西製の寝台は、絶対、  
寝心地がいいぞ。俺にはわかる。」

そういうて、わざわざ滞在先の仏蘭西で、持ち帰るのに邪魔にな  
るような買い物をした。

「俺には、わかりませんね。似たようなものは日本でも買えるで  
しょう?」

「おまえは賢いが、先見の明に欠けている、と度々言つてゐるだ  
る?あの時これを買つておいて良かったと、寝る度に思つようこ  
なるや。」

そう言つて、社長は、意氣揚々とおかしな買い物をした。

「ありがとう、新堂さん。気をつけて帰つてくださいね。」

車から降りると、春先だといつのこと、木枯らしのような冷たい風が吹いていた。

「ええ、今晚は寒いですから、風邪などに気をつけてくださいね。

」

「ありがとう、またね。」

そういうて、軽やかに去つていぐ。

「ああ、櫻子さん。」

その彼女の手を引っ張つてしまつた。

「はい?」

意味もなく引き止めてしまつたから、次の台詞を用意していたわけでもない。

困惑で、視線を宙に酔わせてから、やつとの思いで思いついた事を言つ。

「今度は、あなたの作ったお菓子で紅茶でも飲みましょう……社長も一緒に。」

「わかつたわ。私、頑張らないとね。」

そう柔らかに笑つて、去つて言つた。

そんな事を言つ為に、引き止めたのでない事は分かつてゐるはずなのに。

(俺は、あなたとは、楳崎さんよりも、ずっと前から会つていていたんです。)

あの、浅草の一件の時。

何人かの同僚と一緒に歩いていたときに、その場に遭遇していたのだ。

(もし、俺があの時、あなたを助けていたら、あなたはどうしていましたか。)

今とは、何かが違う未来があつたのだろうか。

菓子の試食をして、料理の助言をするだけの関係ではないような。

他の男の元へ、あなたを車で送つていかなくてもいいような。今とは、似ているようで、違つた世界が。

……全く、自分は何を考えているのだろうか。

榆崎さんが、あなたが好きだと言つた時、「私の好みではない」と返したのは、自分ではないか。

今、現在、俺が魅かれている彼女の部分に、自分よりも早くに発見したのは、社長なのだ。

（あなたは、俺を優秀で、聰い男だと仰つたが、少し真面目すぎて、先見の明に欠けている風もあると仰つた。）

全く、的を得すぎている。腸から、可笑しな笑いがこみ上げてくるようだ。

（……あの方には、かなわない、か。）

鬱をなびかせて、悠然と草原をきる獅子のような人。

いや、しかし。

（もしも、あなたが油断なされば、私はあの方を、鬱にねめてみたくなるかもしませんよ。）

あなたが、褒めてくださつた、この知力を尽くしてね。

勇猛たる獅子でも、蛇蝎だかつの毒にはかなわないでしょ？

そんな日が、来ないように、一人に祝福を。

そして、自分も、新しい恋人に、早くめぐり合えたらしい。

そんな事を考えながら、無数の灯りがてらてらと闇夜に浮かぶ中を、運転して帰路に着いた。【終】

明治四十五年 イギリス サウサンプトン港

「ハギト！俺たちや幸運だぜ、頑張つて勉強していい教授についてかいがあつたなあ！」

「全くだ、カール！」

二十二歳の斎木萩人は、こげ茶色の中折れ帽子が、風で飛ばないように抑えながら、くすんだ金髪に緑眼を持った、ドイツ人声をかけた。

二人は、独逸にある音楽大学の、学生仲間である。高い空には、雲がたなびき、海鳥が気持ち良さそうに何羽も旋回している。

「おい、興奮しすぎて転ぶなよ。」

「これが、興奮せずにいられるか、見ろよ…」

二人の目の前の波止場には、全長二百七十メートル、幅は三十メートルにもなるうかという巨大な豪華客船が泊まっている。その真新しい船体の、黒々とした下辺部分が、陽光を受けてきらきらと反射していた。

マストは一本、フォアマストには見張りが付いている。巨大な四本の煙突からは、もくもくと黒煙を上げていた。

「こんな大きな船を今までに見たことがあつたか、え？」

「ないともさ…」

「俺達の教授が、ニューヨークの学会に、助手つきで招待されて幸運だつたな。」

向こうが、気をきかせてくれて、この船の乗船券を贈つてくれたのだった。

いやつほつ、と興奮を隠し切れないカールは踊るように飛び跳ねた。

「そういえば、バッカーレ教授は？」

「何処かでカプチーノでも買って飲んでるんだろう。あの、珈琲好きだからな。」

教授の事など、どうでもいいような感じだった。まだ、小躍りしている。

「おい、切符失くすなよ？」

萩人は少し、心配になった。

既に、多くの乗客たちが、トランクを抱えて船に乗り込んでいる最中だった。シルクハットいステッキを持つ紳士や、使用人が挿す日傘の中をゆっくりと歩く貴婦人、茶色くたびれた背広を着た商人風の人、様々な人間が居た。

その中で、淡いラベンダー色のドレスを着て、ゆっくりと船に向かつて行く若い女性と眼が合った。

黒い睫毛に覆われた、青色の瞳に、白い肌、濃厚な紫がかつたブルラッド・レッドの口紅。

すこし頬も紅で染めている。

つばの広い帽子を被つていて、その中からは、やつやと輝くブロンズ色の髪がこぼれていた。

襟割りの大きい胸元には、宝石の着いた首飾りをつけている。

その女性が、顔を上げた瞬間、眼があつた。

じつとハギトを見たが、また何事も無かつたように視線を戻して、紳士風の若い男に誘われて、船の中へ消えて言つた。

「あんな、お金持ちそうな人も、一緒に乗るんだな。」

カールが、思わず声を出した。

この船には一等席から二等席まであり、自分達は一等席に乗る予定である。

「知つてるか、ハギト？」

「何だ？」

「この船には本当は自動演奏楽器オルゴールが使われる予定だったが、間に合わなくて本物の演奏者を急遽、乗船させたらしいぜ。」

「生演奏か。」

「そうさ、機会があれば俺達も飛び入りで参加させてもらえないかな？俺達のヴァイオリンを、多くの人に聞いてもらえる絶好の機会だ！」

「そうだな、船に居る時は持ち歩いて、その機会をうかがつていようじゃないか。」

一人は、お互いの右手に持っている、ケースを見せ合った。

船上だろうか地上だろうが、萩人もカールも常に持ち歩いている、命の次に大切な相棒だ。ヴァイオリン

一人は、一流の演奏者になりたくて、大学一著名だと言われているバッカー教授の下で学ぶ機会を得る為に、寝る間も惜しんで訓練をしていた。

教授も努力家の一人をえらく気に入っていて、今では自分の助手としても、あちこち連れ回しているほどだつた。

「君たち、そこで何をしているんだ、置いていくぞ！」

船の上で、教授が大きく手を振つた。

「なんだ、教授、ひとりでとっくに乗船しているじゃないか。」

「俺達も行くぞ。」

二人は、興奮の醒めぬまま、早く歩行用甲板に駆け上りたい気持ちを抑えながら、もどかしそうに船員に切符を見せた。

そのまま、競うようにして階段を上る。

やがて、辿りつくと、そこに広がる絶景に息をのんだ。

「D ie Welt geh? rt zu mir.」

世界は俺のものだ！）

隣のカールが、両手を上げて叫び、その手を胸にひきつけて、表現しきれない気持ちをあらわにした。

他の乗客が驚いて振り返つていて。

「おい、まだ出航もしていないぞ。」

「だって、ここからの景色を見てみろよ。船の上なのに、あんなに人の頭が小さいぞ。」

全高は十メートルもあるのだ。無理もない。

「興奮しすぎだな。」

はは、と笑つて、上をみると、先ほどのラベンダーの貴婦人が居た。

遠くの地平線を切なげに眺めている。

そのままじつと見つめていると、女性の方も、萩人に気がついたようである。

しかし、女性は、また何も無かつた風に、視線を戻した。

「なんだ、さつきの美人じゃないか。」

「ああ、見たな。」

「惚れたか、ハギト。」

カールは不敵に笑つた。

「なんで、そうなる？」

眉をしかめた萩人に對して、なぜか満足げに、にやりとする。

「俺は前々から、きみの事を心配していたんだ。大学に居ても、きみは浮いた話の一つも無いだろう？俺はまさか東洋って言つのは、そういう習慣もあるのかと思つてしまつたよ。」

「どういう習慣だ？」

かわいい女の子が傍に居ても、きがつかないふりをする習慣だよ、と冗談めかして言つ。

「全く、俺が、きみの顔を持つていれば遊びまくつてやるつていうのに、本当にもつたといない。」

と、カールは、萩人の両頬を左右に引っ張つて伸ばした。

「何をする？」

「このギリシャ彫刻<sup>(ミスティアス)</sup>のように整つた顔に加えて、東洋の血が混じつているせいで、神祕的な雰囲気がいけないんだな。あー、羨ましい。」

そばかす顔だが、カールもそれなりに、女性の噂を誘つ容姿ではある。

萩人は困つたような、複雑な顔をしている。

「あと、もつと笑え、萩人。きみはちょっと落ち着きやすがる。」

「ふふ、こうか？」

口を一杯に引きつらせて、歯をむき出しにする。

彼がめつたにみせない、面白い顔に、カールは噴出した。

「ははは、いいぞ、ハギト！」

「ははは。」

萩人もつられて、笑った。

しかし、カールは、急に深刻な顔に戻る。

「まさか、きみ、混血児ハーフである事を気にして、彼女を作らないんじゃないだろうな？」

萩人は、少し、驚いた。

「まさか、大丈夫。気にしてはいないぞ。」

「日本ではどうだか知らないが、ここでは普通だぞ。アメリカみたいに、混血の集まりのような国もあるんだ。君は堂々と女の子をたぶらかしていい権利がある！俺が認める。」

「たぶらかすのは駄目だろうが。僕が、彼女を作らないのは、單にもてない男だからだ。」

「また、そういう大嘘を。いいか、今年のヴァレンタインまでには見つけておけよ。あの日に相手がいなのは寂しいぞ？そういうば、日本でも、この習慣はあるのか？」

「いや、ないな。七夕はあるが……少し違うな。」

「なんだ、タナバタって？」

「まあ、話がややこしくなるから、気にするな。」

萩人は、ラベンダーの貴婦人が居た方向を見た。

しかし、既に、そこに彼女の姿は無かつた。

「ああ、わかつた。それとも祖国じこくに愛しい人を置いてきたから、独逸では恋人を作らないんだな。」

「どうか、どうか、と一人で納得している。」

「カールはどうやっても、僕におせつかいをかきたいらしいな？」

「まあ、そうだな。いつもクールな相棒が、恋愛で慌てふためく

姿を拝んでみたいのさ。」

「また、そんな冗談を。」

一人で、笑いあつてゐると、船が出港の合図を高らかに鳴らした。

「おつと、いよいよだな。」

「ああ、楽しみな旅になりそうだ。」

一人は身を大きく乗り出して、見送りの為に波止場にやつて來た

名前も知らない大勢の人々に向て、手を振つた。

乗客乗員一千二百人以上の期待をのせながら、大きい船体がゆつ  
くりと海に向かつて動き出す。

豪華絢爛な姿を、ギリシャ神話に登場する巨人の神になぞらえて、人はこの運命の船を「タイタニックTITANIC号」と呼んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7262y/>

誰ガ為二、華ハ薰ル

2011年11月25日21時11分発行